中に坐せしめ統る所畢く集り、象の牙上より水を太子の頂に流注せしむ、此水を灌き己て、本聲にて三唱す、汝等當に知るべし、太子已に受信し竟ぬ、自今以後有ゆる敕勅皆當に奉行すべしと、今如來法王も亦復是の如し、佛種をして斷ぜざらしめんが爲めの故に、甘露の法水を以て佛子の頂に灌て佛子をして永く斷ぜざらしむ、故に世法に順ぜん爲めの故に此方便印持の法有り、これより以後一切の聖衆に咸く敬仰せられ、亦是の人畢竟して無上菩提を退せず、定て法王の位を紹ぐべしと知て、諸有の所作眞言印瑜伽等の業、皆敢て違越せずと、第三に種類とは、受明結緣、傳法の三なり、此には異說多く、又粗分七灌頂、細分十三灌頂等云へり、第四に作法とは道場外の作法、內道場內の作法の別ありて、之に又各々細別異流淺畧深秘等の分別ありて一定せず。

第二款　投華得佛

灌頂を受くる時、花を曼荼羅會上に投じて、其花の當りし佛を以て、自己の因緣佛、守本尊と爲すを投花得佛と云ふ、大日經疏に曰く、師當に彼が爲めに三昧耶印を結て三返彼の眞言を誦し、花を印の上に置て弟子をして至誠心を以て、道場に向つて之を散ぜしむべし、此の所至の處に隨て當に卽ち是の行人の往昔の因緣と法門の善智識とを知るべし、卽ち此方便門に依て進趣し修行するなり、凡て阿闍梨花の所至處を觀て、其性類を辨ずべし、若し佛首上に墮さば佛項及毫相等を成就す、面上に墮さば應さに佛眼を成就すべし、身の中分に在らば當さに知るべし、諸心を成就す、若し下分に墮さば、諸の使者等を成就すべし、又佛身の上中下分に隨て上中下の成就を知るべし、蓮花、金剛も亦然なり、自餘の尊位は但上中下の相を知れ、若し花墮て彼尊を去ること遠くば久遠にして方に成就すべし、若し供養院に墮ちば所屬の尊に隨て彼の眞言を授けよ、若し兩尊の間に墮ちば當さに其の遠近を觀すべし、若し先づ內院に墮ち卽ち移て外院に出てば彼人は信心具せず、若し强て持誦せば下成就を得べし、諸の界道及び行道院に墮ちば、彼人は決定心成就を得ず、若し彼更に擲たんと欲せば、應さに護摩を作して後に之を擲ぐべしと。

第三款　四種法

息災、增益、敬愛、調伏、此を四種法と云ふ、密敎の修法多しと雖も、畢竟は此の四種を出でず、大日經に、事業を分別するに凡そ四分あり、其物類に隨つて當さに用ゆべき所なりとあり、而し此の四種法は金胎兩部に通じ、秘藏記、不空羂索軌經等に其の旨を記し、秘

密瑜伽學習捷圖には之を種々に分類配釋せり、而して上の息災、增益敬愛の三に就ては讀んで字の如く、別に解說を要せざるも、第四の調伏に就ては世誤解するものあり、依て少しく辨ずべし、金剛頂義訣に曰く、諸佛菩薩此法を說くは智者の爲に說く、愚人の爲めにせず、然る所以は佛滅度の後多く惡人ありて、大勢力を恃んで邪道に順じて正法を信ぜず、三寶住持の相を破し、諸の衆生をして涅槃の眼を失はしむ、悲哉愍むべし、此法を以て菩薩の心を治せよ、此法を行ずることは利益の爲めなるが故に大功德あり、審かに觀すべし、利無くして惡心を起し衆生を損害すれば大重罪を獲、佛の之を制し給ふ所なり、輙く作さしめずと、秘藏記には調伏の法を說て曰く、調伏の法は黑月の日中と亦夜半とを取て起首せよ、善惡の日を論ぜず之を行ふ、三時に行ずることを得ざれ、若し急速ならば白黑を論ぜず其火曜星宿等尤も吉し、行者の面を南方に向て蹲踞すべし、右の足を以て左の足の上を踏む、卽ち自身法界に遍じて青黑色の三角の曼荼羅となるを觀ずべし、我身は一法界なり、我が口は卽ち爐の口なり、我れ降三世忿怒尊を以て眷屬圍繞せりと、又想ふべし彼の惡人の身を壇の上に追ひ置て、大智火を放て我が身人中の業煩腦及び彼の惡人の貪瞋痴並に所作の惡事を燒淨し、彼此平等に法の利益を蒙て長壽福樂を獲得すと、檜尾口訣には調伏法を四種に分ち、一には攝化降伏人非人等を調伏す、二には除難降伏王難怨難等を調伏す、三には無名降伏佛法中の苦惱を拔去る、四には悉地降伏諸邪法の障礙を除去すと云へり。

第四款　眞言

眞言とは諸佛菩薩の本誓を說きたる梵語を云ふ、又は呪と稱し、明と稱す、此の諸佛菩薩の眞言を誦すれば、無量の功德を成就するものと爲せり、大日經疏に、眞言梵には漫怛羅と曰ふ、卽ち是れ眞語如語不妄不異の音なり、龍樹の釋論には之を秘密號と謂ひ舊譯には呪と云ふ正翻にはあらざるなりとあり、此の眞言には不可思議の靈力あれば一遍誦すれば其の眷屬を守り、三遍誦すれば其の國土を守る等の語多く經軌に見えたり、而して眞言の形より分類すれば、大呪又は根本呪、大心呪、中呪又は心呪小呪又は心中心呪の三あり、又眞言の字義より云へば、種子と名と本誓との三種に分れ、之に多く歸命と成就の句を附せり、又眞言の初めに唵字を用ひ、或は南莫字を用ゆるとあり、大日經供養法には、眞言の初に唵字を以てし後に莎訶を加ゆるは寂災の用なり、若し眞言の初めに唵字を以てし後許發を加るは召攝の用なり、初後に納麼あるは增益の用なり、初後に許發あるは降伏の用なり、許の字發の字は三處に通ず、其の名號を增

するとは中間に在り、是の如く眞言の相を分別す、智者當に悉く知解すべしとあり、之れ四種法に由りて多少の差異あるものなり、又眞言宗に於て在家出家を問はず、旦夕念誦する所謂光明眞言は、一切諸佛菩薩の總呪と稱し、明慧の頃より弘く世に行はれたり、其の大意は、唵(歸命)阿謨伽(不空)毘盧遮那(大日)摩訶(大)母捺羅(印)摩尼(寶)鉢納摩(蓮華)入縛羅(光明)鉢羅韈多野(轉)吽(菩提心金剛不壞の義)不空大日如來の大印は寶蓮華光明を具し、罪禍を轉滅して菩提を證得せしむとの意なり、之を印は金剛部、轉は轉法輪羯磨部となし、佛寶蓮三部を加へて五部五智五大となし、諸罪過を直に衆生本具の五智の功德相と開顯すとせり、光明眞言儀軌には、此は大毘盧遮那如來、無量壽如來兩軀の如來心中呪なり、一遍を誦すれば百億無量の大乘經百億無量陀羅尼を誦し了ると爲す、最も此は大毘盧遮那如來肝心秘密呪なりと、又若し死者の爲めに此眞言一遍を誦すれば無量壽如來死者の爲に手を授けて極樂淨土に引導せん、呪七遍若くは十、二十遍誦せば功德更に量るべからず、若は墓所に至て四十八遍を誦すれば、必ず無量壽如來此の靈を荷負して決定して極樂淨土に生ぜしめんと云へり。

第五款　印契

印契とは梵語の目帝羅なり、印とは印可決定の意にして、諸佛は法印を結びて其本誓に違はざるを約し、行者は之を結びて諸佛の本誓に必ず一致すべきを決定す、故に行者の結ぶ手印僅かに十指の屈伸に過ぎざるも、其變化は無盡にして如何なる意義をも顯はすことを得るものなれば、此印契は卽ち小宇宙卽ち宇宙の縮圖たるべきものとなせり、左れば一指の屈伸も實に重要にして、火指を屈すれば火滅し、水指を立つれば水湧くものと爲せり、例へば銃を以て人を殺すと否とは、指頭五分の屈伸如何に由りて決せらるるが如きものたるなり、大日經疏密印品に曰く、善無畏三藏の曰く、西方には尤も印法を秘す、作す時は又極めて恭禮す、必ず尊室の中及び空淨清潔の處に在て嗽ぎ塗香を以て手等に塗り、方に作すことを得、又作す時は須らく威儀を正し跏趺等に坐す、爾らざれば罪を得て法をして速かに成すことを得せしめず、とあり、又靑龍儀軌に曰く、契を結ばんと欲せば、敬て十方三世の諸佛に白せよ、我等下輩愚鈍の凡夫、此印を掌持すと雖も、蚊蟻の須彌山を掌るが如し、恐らくば勢力なけん、只願くは諸佛我等を加護して我をして無上正覺を成すことを得せしめたまへ、此印を結持すれば佛の勢力に同じ、此語を發し已て誠を至して禮拜せよとあり、慈氏瑜伽法に曰く、己を印

し他を印すれば皆本體三摩耶の身となる、凡愚は見ずと雖も、一切聖賢、天龍八部、諸鬼神、及び毘那夜迦は皆本尊の眞身と見る、諸の護法明王等此が爲めに親近して、俱に相助けて悉地を成ぜしめ、速かに成就するを得と、又陀羅尼集經には、露處に印咒の法を作さば、惡鬼神の爲めに便を得せしめんと云ひ、又像の前にて印を作さば袈裟を以て覆ひ、或は淨布を以て覆ふべしと云へり、卽ち結印は顯露に爲すべからずといへるなり、然れども台密にては顯露に結ぶを常とせり。

印契を單に印といひ、眞言を明と稱し之を合して印明と云ひ、印と明とは鳥の兩翼、車の兩輪の如しと爲せり。

第六款　護摩

護護は不淨を燒き淨むる法にして、灌頂には中間護摩あり、諸尊法には皆護摩法を附せり、密敎にては最も行はるゝ所なり、元來護摩法は事火婆羅門の作法にして、一に火食と名け、天上に在す神に供物を達せしめんが爲めに燒きて之を煙と爲せしものなり、然るに密敎にては之を轉用して種々の意義を附せり、大日經疏に曰く、佛此說を作す所以は、諸の外道を伏して正邪を分別し、彼をして眞の護摩あることを知らしめんと欲するが故にとありて、彼の外道を方便引入せんが爲めに修するを本意とせり、而して此護摩を作壇修法するものを外護摩と稱し、觀想上にのみ行ふを內護摩と云ふ大日經疏に曰く、外護摩を釋さば其に三種あり、一には本尊、二には眞言、三には印なり、本尊とはまた供養の爲めの故に之を置く、所宗の門に隨て而して之を置く、或は火の中に是曼荼羅の位あるべし、更に問へ、二に眞言とは爐なり置火の處なり、此は卽ち眞言なり火中に有るなり、三に印とは卽ち是れ阿闍梨の座處なり、自身卽ち是れ印なり、當さに外護摩を作す時は、此三位をして正しく相當せしむべし、此三は亦是れ三業を淨むる義なり、本の三位とは謂く身と爐と本尊との三位なり、各々三位有り、本尊と眞言と印となり、三業を淨めて三事(息災、增益、降伏)を成ずるなり、尊は是れ意業、眞言は是れ口業、師身の印は是れ身業なり、此因緣に由て能く三業を淨めて三事を成ず、と又內護摩に就て、大日經疏に曰く、護摩は是れ燒の義なり、護摩に由て能く諸業を燒除す、一切衆生は皆業に從て生じ、生ずるに由て業を轉ずるを以て輪廻已むことなし、業除を以ての故に生も亦除くことを得、卽ち是れ解脫を得るなり、若し能く業を燒く者は名けて內護摩と云ふなり、何の處に從て、解脫を得るや、謂く煩惱業苦に從て解脫を得るなり、既に世間を離るれば卽ち種子を生ず、謂ゆる自淨の菩提心なりとありて、外部の

事相に依て內心の煩惱を燒き盡すものあり、故に又大日經疏に、囉子を觀ぜよ、周匝して火鬘あり、此を想ふて其身に周遍せしめよ、其身又刀と索とを持せよ(不動明王を觀る法)此囉子門を以ての故に諸業を盡くし、諸障を淨除する事を得て、業障を淨め已て自淨の種字を生ずることを得とあり、此の內護摩の意を得ずして、單に護摩を作さば所謂事火外道と異なるなし、左れば大日經疏にも、眞言行者但世諦の護摩を作して此中の密意を解せざれば、則ち葦陀の火祀と豈相濫せざらんやと云へり、猶此の護摩の實際作法に就ては東密台密の相異、東密各流派の差異あり、又孰れも煩瑣の方式ありとす。

第七款　聲　明

聲明とは梵唄聲曲を云ふ、元來は印度五明の一にして、弘法大師は東寺年分度者中に聲明業一人を置きて、梵語を習ひ、聲音の凡てを司らしめしが、後に此の聲明なる語は單に梵唄を歌ふの意、卽ち歌詠法となれり、顯敎にては經文長ければ其中の好辭を選びて誦すると云ふに過ぎざるも、密敎にては此讃詠法を尊重し、時處軌には、是の秘密瑜伽歌詠の讃を陳べて如來を歎揚するが故に成佛尙難からず、況や諸成就を求むるをやとありて、歌詠卽ち成佛の緣となる者となせり、今日の密敎法會にては、導師は密法を修するも、其他の職衆は皆此音譜卽ち博士を附したる聲明を謠ふものなり、而して聲明の組織は、五音三重譜を作り、音の高下十一位を分ち、一越、雙調、黃鐘、平調、盤涉の五調子を根本と定め、之に呂律、中曲、變音の四曲の變化を立て、此四曲に依て曲の性質を定む、而して此五音五調子は密敎の五大五智と配し、呂律を金胎となし、中曲を不二の曲とし、此の重々の變化に依りて聲字卽實相の旨を示し、宇宙の秘鑰を開くものとなす、故に顯敎の如く化他の方便として謠ふものとは其根底を異にせり、故に此等の秘曲は大日如來より嫡々相承し、龍猛が南天の鐵塔を開きたるも、此聲明に依るものとなせり。

第八款　正念誦

正念誦とは、其本尊の眞言を誦し、本尊と彼此涉入を觀ずる法にして、口密に依りて本尊と行者と同體無二の觀に入るものなり、其所作は先づ念珠を蓮華合掌の內に入れて、之を胸の前に當てて加持し、次に發願して、我欲拔濟無餘界、一切有情諸苦難、本來具足薩般若、法界三昧早現前と誦して大勇猛心に住し、念珠を兩手に採りて心に當て、本

尊の心月輪の上に陀羅尼の字あり右に旋て列り住す、我心月輪の上に陀羅尼の字あり亦復此の如し、本尊の誦し給ふ眞言の字、本尊の御口より出て我頂より入て心月輪の上に至て右に旋て列り住す、我誦する眞言の字本尊の臍より入て心月輪の上に至て亦復此の如し、本尊と我と無二同體なりと觀じ、其の本尊の眞言を緩ならず急ならず誦す、其の數は二十一遍、百八遍若くば千八百遍等一準ならざるも、本尊の口密と我口密と平等ならしむることを忘るべからずとなせり。

第九款　入我我入觀

入我我入觀は既に先きに三三平等觀を論ずるに當つて、大要之を說きしも、猶少しく解說せんに、此は本尊我に入り、我れ本尊に入り、本尊と我と無二平等なるを觀ずるものにして、此觀に住すれば行者は本具の覺性を發現することを得となせり、今其觀法の一例を擧ぐれば、行者法界定印又は彌陀定印を作し、身體を平正にして我胸中に阿字あり變じて月輪となる、月輪の上に鍐字あり變じて法界塔婆となる、塔婆變じて大日如來となる、身體白色にして五智寶冠を頂き結跏趺坐して大智拳印に住し、背後に圓光あり萬德莊嚴し、如來の頂上より白色の光明を放つて十方世界を照らすと觀じ、次に我と壇上の本尊と平等無二ならしめ、次て一切有情の胸中にも亦阿字ありて本尊となると觀ず、一切有情此理を知らずと雖も、我と本尊との功德力に依て、一切有情の心佛も亦本尊と同一體なることを得、本尊と我と有情と是三無差別なること明鏡に相映じて互に影現涉入するが如きの境に達すべし。

第十款　字輪觀

文字を月輪の上に順逆自在に觀ずるを字輪觀と云ふ、卽ち意密を本尊と無二一體ならしむる觀念なり、先づ法界定印又は彌陀定印に住し、我心月輪の上に、阿縛羅賀佉の五字右に旋つて住すとなし、冥想して阿字諸法本不生不可得なるが故に、縛字自性言語不可得なり、縛字自性言語不可得なる故に、羅字塵垢不可得なり、羅字塵垢不可得なるが故に、佉字等虛空不可得なりと順に觀じ、更に佉字より逆に觀じ、此の如く順逆に觀じて阿字本不生の理に住して言亡慮絕の境に入るなり、此字輪觀に四種あり、又心月輪の觀じ方あり、今之を略す。

第十一款　阿字觀

阿字觀は眞言密敎の尤も尊ぶ所にして、之に關する著作も亦頗る多く、其作法は簡なるも其意は深甚なりと爲せり、大日經悉地出現品に、阿字門を以て出入の息を作し、三時に思惟せよ、爾時に能く壽命を持て長刼に世に住すと說き、大日經疏には、最初の阿字は卽ち是れ菩提の心なり、此尊を觀じて而も與に相應すれば、卽ち是れ毗盧遮那法身の體に同じきなり、此阿字の輪を觀するとき、猶孔雀の尾の輪の光明の圍繞するが如し、行者其中に住すれば、卽ち是れ佛法に住するなりと釋し、而して其作法に就て同疏に、少し促て其咽を太だ曲と直とにせざらしめず、舌亦高下所を得て心中に阿字を觀ずと說き、無畏の禪要には、夫れ三昧に入らんと欲せば初學の時は、事の諸緣を絕し緣務を解除し、獨一靜處にして、半跏にして坐し已て、須らく先づ手印を作て護持せよ、頭を直ぐ平に望むべし、眼を過開すべからず、又全く合すべからず、大に開けば心散じ、合すれば則ち惛沈す、外境を緣ずることなく安坐せよと云へり、又菩提心論には、印を以て阿字を自身に招入する法を說て、八葉の白蓮一肘の間、阿字素光の色を炳現す、禪智俱に金剛縛に入れて如來寂靜智を召入すと云ひ、大日經には、彼の蓮華の處を念ぜよ八葉の鬘鬚蘂花臺に敷て、阿字門の焰鬘皆好妙なり、光暉普く周遍して衆生を照明するが故にとあり、其の圖は蓮花の上に月輪あり、其の月輪中に阿字を書す、是れ胎藏界に依りて書するなり、而して蓮花は胎藏界、月輪は金剛界なれば、若し金剛界に作らば、月輪中に蓮花を畫き、其の蓮上に阿字を書すべし、尙此蓮月を置かず、單に曉霧の中に阿字を書するものありて、之を深祕とも云へり、次に其の觀想法は、聲と字と實相の三種あり、聲とは出入の息每に阿字を誦するものにして、字とは字相と字義とを觀ずるものなれば聲よりは深秘なり、實相とは阿字の眞實義たる宇宙の實體を觀ずるを云ふ、而して此の如く自身外に阿字を觀ずるは有相淺略の觀にして、是を心內に觀ずるを無相深秘となす、大日經疏に曰く、卽ち自心を觀じて八葉の蓮花を作せ、阿闍梨曰く、凡人の汗栗駄心は狀猶蓮花の合て未だ敷かざる像の如し、筋脉有て之を約て以て八分を成す、男子は上に向ひ、女人は下に向ふ、先づ此の蓮を觀じて其をして開かしめ、八葉の白蓮花の座と爲し、此の臺上に阿字を觀じて金剛の色と作すべし、首の中に百光遍照王(大日如來又は暗字の二義あり)を置け、而して一切の無垢眼を以て之を觀ぜよ此を以て自ら加持するが故に毘盧遮那の身と爲ると、之れ宇宙の本體たる阿字を觀じ之と一致融合し、自身卽小宇宙となりて、一切萬法に大自在を得となせるものなり。

第十二款　五相成身觀

五相成身とは堅に行者が佛となるの順序を觀じ、三密は横に本尊と行者と彼此渉入を觀ずるものなり、今五相を左に圖表すれば、

一　通達菩提心……自心を觀ず……
二　修菩提心……自の菩提心を證す……　種字の位
三　成金剛心…本尊の三形を觀ず……
　甲　廣金剛…本尊の三形を法界に周遍せしむ……
　乙　斂金剛…其大三形を自身の量とす……　三形の位
四　證金剛身…本尊の三形自身に入る……
五　佛身圓滿…本尊と自身と冥合して佛身を圓滿す……尊像の位

先づ趺坐して支節を動搖することなく、二手定印を結び臍に附し、息を止めて微細ならしめ、一切法性は自心に依るを諦觀す、始めの通菩提心とは、自心の相を觀ずるに煩惱の爲めに覆はれて、恰も月輪の輕霧の中にあるが如くなることを知る位にして、此の自心は月輪なれば本來明了なるものなることを證得するは、第二の修菩提心なり、自心を知る心漸く舒びて大千世界を覆ふと觀ずるは廣金剛觀にして、此の廣大となりたる自心が漸く小となり故の如くなれりと觀ずるは斂金剛觀なり、此の廣斂の觀に依りて人天鬼畜草木國土も我と冥合一體となる、本尊も自ら我と同一體なるを觀ず、是れ第四の證金剛身なり、本尊と我と一致し、其の功德廣大無邊なりと觀ず、是れ第五の佛身圓滿なり、之れ自心の觀じ方の一義なり、又種三尊の順序に依る觀じ方は、第一は自心は輕霧の月輪中に在るを觀じ、第二は自心は滿月輪の如く觀ず、此自心は卽ち種字なり、第三は此の滿月輪の自心の中に佛の三形卽ち不動明王なれば利劍、觀音なれば蓮花ありと觀じ、之を廣斂卷舒して第四に至り、佛の三形を自心の三形に入れ、第五に及んで此三形を變じて佛身圓滿の體となすなり。

第十三款　三密觀

三密觀は前に云へる如く、横に本尊と行者と彼此渉入を觀ずるものなり、手と舌と心の三處に吽字五股杵を觀じて、身口意三業の垢を除き、身口意の三密に三部諸尊の功德を開顯するを云ふ、行者につきて三密觀と稱すれども、所觀の物につきて三金剛觀、三金觀、三吽觀とも名く、秘藏記には、斯の㕣吽字を以て身口意に安置し、五股金剛と觀じて加持すれば、則ち能く無始以來の三業の罪障を除滅すること、金剛の能く一切の物を摧破するが如しと云へり。

第十四款　五輪塔

塔とは梵には窣都婆、又塔婆、浮都、制底と云ふ、固と釋尊の舍利を安置したるに起り、墳墓又は廟の意なるも、密敎にては之を大日如來の三昧耶形と爲し、大日經疏には、之を本有心源の一大塔と爲し、制底とは是れ建立高勝の義なり、謂く此人常に能く白法を建立して、志屈撓せず、未だ現に聖敎を修せずと雖も、當さに知るべし先世に福を樹て內に善根あり故に名て塔と爲すと、又制底と質多と體同じ、此中秘密は心を謂て佛塔爲すとあり、而して之に本有塔卽ち五輪塔(胎藏界の塔)と、修生塔卽ち多寶塔(金剛界の塔)とあり、前者は五字所成、地水火風空の塔にして一切萬法を此中に藏し、吾人の肉身亦此の五輪塔なりとす、其下層方形、次の圓、次の三角、次の半月、頂の寶形は之を五大五佛に配し、又理智の二と不二とに分ち、現象界と實在界とにも配せり、又金剛界の多寶塔は𑖀字所生識大に當るものと爲せり、又墓所に立つる塔婆も是と同じく、其梵字の書き方等種々の理解あり、尊勝陀羅尼經には、其功德を細說せり、之を要するに塔は大は宇宙を表し、小は吾人の體を現はし、金胎兩界大日如來の現相を示せるものなり。此他印度の武器を轉用して法器と爲せし三股五股等の金剛杵の如き、又如意寶珠の

如き、說くべきもの多かるも準じて之を知るべければ、今は之を略す。

附記

實地觀法論

此の一篇は予が佛敎、特に眞言密敎の觀行に於ける骨髓と信ずる所を拔き、之を時代的に活應し、且つ多年實驗の上、明治四十年時代宗敎誌上に於て、世に紹介せしものなり、今眞言密敎の實踐修法を論ずるに當り、之を附錄して、聊か一考に供せんとす。

世は如何に進步しても、人生は不如意を免れぬ、此の世は半面より見れば、どうしても苦界である、平和といひ、文明といふ、而かも爭鬪敗德は公々然として遂行せられつゝある、此の土は實に穢土と云ふても差支はない、主觀的に吾人の頭の中に欝結して、容易に解脫することの出來ぬ不平苦痛妄想、又客觀的に社會の不如意不自在、斯の主客兩境に於ける苦惱を超脫して、絕對的の樂天地に逍遙し、自在の生活に入るのが宗敎の最局目的であることは、今更新しく謂ふまでもないが、此の最高目的地に到達するには、如何なる方法手段に依ればよいかと云ふに、そは勿論種々あるけれど、つまり絕對本尊卽ち所謂神佛に歸依信任するのと、一定の秩序を踏んで力行修養するのとの

二つに過ぎぬのである、甲は卽ち信仰論、乙は所謂自修論である、而して此の自修の一種として、觀法なるものがある、吾人は今茲に佛敎觀法の大體を骨子として、此れに自己の實驗を調和して、左に順次之を略叙し、大方の參考に供せんとするのである。

一　數息觀
二　治慾觀
三　月輪觀
四　實相觀
五　自然觀

一　數息觀

此は吾人の頭の中に妄念の在るのを拂ふて、無念無想の境界に入らんとするのであつて、腦病、神經痛、心配のある者等は、大にやるべしである、其の方法は、先づ可成靜なる一室を清掃し、一切の器物を取片付け、眼に障はり、耳を衝くようなもののないようになし、他の香臭等を防ぐ爲め、上等の線香にても焚き、暑からず寒からざるように注意し、冷水浴にてもやりて自己の身體を清潔にし、尻膝の痛まぬやうに座蒲團を敷き、半跏とて一種のあぐらをかき、兩手を組んで下腹の所に當て、下腹に充分力を入れ、半眼にて眼の高さと同一程度の一點に落睡し、總ての態度は體操の氣付の姿勢に則り、斯くて深呼吸を爲し、一より十まで其息を數ふべし、此れ卽ち數息觀の名稱の起る所以である、呼吸を數ゆるは他の妄念を防ぐ爲め、又十までにして一に返るは、十以上は數ゆるに困難であつて、却つて數に執着し苦しめらるゝからである、斯の如くして三十分間又は一時間、若しくば二時間も毎朝又は朝夜二回宛やれば、最初は却つて妄念が湧起するけれど、三ヶ月、半歲、一年と經てば、心神次第に淸爽になり、記臆力判斷力共に頗る强く、難解の數學等にても平易に解答を得るようになる、而して此を三箇年も續くれば、線香の灰の落つる音か軒の雨滴の音のように聞ゆるようになつて、何とも云へぬ好い心地になるものである、そうなればもう占めたもので、それ以上の妙味は實驗して自ら味ふの他はない。

二　治慾觀

慾と云ふのには種々ある、食慾、淫慾、財慾、名譽慾等は、其の最なるものである、尤も食慾淫慾等なども、生理的本能的に發作する或程度までは咎むることは出來ぬけれども、特に多くの美味を貪り、又淫慾に惑溺するが如きは、大に警戒を要する所である、夫て此等の慾念を制治することは、人生の要務である、殊に青年時代には尤も肝要なる事

てある。

先づ美味の貪慾を治するには、膏肉之れ糞尿なりと觀ずるものにて、此に關する書畫にても掛けて之を觀じ、食は體を養ふに足れば可なり、美味必ずしも攝養たらざるの理を觀じ、粗食に、又は寡食に堪ゆるの意を強くすべし、元來粗食も習慣となれば決して衛生に危害あるものではない、美味を重ぬれば胃腸を損ずることが甚しい、殊に一家の生活費は美味の爲めに浪費することが尤も多い、生活難は大抵飲酒と美味とより來るものである。

淫慾を制して一定の習慣を作ることは、人生の最大急務である、朝に紅顏ありと雖も、夕に白骨と爲る、上皮一枚引剝けば均しく之れ糞袋たることを觀じ、美姫の舞姿と相並んで白骨の扇子のみ以前に變らぬ繪等を掛けて淫慾は精氣を耗するの大なるもの、不正過度の愛慾は人生の最大苦惱なることを念すべし。

名利の慾は飽くことなくして、遂に自ら撃縛せらるゝものなり、君子は屋漏に恥ぢず、命臨終の時王位珍寶妻子隨順せず、唯だ戒と施のみ今生後生伴てあるとの意を念じ、名利は永く己と人とを誤り、不放逸擅施は永世に功德を存し、不死不朽なることを觀じ、一方に妄想を除斥し、一方に眞實の絶對の勇氣を喚起し來るのが肝要である、此を消極的とか、意氣地なしになるのと同視してはならぬ。

三　月輪觀

春月の艶なる、夏月の麗なる、秋月の清なる、冬月の嚴なる、孰れにしても月は清淨なるものである、何人も此の月に對しては惡念を支持するの力を有せぬ、月輪觀は固より詩的である、宇宙萬有を詩化して、自己の腦裡を清淨にするのは月輪觀に若くものはない、明窓淨机の下、或は丘上、或は海邊湖畔に在つて、靜夜月光に對するの時何人か神化せざるものあらんや、殊に曉月、萬象悉く眠つて宇宙未だ醒めざるの時、曉月と我、天地只此の二象のみ、月我に入り、我れ月に入る、月が我か、我が月か、心身全たく脫落して乾坤我と俱く鎔く、塵界の俗情最早犯す能はず。

四　實相觀

之れ宇宙の眞相如何、人生の歸趣如何と觀ずるものである、人一度此の問題に遭遇したならば、宜しく靜座して眞摯に其の解決に努めねばならぬ、一週間や十日位は寢食を廢しても構はぬ、よし夫が最高の解決、究竟の眞理でなくてもよい、兎に角自分丈の自覺、一種の何等かの解決を下さねば止めてはならぬ、そうして其の得たる所の解案自覺に據つて人生に處して誤りなきや否やを尤も大膽に試驗して見るがよい、而し

て夫が彌々大丈夫となれば、そこに始めて主義とか信仰とかいふものが成立したのであつて、財産も生命も一切のものは此の主義信仰を中心と爲し、其の犧牲と爲つて活動するようになる、それが卽ち僞なきの存在である、醉生夢死でなくて、意義ある生活である、一舉一動悉く天眞である、皮相の觀察や、惑へる社會から見て惡であるかの如き事であつても、矢張り大聖の活動である、經世濟民的の健鬪であるのである、そうなれば最早毀譽も以て動かすことは出來ぬ、刀鏖を以て威すことは出來ぬのである、

五　自然觀

江上の風月、靈岳、碧水、之れ自然が吾人に寄贈したる所の無盡の寶である、此の寶は金力でも權力でも私することは出來ぬ、而して如何に貧賤のものと雖も、遠慮なく悠々と之を弄び、之を樂むことが出來る、此の自然の美、無盡の寶を樂むことの出來ないものは、縱令位人臣を極め、富巨萬を累ぬと雖も、其の實は甚だ小さく、甚だ憫れなるものである。

金力と權力とは人生非常に貴ぶべきものではあるが、多くの場合に於て、人を害し、又己を誤るものである、天然と樂み、自然に同化するものは實際的の成佛である、天然の美は吾人の精神界裡より種々の汚穢なる思想を洗ひ去つて、綽々たる餘裕を與ふるものである、過敏なる神經を緩和して肉體上に大なる休養を與ふるものである、金力と權力とがなくしても、心は長閑である、破衣粗食否多少空腹でも身體は豐で强健である。

心身の穢と疾患とを除くのは自然に同化するより優ぐれたものはない、戚々として權に縛られ、金に括られ、又腐敗せる市街の屋內等に籠居して出づる事を知らぬのは實に自然の寶に棄られ自ら牢獄に繫がれて居るものと謂はねばならぬ。

元來宗敎上の信仰とか、安心とか、云ふものは、偉人の感化に由つて得らるゝこともあり、又深く理性に訴へて自覺し來ることもある、然れども偉人は常り在らず、哲學的自覺は何人にもは望まれぬ、只尤も普遍的であつて、併も時と所とを撰ばず、到る所、欲する時に應じて感化を與ふることの出來るものは天然の美である。

眼を開けば天に日月星辰あり、地に山河あり、耳を聳つれば鳥の囀づるあり、虫の鳴くあり、春花秋草は足の動く所に從ひ、翠綠皎雪は身の在る所に從ふ、秩然亂れざる一定の大法の下に、而かも變化あり曲折あり、奪ふて盡さず、樂んで減ぜず、尤も自由に、尤も萬全なるものはそれ自然の美か、人爲の書畫管絃、美は卽ち美なりと雖も自在ならず、雄大ならず、然るに人多くは人爲の美にあくがれて、自然の美を顧みざるは何んぞ、蓋し

彼等の眼界小に、理想卑くければなり。

全智全能の神、大慈大悲の佛、宇宙の大精神、吾人は其の虚實を確むる能力を有たぬ、只吾人の實際に感知し、關係し得るものは天然の他にはない、太陽が單に火の球であるとしても、月の光は反射に過ぎぬとしても、又鶯の鳴くは雌を呼ぶのであるとしても、科學的には如何に器械的であつても、大海原の彼方に旭光のさし登る雄偉の光景、さては夕陽、又月は大空に横はつて千里明らかなる有様に對し、或は鶯の聲を聞いて、吾人は單に器械的に感ずる事は出來ぬ、雨は水蒸氣の寒熱に依て循環するもの、雷電は電氣の作用に過ぎぬといへば、それ迄であるが、而し吾人は迅雷風烈必ず變ずるものである、自然は如何に器械的であつても、吾人の感ずる所は神秘的である、吾人は宇宙そのものを大活物一大大日如來と觀じ、天然そのものを直ちに神視するのである、太陽は日の神である、月も星も神である、風の神、雨の神、大山も江海も自身それ直ちに神であると考ゆることが出來る。

自然神教は之れ實に太古野蠻人民の宗教である、又小兒の思想である、併し吾人は赤兒の心に歸るのである、太古の野蠻人民の信仰は事實である、空想ではない、理窟ではない、吾人は文明教と非文明教とを問はぬ、自然を神視し、自然に同化することを欲するものである。

苟くも宗教的信念の確立を期するもの、若しくは人生の趣味を解せんとする者は、須らく自然を樂め、野卑なる偏僻なる煩悶を去つて心身の安靜堅實なるを得んと欲するものは、只將さに自然の感化に由つて、自然に同化せよ。

自然に同化する方法如何、朝夕の散歩可なり、一日の郊外遊歩可なり、月に幾回の遠足不可なし、年數回の旅行甚だ好し、之等は普通の法なり、若し特別の法にていへば佛教の雲水甚だ宜し、普通旅行にても雲水的ならざれ効少なし、金あり同伴者あれば弊あり、金は自然に遠かる媒を爲し、人は二人以上相寄れば虚飾其間に生ず、人は固より社交的の動物にして、社會組織上には仕方なけれど、社交には半以上の虚僞あり、心的修養には伴を要せず。

三界無住方所を定めず、時間の制縛を受けず、餓へて始めて食を求め、樹下石上に眠る、悠なる哉〳〵天地が我か、我が天地か、陶然として自然に同化し、天眞玲瓏一點の虚と汚となし、之れ雲水の眞狀なり。

人は空腹の經驗なきものは共に語るに足らず、野宿の經驗なきものは、俱に謀るに足らぬのである。

雲水の實踐之れ實に天然三昧觀なり、斯くて心身共に綽々として餘裕を得、絶對的樂天に入り、翻つて塵世社會に處す、無我の大我、法爾自爾の大活動は自ら起り、千歳不滅の大業は自を發起せらるゝのである、之れ卽ち神なり佛なり。

第十一章　本地說と加持說

眞言宗古義新義の二派は、敎理上の意見を異にせり、而して、其の基づく所は本加の二說に在り、本加二說とは、大日經の敎主を本地身又は自性身卽ち自性法身となす古義說と、自性法身の位は所化の機根を絶する故、加持身に降つて說けりとする新義說との別なり、此の兩說は哲學的にも、又は信仰的にも頗る重要なる、有趣味の大問題なるも、今玆には、單に各派の要旨及其の兩義の調和說を略述するに止めん。

第一節　本地說の要旨

本地說卽ち古義の唱ふる所にして、法性、道範、信日等多少異議あるも、今主として宥快の說を上ぐれば。

一行禪師の大日經の疏に、敎主成就の薄加梵の句を以て、卽ち毘盧遮那本地法身と釋せり、又弘法大師は二敎論に於て、三身四身を分別し、自性法身を以て密敎の敎主と判して、自受法樂の爲に、各三密門を說くと釋せる故、いふ迄もなく、大日經敎主は本地自性身なり、又敎理上より推すも自證の極位に體、相、用の三大が存せざれば、顯敎の豁虛無物の空理に墮するものなれば、極位にても三大は歷然として具せざるべからず、既に相用ありとすれば、其用大の中の語密如義語の說法にあらずして何ぞや、又極位に於ても六大法身の色心を存することは異議なき所なり、既に色心を存しながら、說法なしと謂はば、三密不齊となりて、彼此の異因不可得たるにあらずや、自證の極位にては機根を離絶すとなすも、表德の極位なるゆへ說法あるべきは無論なり。

云々と、委細は宗議決擇第九に在り。

第二節　加持說の大要

加持說は弘法大師四世の孫、般若寺觀賢、其著大日經鈔に加持身とは曼荼羅中台尊なりと釋し、又宋には覺苑演密鈔に加持說を唱へ居れり、興敎大師は灌頂一異義に相、用、體に入つて法界寂然、相、用、體を出てゝ三密顯現と說き、又瑜祇經には我本と言說ある

ことなし、但だ利益の爲めに說くとあり、大日經具緣品に於ては當來世時に於て劣熹諸衆乃至彼等を度せんが爲めの故に、隨順して是法を說くといひ、一行禪師の說には極位は言語盡意、心行亦寂といへり、是に依て賴瑜聖憲の兩師は左の如き意味の議論を爲せり。

一體密敎の法門は遮情表德の二重ありて、其表德を古義にては二重に分ち、新義にては賴瑜法印は三重に分ちて、有相の有相、無相の有相、無相の無相となしたり、有相の有相とは、有相劣惠の機根に對する能被の敎にして、擇地、造擅、眞言、手印等を形の如く爲す法門なり、無相の有相とは擧足、下足皆密印を成すといふ如き法門にして、無相勝惠の機根に對する敎なり、無相の無相とは自證の極位にして、此位は冷煙自知、他の機緣を絕せるを以て、相用は體に居して法界寂然たり、故に無說法と謂はざるを得ず、元來說法なるものは皆利他の爲めなり、左れば機緣の及ばざる所にては說法の必要なし、故に因位の大悲願力に促され、自證極位を動せずして加持の門に出て、自性身中に加持身を現はし、遠く未來機の爲めに、此經を演說したるものなり、自證極位を動せざるに由りて卽質といひ、未來の機に對する故加持といへるもの、卽ち卽質加持たるなり。

云々と。

第三節　本加調和說

一　惠光の說

南都戒壇院の惠光長老の敎主義に曰く、

如來邊には則ち自證說法、衆生邊には則ち加持說法。

二　曇寂の說

曇叔の敎主義に曰く、

能化に約して自證說に會し、所化の生に就いて加持說に同すと。

之れ惠光の義と大差なし。

三　如幻の說

如幻の敎主義に曰く、

金剛界は秘密心殿にして四種法身共に斯道を陳ぶ、自證說法にして本加を加へず、大悲胎藏は加持の說法にして本地に非らず、故に阿鍍義に曰く金剛界は自受用身の說法、胎藏界は他受用身の說法。

云々と、之れ金胎兩經を以て自證加持を分別するものなり。

四　法住の說

法住の管絃相承義の大要に曰く、

行者進修の上轉證入に約して、正しく多法界の法門を成立す、行者三劫十地の自證の行極つて、第十一地に佛果を證する時、大、三、法、羯の四曼差別の相を改めずして、其儘合して一印の大日に入つて、理々無數、智々無邊の功德顯はるゝものなり、春の花の婉なる、秋の楓の紅なる、曉の月の冴へたる、夕の雪の白妙なる、颯たる松風滔々たる瀑の音、鶏鳴、雀噪、皆是れ四曼の諸相を全ふする實相印なり、此れ卽ち極位自證の說法にして、所謂金剛の智能く胎藏の理を助くる故に能助に依つて多法界といひ、金剛は五智三十七智一百八智等の多差別を以て旨とする、初金後台の法相なる故に、醍醐の事相、野山の敎相は之に依て成立せるなり、金剛頂宗は二敎論に引く所の自愛法樂各說三密等、又た曼荼羅は大、三、法、羯、四印一印相卽宛然たれば自證極位の說法たる疑を容れず。

大日經宗にて具緣品に、自證の極所を、法法位に住し、所說比類なしと說くは極位の說法を示す、極位の說法は上轉の究極に在りて、是れ卽ち其體性に就て云へるものなり、弘法大師は宗義門に依るが故に、多くは極位說法を談ずるも、若し遠く未來機に對し、下轉緣起する義次の差別に約して論ずれば、極位說法に於ては機根及ばざる故に、上轉の究極を、其儘下轉の最初とし、極位不說といへるなり、廣澤一法界の法相、根嶺の敎相は之に由つて成立せるものなり。

自證極意の果は法體に於ては四曼三密等の功德圓かに具足せるも機緣を絕するが故に、相卽無相にして、新古會すべく、又機に對する故に主伴の說聽差別の相緣に隨つて現はる、其重位は自ら下れども神變や自證を動せず、故に新古亦會すべきなり。

云々といへり、此は兩說を其儘採用したるものなり。

五　戒定の說

戒定は疏家たる一行禪師と弘法大師との說を調和して、新古兩義の末節に流るるを破斥して、根本的の調和說を唱へんとせり、其大意に曰く、

兩部の大經に於て、各々說相と如來の微旨、その差別あり、大日經の說相たるや、成佛二利の因緣、皆樹下實成修生の佛に寄せて說き顯はせり、又其微旨とは本有果海の無盡の德相を顯はさんとして、本有を以て修生に寄顯して宜說せるなり、之

に反し、金剛頂經の說相は修生實行の人を誘引せんがために、本有の德相に寄せて之を說き顯せり、其微旨は修生始覺の功德を示し、顯はすものにして、修生を以て本有に寄せて說けり、然に一行禪師は大抵修生の方面より見て解釋し、弘法大師は本有の方面より解釋するを以て、本加の別を見るに至りしものなれど、畢竟各一義に由るものにして、兩義並び存して相戾るものにあらず、之を以て見れば單に一義のみを固守するは偏たるを免れず。

云々と、之も法住の說と髣髴たるも、多少巧みなりいふべき點あり。

之を要するに、一行師の大日經疏の內には、自ら兩義の出て得べき解釋あり、又自證說は龕論門、加持說は細論門といふ說あり、此等は見解の如何に由り如何樣にも論じ得べし、併し一概に斯くと斷定するときは、直ちに缺點を生ずるものなり。

秘密辭林に本地說を解して曰く、本地說は自證說又は古義說とも云ふ、此說は古くは仁和寺濟暹、堀池信證、高野山道範、後には東寺三寶、高野山長覺、宥快、近くは靈雲寺淨嚴等の唱道す、る說にして、新義眞言宗以外の各派は皆此說を奉ず、賴瑜の新義に對して其以前より存在せる說なる故に古義と稱す、此說は顯敎の法身の位は無色無形にして無說法なりと主張するに對し、自性法身が直に說法するを密敎の密敎たる所以となしたるものなり、二敎論には「夫れ佛に三身あり敎は則ち三種あり、應化の開說を名けて顯敎と曰ひ、言は顯略にして機に逗へり、法佛の談話之を密敎と謂ふ、言は秘奧にして實說なり、……如來變化身は地前の菩薩二乘凡夫等に三乘の敎法を說き、他受用身は地上菩薩の爲に顯の一乘等を說く、並に是れ顯敎也、自性受用佛身は自受法樂の故に自眷屬と共に各三密門を說く、之を密敎と謂ふ、此の三密門は所謂如來內證智の境界也、等覺十地も室に入ると能はず、何に況や二乘凡夫をや、誰か堂に昇ることを得ん」と說けり、又自證會に就て曰く、自證會とは大日敎主自性身の說法する會座を云ふ、自證說學派は自性會と自證會を同義に用ゐ、加持說は自性會中の無說法の位を自證會と云ふ、大日經に曰く「佛法は諸相を離れたり、法は法位に住す、說く所譬類なし相もなく爲作もなし」とあるは此の境界にして、森羅萬象其の相を移さずして依然として自性の當體を守り法爾常恒なるを云ふ、卽ち大日經疏に「中臺を以て自證となし外三院を加持となす」とありて、曼荼羅中臺の位なり、されど此の自性會と外三重とは別物にあらざるを以て、大疏第三重には「自性會と加持世界と全く二處に非ず、只十界自位に住して迷を見ざる處を自性會と云ふ」と稱す。

又加持說を解して曰く、大日如來の加持身が加持門に於て大日經を說きたりとなす

說を云ふ、此の說は根來山賴瑜の唱道せし新義にして、其の流を汲む新義眞言宗豐山派智山派は此の說を奉ず、賴瑜以前の學者は他受用身の說とするあり、本地身の說とするあり、中に大日如來の本地身が自證極位に於て大日經を說きたりと主張せし故に、之を古義と稱す、是れ自證說學派なり、抑も加持說の根據は大日經及び大日經疏にして、大日經は皆入阿字門を說き、大日經疏は其意を敷衍し、「此自證三菩提出過一切心地、現覺諸法本初不生、是處言語盡竟心行亦寂」と釋す、是れ金剛頂經は緣起論の敎系に屬するに反し、大日經は實相論空門の敎系に屬するを以てなり、弘法大師は金剛頂經の敎系に重きを置きたるは天台宗よりも華嚴宗を高しと判じ給へるにても知らるゝが、台密の慈覺知證の兩大師始め禪林寺宗叡等は大日經の敎系に重を置きたり、後に大日經疏の研究盛なるに及び、果して大日經疏の本意は何處にあるやを尋るに至り、遂に加持說なるもの出づ、賴瑜は般若寺鈔に「加持身とは曼荼羅中臺の尊なり」とせるを自說の根據として、曼荼羅中臺の尊は本地身に卽する加持身となし、指心鈔に「本地無相の位には永く言語を絕す、加持身は是れ今の經の敎主なるが故に、曼荼羅中臺の尊と云ふ也」となし、「又此の加持身は卽ち自性身にして、永く受用身以下の加持身に異れり、故に具身加持と云ふ也、然るに古德未だ自性身中に加持身有ることを知らず、或は本地身自證會の說と云ひ、而して經疏（大疏）の自證無言の文を害し、或は他受用身變化身の說と云ひ、顯敎の三乘一乘の佛に同じ、恐らくは疏家の深旨を隱し、宗家の本意を失する歟、當に知るべし中臺の尊なるを以ての故に、大師の自性身說法の義を壞せず、又加持身なるを以ての故に疏家の神力加持三昧の說に違せず」と主張す、古來の學者が大日經を單に絕對の本地法身の說法と稱すれども、元來大日經なるものは兼存有相說にして、劣慧の爲めの說法なれば、說者と聽者とある以上は相對界に落在せるものと云はざるを得ず、されど大日如來所現の加持世界の受用身以下の說法なりとせば、顯敎と擇ぶことなきを以て、能現の大日如來の絕對界中に相對（加持身）絕對（本地身）を分ちて、大日經の敎主を定めたるものなれば說としては巧妙なるものなり、此の結果自證說には自證極位と加持世界の二重のみ立つるに、加持說は自證極位と加持門と加持世界との三重を立つ、賴瑜の敎義は根來山聖憲に至て大成せられ、大疏第三重に自證說法、無相至極、加持尊特等の論題を揭げて、自證加持說を對辨せり、後に五智山曇寂の敎系に屬するものは此の兩說を事相上の一法界と多法界との異義に根底を有することを主張す、此の兩說は豐山法住に至て大成せられたりと稱す、今自證說と加持說と台密との大日經敎主に就ての差異を圖示すれば、

自證說（受用變化等流の三身）
- 自性身—本地身—曼荼羅中臺—能現—說者—自證極位
- 加持身—曼荼羅三重—所現—聽者—自證極位（自性會（隨自意の說なれば會座に加持世界の因人なし））

加持說
- 自性身（本地身—獨一絕對身—能現—無說法—自證極位）
- 加持身（加持身—相對曼荼羅中臺—能現—說者）
- 受用變化等流の三身（加持身—相對曼荼羅外三重—所現—聽者）（自性會加持門（同上））

台密の說
- 自性身—本地身—能現—無色無形—無說法—自證極位（自性身說法とは推功歸本して云ふに過ぎずとなす）
- 自受用他受用—一身—加持身—所現—曼荼羅中臺—說法加持世界

如上の如くなれば、自證說は自證極位も自性會と同意なれども、加持說は別意に解し、其他幾多の解釋を異にす、又加持門に就て曰く、加持門とは加持身說法の會座を云ふ、加持說の所立なり、自證說は自證極位と加持世界の二重のみを立つる故に加持門は加持世界と同意となすも、加持說は自證極位と加持世界の間に加持門を立て、上轉二重下轉三重とす、圖示すれば、

自性身
- 本地身（能現）絕對—自證極位—無說法—第一重
- 加持身（能現）相對—加持門—有說法—第二重

受用身變化身等流身
- 加持身（所現）相對—加持世界—聽衆—第三重

又加持身を釋して曰く、自證說に依れば四種法身中の受用身以下の法身にして曼荼羅外三重の位となし、加持說に依れば自性身中に本地身「加持身を分ち曼荼羅中臺の尊となす、抑も此の語は大日經の最初の「薄伽梵住如來加持廣大金剛法界宮」を大日經疏は是を釋して「薄伽梵卽毘盧遮那本地法身次云如來、是佛加持身其所住所、名佛受用身、卽以此身爲佛加持住所」となせるに出てたる語にして、自證說の學者は能現の毘盧遮那本地法身が所現加持身に住して說法すと釋して「如來と云ふは是れ佛の加持身其の（本地身）所住の所なり」と讀み、加持說の學者は能現の毘盧遮那佛に本地身加持身の二あり、本地身の位は無說法にして加持身の位に至て說法するものなれば「如來と云ふは是れ佛の加持身の其（加持身）所住の所なり」と讀む、自證說は加持身を唯相對界の佛身となし、加持說は絕對界中に相對絕對を分ちて、加持身は絕對界中の相對の佛身と判す、又本加和融說に就き大日經疏前文要義の意に曰く、本地說は自證法身中に本地身加持身を分たずして法身說法を談ずるものなるに、加持說は自性身中の加持身の位に至て說法すとなす、此の異議を會合するに、惠光は如來の邊には自證說法、衆生の邊には加持說法と爲し、曇寂は能化に約して自證說、所化に就て加持說となし、如幻は金剛界は自證說、胎藏界は加持說となし、法住は自證說は多法界（廣澤流）加持說は

一法界(小野流)の異となし、戒定は疏家は加持說、宗家は自證說なりとせり、戒定と法住の說は根底同一にして、自證加持の兩說は疏家の一法界說と、宗家の多法界說の異議に外ならずとせり、多くの學者が說法の二字の定義の異にして有說法無說法を論ずるは誤れり。

第十二章　神佛融合史要

第一節　奈良朝前後の神佛混淆

聖德太子が崇佛を中心として、神儒を之に調和せんとせし思想は、神佛混淆の發端にして、彼の役小角、越泰澄等も早くより、神祇を以て佛法の擁護者と稱し、我國神は佛諸天の化現なりと爲して、神佛混合の一派、卽ち修驗道を開けり、又元正天皇靈龜元年藤原武智麻は氣比神社內に神託と稱して神宮寺を創立し、次て若狹比古神社にも神宮寺を建てたり。

聖武天皇神龜二年には宇佐大神託宣ありとて、藥師彌勒の二佛を其の本尊と爲し、境內に寺院を造り佛像を安置す、當時又僧行基は天照皇大神の御心なりとて東大寺を建立し、大佛を鑄り、天照皇大神の本地は盧舍那佛卽ち大日如來にして、大日卽日輪なりと云へり、又此の大佛開眼の際には宇佐大神の隨喜と稱して、其の分靈を東大寺に遷し鎭守と爲せり、此より神前に於て讀經を爲し、佛經佛舍利の類をも神社に奉納するに至れり。

桓武天皇の延曆十三年には宇佐宗形阿蘇の三社に於て讀經し、三神の爲めに僧七人を度し、嵯峨天皇大同四年には諸國名神の爲めに、大般若經一部を書寫して奉讀供養し、文德天皇の嘉祥三年には諸名神の爲めに僧七十人を度し、又神に菩薩權現號を附するに至れり。

第二節　天台宗の神道

日本天台宗の開祖最澄、初め延曆四年日枝の山卽ち比叡山に上りて草庵を結びて讀經し、其の七年山上に一乘止觀院を創立し、二十三年入唐せり、斯くて歸朝の後、支那天台山山王明神の示現と稱し、日枝の山に古來祀れる大山咋命卽ち日枝神を山王權現と稱し、本地は釋迦如來なりと爲し、以て佛法守護、特に天台法華の鎭守と爲せり、是れ三寶輔行記、延曆寺護國緣起に記する所なり、又筑紫宇佐の神宮寺、香春神社等に於て法華經を講し、神託ありしことをも傳へたり。

最澄の後、天台の僧侶は盛に本地垂迹說を唱へ、圓仁は入唐して歸朝の際明洲赤山明神を比叡山の西麓に祀り、圓珍は唐より歸國の際新羅明神、船舷に現れ託宣ありしとて、三井寺の北に之を祀れり、他國の神を祀りしは圓仁圓珍に始まる、又圓仁の時より日本國中の有名なる神三十神を撰びて法華經守護の神と定め、毎月、日を分ちて結番せしめたり、此の三十番神は其の後常に加除ありしが、日蓮に至りて具體的に確定せられたり。

天台宗の神道は之を山王一實神道と云ふ、其の理由は頗る不明瞭なるも、最澄が叡山獨住の際、三の日輪出て、其の中に釋迦、藥師、彌陀の三尊現はれ、忽ち俗體に變ぜしゆへ其名を問ひしに、竪の三點に横の一點を加へ、横の三點に竪の一點を添ゆと云へり、因つて之を考ゆるに初めのは山となり、後のは王となる、之れ卽ち山王にして、山は不動の形、王は天地人の三才に經緯たる德なれば、之を山王の神と崇め、大己貴命、大山咋命、應神天皇を山王三聖と稱して、三尊に配し、又天台の敎理たる一心三觀、一念三千、三諦卽一の關係に準じ、山王一實と唱へたりとも云へど、實は天台は一乘無二無三の敎にして、大乘の實敎と稱するゆへ一乘實敎の神卽ち一實神道と云へるなるべし。

第三節　兩部神道

兩部神道は眞言宗の開祖大師の首唱せる所なり、而して其の敎理の所依とする天地麗氣記は固より源平時代の僞作にして、又空海僧都傳、弘法大師行狀記に記載せる大師が兩部神道の說明なりとする說は頗る怪しきものなるも、大師が高野山を開き金剛峰寺を建立するに當り、山神丹生都姬の案內ありて、其領地を献ぜしと云ふが如きは、正しく大師の所作にして、稻荷神の託宣と稱して、藤森神社內に稻荷神を祀れるが如きも、亦大師の爲せし所たるは疑を容れず、大師は亦伊勢に在りて神道を研究し朝熊山を開きて金剛證寺を建てたる如き、神道灌頂を受けたる如き事實あり。

由來眞言宗の本尊は大日如來にして、之に金剛界の大日如來卽ち智法身佛、胎藏界の大日如來卽ち理法身あり、金胎兩部、理智二法身の冥合を唱へ、又大日經を以て所依の經論と爲し、一大日が兩部に分かれ、又五智五佛、九會十三大院、三十七尊等と種々分類を爲して、佛の活動作用を說明せり、左れば天照皇大神卽大日靈卽大日なりと爲し、內外兩宮を理智胎金の兩部に配して、共に同一なりと爲せしものにして、大日本國は大日如來の本國、大日經流布に由緣ある相應の地なりと云ひ、本地垂迹說に一歩を進め、

天照皇大神直ちに大日如來なりと爲し、大日本はその本國なりと云ふに至つては崇外內卑を捨てゝ、直ちに自主的國家的となせしものなり、法鏡錄に曰く、夫れ神明の元旨は陰陽に基き、遮那の本誓は金胎より起る、是の故に乾坤二氣は兩部の外用なり、定惠理智は天地の內證なりと、又天地麗氣記に曰く、和光の靈威を稟け、諸波羅密を修行して、諸佛の通相を蒙り、般若の心宮に遊びて、大日本國に生れ、大日如來に同じ、大日靈尊に照され、心地の蓮を開き、加持を被りて動せず、與に三世に法界大悲の門に入りて、正覺正智の鏡を磨き、一生補處に坐して、金剛加持の法界を得、憑るべきかな神道の秘傳、善なるかな佛法の指南、神妙體を開き、天然際なし、而して法性の深理を動かさず、萬像を南無し、法身自樂の力用無邊なり、兩宮本誓に法報應身等の權化あり、利生の方軌を設く、然れども一身なるが故に、三世一生、而して來ることなく、去ることなし、常住不變なり、一切の衆生は薩埵なり、凡聖も皆神體なり、法性無明本有形體、過現當諸佛種々の應身に冥合し、明神に化現し、三界を衞護したもふなり……藏王菩薩曰く、天照大神は最貴最尊の神、天下諸社に比するものなし、大日靈尊天下を照らして晝夜なく、內外を通じて息むことなしと、語句通じ難き所あるも、其意は略察すべし。

斯く眞言宗の兩部神道は我國の神祇を垂迹とせざりしより、敎理上に於て幾分か神を蔑視するの傾を減じ、佛敎卽神道、大日佛敎直に大日靈神道と爲りしを以て、其の神社を佛化するの勢は恰も怒濤の捲くが如く、神宮寺には大抵眞言僧を以て別當と爲し、神社悉く僧侶の手中に落ち、神國忽ち佛國と化し去れり。

第四節　大師以後の神佛混淆

日蓮の三十番神說は前に云へり、日蓮は山王一實神道を研究し、又男山八幡、伊勢神宮にも參詣して日出の時天照皇大神に誓ひて題目を唱へ始めたり。

元弘時代に僧慈遍なるものあり、神國私記なる書を著し、神道大意、天地開闢、兩宮鎭坐、佛神同異等の事を辯じ、朝廷に獻れりと云へり。

眞宗の存覺は諸神本懷集を編述し、其の中に

それ佛陀は神明の本地、神明は佛陀の垂迹なり、本にあらざれば迹を垂るゝことなく、迹にあらざれば本をあらはすことなし、神明といひ、佛陀といひ、おもてとなり、うらとなりて、たがひに利益をほどこし、垂迹といひ、本地といひ、權となり、實となりてともに濟度をいたす。

と云ひ、又蓮如は

一切の神明とまをすは、本地は佛菩薩の變化にてましませども、この界の衆生をみるに、佛菩薩にはすこしちかづき難く、おもふあいだ、神明の方便にかりに神とあらはれて、衆生に緣をむすびて、その力をもて、たよりとして遂に佛法にすゝめいれんがためなり、これ卽ち和光同塵は結緣のはじめ、八相成道は利物のをはりと云へるは此のこゝろなり、されば いまの世の衆生佛法を信じ、念佛をもまをさん人をば神明はあながちにわが本意とおぼしめすべし、このゆへに彌陀一佛の悲願に歸すれば、とりわけ神明をあがめず信ぜねども、そのうちにおなじく信ずるこゝろは、こもれるゆへなり。

と云ひ、思ひ切つて神を排することをば爲し得ず、去りとては一向專念の敎義を如何せん、左れば狡猾にも彌陀一佛に歸すれば其の中に、神を信ずる意も籠り神も喜ぶべしと附會せり、苦心の跡歷々たると同時に隨分虫の好き議論なり。

德川時代の始め天海は一山一實神道を家康に說き、又吉田家の梵舞と爭ひて之を屈せしめ、後陽成天皇の朝に禁廷に於て葦林庵と唯一神道と、兩部神道の論を爲して勝を制せしかば、大內神道の稱號を勅賜せられたりと云へり、其の伴天連追放文と稱するものの中に左の言あり、曰く

文に曰く、惟れ神明應迹國にして、大日の本國なりと、法華に曰く諸佛世を救ふ者大神通に住し、衆生を悅ばしむる爲めに無量の神力を現はすと、此金句妙文、神と佛と其名異にして其趣一なる者恰も符節を合するが如し。

日本は神國佛國にして、神を尊び、佛を敬ひ、仁義の道を專らにして、善惡の法を匡す、

第五節　北畠一條の神道說

北畠親房は、神儒佛道に亘れる博學者にして、又勤王精忠の人なり、神皇正統記を著して、國體上の大義名分を明らかにし、元々集、東家秘傳に由りて、天地開闢より神道に關する所見を述べたり、卽ち元々集は神道の諸說を集め、之を八篇に分ち、其の神國要道篇中には、三種の神器に就て解釋を爲し、三器を妙、明、斷の三德に比し、更に之を仁に括し、理世安民の道に率したり、又其の東家秘傳には、日本紀の本文を擧げ、陰陽五行五大の理を以て之を解し、天地開闢の原因を說明せり、斯くの如く一方には儒に依り、又陰陽說を執りたれども、彼の僞作たる神道五部書等に據りたる所多く、我國は神國とて儒佛のいへる處、すべて既に包含せられ、しかもその理一層明瞭に現はされたりと云へるも、其の思想は佛理に源底する所多く、又敢て佛を排斥することをせざりしのみ

か、之を尊敬すべきことを說けり、要するに未だ全たく、兩部神道說の埒外に出づることと能はざりし者なり。一條兼良は亦神儒佛道に亘る博學なり、而して其の神道論は、應化の神は佛菩薩の衆生の機に應じて現形せるものと爲し、又神道にも六道四生、三世循環あることを說けり、之れ兩部習合よりも一層佛敎に近きもの、否、佛敎そのものなり、左れど將軍義尙の爲めに、文明一統記を著して、第一に其の氏神たる八幡宮を祈念すべきを示し、又樵談治要には、我國は神國なれば敬神を、先きにすべき事を故事典例を擧げて具體的に詳說せり。

第六節　社家神道

社家神道又は伊勢神道と稱す、元來伊勢は天祖の鎭座ありて、內外兩宮の神官卽ち社家は、每に兩部神道に反對し、佛敎及僧侶等に對しては忌詞さへ設けたる位にして、敬神の大道を繼ぎ、祭儀の森嚴を勉め、外宮の神官度會氏は代々學者を出し、其の中心と爲りて大に敬神思想を鼓吹せり、故に之を社家神道又は伊勢神道と呼べり、然るに古來內外兩宮の神官は軋轢甚しく、內宮の神官は外宮豐受大神を以て、天照皇大神の御饌の神なりと爲し、外宮は之に對して豐受大神をば天御中主神にして又國常立尊なり、故に寧ろ天照皇大神の祖神なりと唱へて、北條氏の末建武の頃よりは、行基の著書なりと稱する神道五部書なるものを假作し、神典として流行せしむるに至れり、當時度會家行なるものあり、博學にして元應二年類聚神祇本源十五卷を著せり、北畠親房の元々集神皇正統記も之に據る所多きが如し、蓋し當時大に世に行はれしものなり、然れども其根據は紀記二典よりは主として舊事本記に依り、儒佛に偏して附會の說多く、又天照皇大神を大毗盧舍那如來、諸冊二尊を天鼓音雷佛、開敷花王佛と稱するを憚らざりしなり、降つて德川時代に及び出口延佳(度會延良)其子延經、度會常影、正身、及荒木田久老等名あり、就中延佳尤も著はる、山崎闇齋の如きも延佳に就て問ふ所ありしと云ふ、神道辨疑集、復陽記其他著書多く、古來の說を儒敎に由つて敷衍し、外宮を國常立尊又天御中主神といひ、天理なり大元なりとなし、特に易經を以て神代を解釋し、天御中主神、國常立尊をば大極として、それより陰陽の諸冊二尊と分れ、こゝに天地と其道を同ふし生々の德を備へ、仁惠衆に及び、敬神の大義と共に諸般の人道成就するに至れりと爲し、而して高天原は高尙なる理想界なりと信じたり。

之を要するに社家神道は本來我國固有の敬神の大道を闡明せん爲めに起りしもの

なるも、其の理論は佛說を借りたるもの多く、毎に外宮の神官が內宮を壓し、同等若しくは夫れ以上の地位を得んとする政略上の武器に供せられ、兩宮常に葛藤控訟等の醜を演ぜしが、尾張東照宮神主吉見幸和の考証的批判は其の神典たる五部書を破すると同時に、其說行はれざるに至れり。

第七節　唯一神道

神祇官四職家の內に卜部氏あり、世々吉田神社の神主たりしを以て、又吉田家とも稱せり、鎌倉時代より兼直、兼益、兼豐、兼敦等多少世に知られ、其の一族兼方は釋日本紀二十八卷を著せり、室町應仁の頃に兼倶なるものあり、祖先兼延の名に託して、名法要集なる書を著し、唯一神道、又は元本宗源神道、宗源神道、卜部神道、吉田神道とも云ふものを唱へたり、其の大要は

神道は根本なり、儒敎は枝葉なり、佛敎は華實なり、故に顯露の淺義によれば佛は本地、神道は垂迹となせども、隱幽の密義によれば神を以て本地と爲し、佛を以て垂迹となす、密に秘密、隱密の二義あり、眞言敎の如きは秘密にして尙淺く、神道は隱密にして極めて深し、神道には相傳、傳授、面授、口訣の四重あり、又影像、光氣、向上、底下の四位あり、顯より密に至り、密の中に亦淺深あり、故に若し其人にあらざれば、淺略の分も傳ふべからず。

と云ひ、又其行事に神道護摩、宗源行事、十八神道といふことあり、之を兼ね學べるを三壇行事と云ひ、其の唱文には、一切衆生、六根の色體に迷ひ、三心の元々を忘るゝ故に、罰多く賞少きなり、正しく其の本は色體も神明の分身、心は一神の同根なりと云ひ、又唯一の意義に付ては、唯一とは神明の眞傳、一氣開闢の一法なり、大職冠の仰に云はく、吾が唯一神道は天地を以て書籍と爲し、日月を以て證明と爲す、是則純一無雜之密意なり、故に儒釋道の三敎を要すべからざるなりと言ひ、又唯一に三義ありとて、神道の相承、神事の宗源を主る相承を云々し、國は神國、道は神道、國主は神皇、天照大神一神の威光、百億の世界に遍く、一神の附屬、永く萬乘の王道を傳へ、天に二日なく、國に二主なし、故に日神在天の時、月星光を双べず、唯一天上の證明是なりと說けり、兼倶は上下の尊信を受くるに從ひ、益增長して、大和に齋場を設け、毒計を巧みて伊勢神宮、八神殿、賀茂神社の神體を奪はんとせしも事成らざりき、又天祖、八幡、春日三社の託宣なるものを揑造して、盛に自家敎勢の擴張を圖れり。

猶前記三壇行事の他に、神道灌頂、神道加持、大燒行事等あり、之を切紙傳授と名けて、密

に傳授せり、吾人は眞言密教の灌頂を受け、又唯一神道の灌頂其他の傳授も受けたり、此等は繁閑の差あり、又之に要するに物品、及名詞の異なるありと雖も、其意味も形式も全然同一なり、林羅山の神社考に兩部習合を評して、我が古記の言を竊みて佛を飾り神を剝くと云ひ、唯一神道を評しては、兩部習合の者を剽掠して、以て己が說と爲す、盜の人の財を竊むに、主人の子孫我が財たることを知らずして、眞の盜に就きて、其の憫を乞ふものなりと云へるは穿てりと云ふべし。

兼俱以後其子孫業を繼ぎ、唯一神道の發展擴布を圖り、其庶流たる豐國神社の祠官萩原兼賴の如き、大に其の發達に勉めしが、德川時代に及び豐國神社の破却の爲めに挫折せしも、其弟子吉川惟足は唯一神道を究め、日本學則、神祇要篇の著あり、紀州會津兩侯の尊信を受け、又將軍家綱の時に幕府の神道方と爲り、大に重きを爲せり、其の說く所は唯一神道に宋學理氣說を加へて、道德的解釋を下したるものにして、其の神道大意の講義の詞に、

此の書は天地萬物一體の理をあらはす處なり、道は人々の固有の道ぞ、天に在りては神といひ、人に在りては心といふ、神人一體ぞ、故に神を心となせるを人といふ、されども氣質にさゝへられて、神と人と雲泥となるぞ、唯一神道に基づいて悟りぬれば、人々國常立尊なり、之に依つて心則ち神明の御舍ぞ

と云ひ、自ら稱して理學神道と號せり。

第八節　伯家及天社神道

神祇官の頭領神祇伯王たる白川家にては、一方には時代の趨勢に促され、一方には其の下僚たる卜部家が唯一神道を唱へて、其の實力伯家を壓するものありしより、自衛の必要上、伯家神道なるものは組織せられ、其の學頭等の手に成りし神道通國辨義には左の如く神道を解釋せり。

神道は天地の神氣循環して、萬物生々化々するの名にして、和漢竺は勿論、四夷八蠻、萬國一般の大道なり、天地廣しと雖も、萬物多しと雖も、一つも其の化に洩るゝなく、尺地も其の循ぢよらざる所なし、知る者も神道裡の人、知らぬ者も神道裏の人、鳥獸蟲魚の有情、草木砂石の非情、皆其化に出入し、人々其神の分賦を受けて、これを心の藏に容れて魂と爲ながら、神の所爲たる事を知らざるは、實に神道の大なる所なり。又崇秘切紙傳には、神代を理天地、氣天地、質天地、形天地の四天地に區分し、理具らざれば氣の牙すことなく、氣交らざれば質の凝ることなく、質積らざれば形となること能

はず、萬物四天地の具を洩るゝもの一もなく、天地の開くるも此理にて唯一の神と云ふ活より天地開くる理の具ふる所を理天地と云ひ、其理天地に坐す神を天御中主神、高皇產靈尊神皇產靈尊と云ひ、其理天地熟して氣の芽す初頭を國常立尊、國狹槌尊、豐斟渟尊と云ひ、其氣交はりて質を生ずるを大日靈尊、月讀尊、素盞嗚尊と云ふ、其質積て形と爲る、是を邇々杵尊、出見尊、葺不合尊と云ふと說明せり。

又神代經緯貫義には

理天地の理神、之を天御中主神と云ひ、理中の理、卽ち萬物の元なり、天地萬物一つとして此理に基かざるはなし、卽ち天地中の君主たり、理天地の氣神之を高皇產靈尊と云ひ、萬氣の元運行の主なり、故に神集、神議、降臨等專ら運行の事に與るものは凡て此神の命令に因る、又理天地の質神之を神皇產靈尊と云ふ、萬質の元なり。

天地の間千差萬別と雖も、一つとして三神の分賦にあらざるなく、之を理の三才と云ひ、三卽一理二氣好合の數にして萬物出づる所、神道成就の數なり。

天に在つては日月星と爲り、地に在つては海山陸となり、品に在つては君臣庶と爲り、德に在りては智仁勇と爲り、器に在りては鏡玉劍と爲る、皆理氣質の象なり。

と云へり、而して伯家神道は官職を受くる必要ある神主間に行はれたるのみなりしが如し。

土御門家は晴明以來陰陽頭たる人多く、天文道を以て聞へ、神祇官僧侶と均しく祭祀祈禱を掌りしが、遂には陰陽道と相合して土御門神道なるものを起し、伯家神道、又は天社神道と稱し、祈禱を主とする一種の神道と爲れり。

上述の如く、或は學者の神道說あり、又所謂神道家の神道說あり、而して其の用語の如きも、或は儒學に、或は陰陽道に借り來れるもの多しと雖も、其の議論の內容を檢すれば、畢竟は兩部神道說の範疇を脫出すること能はず、殊に其儀式の如きは、眞言密敎に酷似せりと謂はんよりは、寧ろ剽盜せるもの多しと謂ふべく、佛敎始め神祇を籠蓋して、自己の布敎に資し、後の所謂神道家は、佛敎に倣ふて却つて神道の本旨を味はせりと云ふべく、後日復古神道家の出てしは、其の所以ありと謂ふべし。

（因に本章は國粹哲學の一節拔抄なり、細論は國粹哲學に在り）

密教原理篇 終

密教原理篇は、成稿八百餘頁のものなりしも、本聖典總頁數の都合と、他篇と權衡上の體裁ありて、引證文の八分方と、密教の現代學界に於ける位置と題する一章其他附說二百餘頁を削除せり。

密教佛寶篇

小野清秀著

佛陀如來の意解

佛教にては各宗共多く法報應の三佛身を說く、法身佛とは絕對そのものにして、實在を善的に人格的に寫象せしものなり、應身佛とは人間中の覺者、卽ち修養開悟の大聖にして、救濟感化の偉力を有するものなり、報身佛とは一方より見れば、法身佛が吾人有限衆生に對する不可思議の救濟力にして、又一方より見れば應身佛の德相なり、餘澤なり、感化力なりと云ふべく、應身の上に現はれたる法身の偉力靈驗、應身が法身に致一したる自在の境界、之れ卽ち報身佛にして、畢竟報身佛は有無の兩中間、法應二身の混生兒なり、左れば應身佛を信仰の對象とするは、衆生の側より見たる道德的本尊にして、法身佛を對象とするは、絕對の方面に立脚せる哲學的の本尊なり、又報身佛を信仰の中心とするは、靈驗本位の宗教的本尊とも云ふべきなり。

次に如來とは諸經論に如來、又は如去、或は如來如去と記し、信者の側より見て佛陀の來り濟ふ力を如來と云ひ、不信者怠慢者よりすれば如去とも云ふべく、佛陀卽ち覺者又は絕對の靈力が、信者の上に活現するを如來とすれば、佛陀は體にして、如來は用なりと云ふべきなり。

眞言密敎の所謂佛陀如來は、實在の側より立論せる絕對的本尊にして、他宗に唱ふる所の本尊諸佛如來は、此の絕對本尊の部分的の活動作用と見るべきものにして、實在そのものを直ちに人格的に活動的に寫象し、宇宙そのものを活動視せるなり、左れば密敎の佛陀如來は、一方より見れば、一切の本尊を包容すると同時に、又一方よりすれば一切を統一して終局の本尊、絕對的對象を抽出せるものと云ふことを得べきなり尤も密敎にも開發的の佛陀を說くは他宗と異ならざるも、顯敎の如く煩惱を斷じて覺位を證すべしとは謂はずして、自我の開發を主とせり、大疏に曰く、此の宗の中の佛陀は、覺と名く、是れ開敷の義、謂く自然の智惠に由て、遍く一切の法を覺ること、盛に開敷せる蓮華の汗點あるも、なきが如く、亦能く一切衆生を開敷す、故に佛と名づくるも、要するに對象としての本尊佛と、信者自己が進んで成佛する方面より見たる佛の意味は主客顚倒すべきものにして、所謂向下と向上、衆生卽佛、卽ち生佛一如と、開發的又は修證的の佛と、本來の佛との意義を諒解せば、佛身說も、本尊優劣論も、自ら瞭々たると同時に、佛敎中佛身論の紛々たるも、多數の本尊を有するも、深遠緊切の理由あることを知るを得べきなり。

佛陀如來の種別

化佛

衆生の機に依て種々の身を現し給ふ佛、此の佛は千手觀音の手上又は大元帥明王の頂上等に在せり。

十三佛

一不動明王、二釋迦如來、三文殊菩薩、四普賢菩薩、五地藏菩薩、六彌勒菩薩、七藥師如來、八觀音菩薩、九勢至菩薩、十阿彌陀如來、十一阿閦如來、十二大日如來、十三虛空藏菩薩の十三の佛を云ふ、此の十三の數は胎藏界曼荼羅の十三大院に型どりて、此れにて一切佛を盡すとなせり、大日如來の上に虛空藏菩薩を置きたるは密敎の如意寶珠を最極とするより來れり、俗間にては亡者の七々忌年忌等を此の順に配せり。

三千佛

秘藏記に過去現在未來の各世千佛あり、合せて三千佛なり、金剛界曼荼羅には現在の千佛を列するのみなれども、是れ三千佛を盡すの意なり、過去莊嚴劫の千佛、現在賢劫の千佛婆尸佛を首めとし、樓至佛を終りと爲す、未來星宿劫の千佛、我が身中に本來無量無數の差別智身の功德莊嚴藏あり、是れを過去莊嚴劫の千佛と謂ふ、又た此の身に最初の普賢の行を起して普賢の行を行す、是れ最妙善なり、賢とは是れ最妙善の義なり、是の故に賢劫と曰ふ、我が身に無數の如來ありと覺知しぬ、是れ賢劫の千佛なり、千とは滿數を擧ぐるのみ、無量無數の如來あり、此の身既に說の如く修行すれば煩惱の雲を排除して本有の如來を顯得す、譬へば雲を披いて星月を見るが如し、是未來星宿劫の千佛なり。

八葉九尊

胎藏界曼荼羅の中台に大日如來あり、八葉に四佛四菩薩あれば合して九尊となるなり。

賢劫十六尊

現在賢劫千佛中の上首の尊にして、金剛界九會曼荼羅の成身會には賢劫千佛を列するも、三昧耶會以下には上首の十六尊のみを擧ぐ、此の十六尊にて過去現在未來の三世三千佛を攝し盡すなり、十六尊の名は略出經と二卷の敎王經に列ぬるも、其形像等の詳說なき故、同一像にして全く異なるものあり、現圖曼荼羅の尊を呼ぶに當つて同異甚だ明瞭を缺くに至れり、其列名は

略出經	現圖	七集	愚考
慈氏	同	同	同
不空見	同	同	同
滅惡趣	除蓋障	同	同
離憂暗	除憂冥	同	同
香象	同	同	同
勇猛	大精進	同	同
虛空藏	金剛幢	同	同
智幢	同	同	同
無量光	同	同	同
月光	賢護	同	同
賢護	網明	同	同

光網　月光　同
金剛藏　金剛藏　無盡意　同
無盡意　文殊　同　同　辨積
辨積　智積　金剛藏
普賢　同　同　同
十七尊

本尊と四菩薩と八供養、四攝との總稱なり、理趣會の曼荼羅卽ち是なり、四菩薩は本尊の有緣の眷屬にして、理趣會なれば欲、觸、愛、慢の四菩薩是なり。

三十三尊

高野山中院流に傳ふる所の諸尊法の數なり、中院流にては此の尊數少きを末世相應の流なりとなす、其名は、金輪、佛眼、藥師、阿彌陀、釋迦、尊勝、聖觀音、千手、同愛法、十一面、馬頭、准胝、如意輪、白衣、彌勒、五字文珠、八字文珠、延命、地藏、愛染、不動、降三世、軍荼利、大威德、金剛夜叉、烏瑟沙麼、法花、法花肝心、舍利、光明眞言、同護摩、毘沙門、焰魔天、聖天、阿梨帝。

三十七尊

金剛界曼荼羅根本會の本尊數を云ふ之を圖表すれば

大日
四佛 } 五佛
十六大菩薩……慧十六尊
四波羅蜜……
内四供養 } 八供養
外四供養 }
四攝……
十二供養 } 定十六尊

此の三十七尊萬法を攝盡して餘す所なし、而して能現所現を分てば、大日如來は唯能現にして、十二供養十六大菩薩は唯所現なり、四佛四波羅蜜は能所現に通ず、此の菩薩の出生發現に就て經說區々なり。

●金剛頂經
●略出經　大日
四佛……四波羅蜜
十六大菩薩　内四供養
四波羅蜜
外四供養

●出生義　大日―四佛―四波羅蜜―十六大菩薩
　　四攝

●聖位經　大日―三十六尊

●理趣釋　大日―四波羅蜜―四佛―內四供養
　　外四供養

七十三尊

金剛界曼荼羅の微細會等の尊數にして、卽ち三十七尊、賢劫十六尊、外金剛部の二十天なり。

十三大院

胎藏界曼荼羅には十三の區劃あり、之を十三大院と云ふ、現圖曼荼羅の十二院に四大護院を加へたるものなり、或は現圖曼荼羅の持明院を白壇九會の曼荼羅の如く、不動院、降三世院と分ちて之に四大護院を加へ中臺院或外金剛部院を除きて十三大院と稱し、又は現圖の虛空藏院を金剛藏院、虛空藏院千手院の三院に分ち、之に四大護院を加へ、中臺院と外金剛部とを除きて十三大院と稱する兩說あり。

大日如來

梵には摩訶毘盧遮那恒他誐多と云ひ、大遍照如來と譯し、遍照金剛と稱し、又は遍法界身、普門身、等と呼ぶ、大日經疏に曰く「梵音毘盧遮那者、是日之別名、卽除暗遍明之義也、然世間日則有方分、若照其外不能及內、明在一邊不至一邊、又唯在晝光不燭夜、如來智慧日光則不如是、遍一切處作大照明矣、無有內外方處晝夜之別、(以上除暗遍明義)復次、日行閻浮提一切卉木叢林隨其性分各得增長、世間衆務因之得成、如來日光遍照法界、亦能平等開發無量衆生種々善根、乃至世間出世間殊勝事業莫不由之而得成辦、(以上長物成就義)又如重陰昏蔽日輪隱沒、亦非壞滅、猛風吹雲日光顯照、亦非始生、佛心之月亦復如是、雖爲煩惱戲論重雲之所覆障、而無取滅、究竟諸法實相三昧圓明無際而無可增、(以上無生滅義)如是等種々因緣、世間之日不可爲喻、但取其少分相似、故加以大名曰摩訶毗盧遮那也以上明大字)と、金剛頂經義訣には梵云毗盧遮那、此翻最高顯廣眼藏如來、毗者最高顯也、盧遮那者廣眼也、先有翻爲遍照王如來、又有翻爲大日如來、此蓋略而各義闕也と說く、卽ち宇宙の實在性を稱す、此の如來は一切如來の普門の總德にして竪差別門より見れば、諸佛菩薩は此尊より出生す、若し橫平等門より見れば、一切森羅萬象皆是れ遍法

界身にあらざるなし、故に大日如來は三世常恒に法界心殿に於て自受法樂の故に說法し給ふ、只衆生は煩惱妄執の爲に蔽はるるが故に、此の說法を聞く能はざるのみ、胎藏界の形像は大日經具緣品に記する如く、「大日勝尊現、金色具暉曜首持髮髻冠、救世圓滿光、離熱住三昧」とあり、同經轉字輪品には、「造大日世尊、坐白蓮華、首戴髮髻、鉢叱爲裙、上被絹穀、身相金色、周身焰、或以如來頂印、或以字句、謂阿字門」即ち曼荼羅の總德として中台八葉院に坐し金色にして五智の寶冠を頂き赤蓮(普通の圖は寶蓮なり)に坐し、法界定印に住し給ふ、金剛界の形像は略出經に、「結此大印(智拳印)已應當想毘盧遮那尊、首坐於壇中央、結跏趺坐有大威德、色如白鵝、形如清月、一切相好、皆悉圓滿、頭具寶冠垂髮、此繪綵輕妙天衣、繞腰披綀而爲上服」とありて、現圖金剛界曼荼羅には成身會には白肉色、大智拳印に住し趺座し、供養會は兩手を金剛拳にして左を膝上に仰け、右を胸邊に當て相向合に爲す、其他諸會の尊形又大同なり、而して此の胎藏界大日如來が熾盛光の三昧に入りたるを佛眼佛母と稱し、金剛界大日如來が熾盛三昧に入りたるを金輪佛頂と稱す。

釋迦如來

胎藏界曼荼羅釋迦院の本尊なり、其內證は中臺の開敷花王如來及び金剛界曼荼羅の不空成就佛に同じとす、此の二尊は常に第一重の釋迦と稱す、此の外施餓鬼には離怖畏如來、集經等には北方微妙聲如來と云ふ、今は第三重の釋迦の意なり、梵には釋迦牟尼と云ひ、能仁寂默と譯す、密號は寂靜金剛と云ひ、或は釋師子、釋迦文等と云ふ、印度摩訶陀淨飯大王の子に生れ、八相の化儀を示す、五十年說法度生せるを以て、其三昧を說法となす、大疏に「釋迦牟尼、身眞金色にして、並に光輝ある三十二相を具し、所被の袈裟は乾陀色に作せ、白蓮華に坐して說法の狀に作すべし、……此の白蓮華は卽ち是れ中臺(第一重)の淨法界藏なり、世尊此教(密教)をして廣く流布せしめんが爲めの故に、此生身の標幟を以て之を演說し給ふ、然れ共本の法界身と無二無別の故に彼(第三重)に住して說法す」と云へり、大疏には左手を以て袈裟の角を執り、右手は指を堅てゝ空(大指)水輪(無名指)相持すとあれども、現圖曼荼羅は兩手を胸に當てて各頭指と小指を立て餘の三指を屈す、金輪佛頂の三昧に入る尊は法界定印なり、是を釋迦大鉢印と云ふ、而して大指と無名指と相捻したるを智吉祥印と稱するも、此の智吉祥印に大指と中指と捻したるものあり、今は三身說法の印と稱して大指頭指を捻したるを法身、大指中指を捻したるを報身、大指無名指を捻したるを應身となす。

阿閦如來

東方金剛部の主、梵には惡乞芻毘也と稱し、翻して不動となす、(不動金剛又は怖畏金剛とも稱す)金剛界曼荼羅東方日輪の中央に在りて、大圓鏡智の德に住し、諸魔煩惱を破して無垢の淨菩提心を顯現するを司り薩埵、王、愛、喜の四菩薩を眷屬とす、聖位經に「最初に無上乘に於て菩提心を發す、阿閦佛の加持に依るが故に圓滿の菩提心を證得す」とあり、攝眞實經には「胸臆中より青光を放ち東方無量世界を照す」とあり、天魔外道も搖動すること能はざる旨を表して觸地印を結ぶ、胎藏界曼荼羅の天鼓雷音如來、青頸觀音儀軌の雄猛如來、攝眞實經の不動佛、大樂軌の無動佛、施餓鬼儀軌の妙色身如來、皆同一本誓なりとす。

開敷華如來

胎藏界曼荼羅中臺八葉院の南方に坐し、大悲萬行の位に住し、平等金剛と稱し、金剛界曼荼羅の北方不空成就佛と同尊なり、大疏には「裴羅樹王の華開敷佛を觀ぜよ、身相金色にして普く光明を放ち、離垢三昧に住するの標相なり、始め菩提心の種子より、大悲萬行を長養し、今遍覺の萬德開敷を成ずるが故に以て名となす」と釋せり、金色にして右手を臍輪に當て袈裟の角を執り、右手は掌を外に向けて指頭を下にし胸に當て、輕衣を着て寶蓮花に坐す。

寶生如來

梵には縛日羅三婆縛、譯して寶生と云ふ、平等金剛と稱し、金剛界曼荼羅南方の中央輪に位し、平等性智に住して萬法能生の德を主る、攝眞實經に五指の間より如意珠を雨らし、此の如意珠より天衣服天妙甘露天音樂天寶宮殿を雨らし、乃至衆生の一切所樂を皆圓滿せしむるを以て、能命圓滿一切衆生所受樂印と爲す、胎藏界曼荼羅の寶幢如來と同三昧なり、黃金色にして、左拳を腰の前に仰け置き、右手五指を伸仰て橫に出す是れ與願の形なり、然るに秘藏記には右手外に向け無名小の二指を屈し餘指を伸ぶと爲せり。

寶幢如來

胎藏界曼荼羅中臺八葉院の東方に坐し、福德門を司る、梵には囉怛曩計都、寶幢と譯し、

德聚金剛と稱す、東方發心の位にて第八識に當れば萬法含藏し、又寶部の主なれば福聚と名く、大疏には「寶幢は是れ菩提心の義也、譬ば軍將の大衆を統御するに要する幢旗を得て、然て後に部分齊一して能く敵國を破し大功名を成すが如く、如來の萬行も亦復是の如く、一切智願を以て幢旗となし、菩提樹下に於て四魔の軍衆を降伏するが故に名と爲す」金剛界の寶生如來と同本誓なり。大日經に「身色日暉の如し」とあるを大疏に朝日の初め現ずる赤白相輝くの色となす、現圖は白黃色にして右手を與願にし、左手を胸に當てゝ袈裟の角を握り寶蓮華に坐す。

不空成就如來

金剛界曼荼羅、北方五解說輪中の北方に位す、梵には阿目佉悉地、不空成就と譯す、悉地金剛又は成就金剛と稱す、業護牙拳の四菩薩を伴とし、北方の羯磨部の主にして成所作智の德に住す、卽ち北方釋迦如來なり、聖位經には「諸佛事及有情事に於て修行する所の利樂皆成就す」とありて、萬法成就の德を主る、尊胎藏界曼荼羅にては南方開敷華王如來と名く、秘藏記には金色左手拳、右手五指を舒て胸に當つ、七集には淺綠色、或は黑色とあるも、經軌に依れば五色若くは黑色なり、現圖曼荼羅は成身會は左手頭指中指を伸べ無名指少しく屈し、大指を無名に附し仰いて膝に置き、右手は胸邊に伏せ物を覆ふが如くす、微細會は左手を開いて膝上に仰げ、右手を胸邊に施無畏にし、供養會は左拳を臍に安んず。

天鼓雷音如來

胎藏界曼荼羅中台八葉院の北方に位し、梵には帝婆曇都尾迷伽濕礫含、天鼓雷音と譯し、不動金剛と稱し、涅槃の德に住す、金剛界曼荼羅の東方阿閦佛と同尊となす、大疏には本名は鼓音如來と云ふべし、天鼓の如く都て形相なく、亦住處なくして、法音を演說して衆生を警悟す、大般涅槃も亦復是の如く、二乘の永寂にして都て妙用なきが如きに非ざるが故に、以て喩となすなり」と曰へり、黃金色にして寶蓮花に座し、左手を拳に作して仰て臍下に安じ、右手をして膝を押し指頭蓮台に至る、卽ち阿閦佛觸地印なり。

阿彌陀如來

西方蓮葉部の主、胎藏界曼荼羅には、中臺八葉院の西方に位し、金剛界曼荼羅には五解脫輪の西方に位して、法利因語の四薩菩を眷屬とす、梵には胎藏界は阿彌陀婆と云ひ、

之を無量光無量壽と譯し、金剛界は嚕計濕婆羅阿羅婆惹と云ひ、觀自在王と譯す、此の二者一佛體となり西方妙觀察智の三昧に住す、大疏には「西方に於て無量壽佛を觀ぜよ、此は是れ如來の方便智なり、衆生界の無盡なるを以ての故に、諸佛大悲方便亦終盡なし、故に無量壽と名く」とあり、聖位經には「語輪能く無量の法門を說く」とあり、攝眞實經には「散亂の心を除て三昧の樂に入らしむ」と稱す、大悲金剛又は、淸淨金剛と云ひ、理趣經には得自性淸淨法性如來と稱し、施餓鬼儀軌には甘露王如來となす。

藥師如來

梵名は佩殺者虞嚕と云ひ、藥師と譯す、或は藥師瑠璃光如來と稱す、此の尊は奈良朝以來金堂の本尊とせられたるを以て、多く崇拜せられたれば、種々の異傳を生じ、東方に淨土を構ふるを以て、仁海は阿閦如來と同體となして金剛界五佛の中に此尊を入れ、或は胎藏界大日と同體となす、是れ藥師如來が法界定印(藥師藥壺印は法界定印の大指頭を光らして分つに過ぎず)を結ぶが故に本誓通ずとなし、或は經に釋迦白毫光內に聲あり、我功德殊勝也汝說くべし」等とあるを以て、佛頂部の尊なりとなし、光聚佛頂或は金輪佛頂の印言を用ひ、或は其形像釋迦に類するあるを以て釋迦と同體となし、

或は因位には藥師と云ひ、果位には彌陀と稱すとなし、或は其眞言が無能勝の眞言なる故無能勝と同體と觀ずるも、元來藥師如來は兩部曼荼羅に在らず、且つ本經のみありて供養法を說きたるものなき故に、種々異說を出したるなるべし、藥師如來は東方に淨土を構ひ十二大願を立つ、第一光明普照、第二隨意成辨、第三施無盡物、第四安立大乘、第五具戒淸淨、第六諸根具足、第七除病安樂、第八轉女得佛、第九安立正見、第十除難解脫、第十一飽食安樂、第十二美衣滿足是なり、不空譯の藥師念誦儀軌には「左手に藥壺を執らしむ、亦は無價珠と名く、右は三界印を作結せしむ」とあり、呼迦陀野軌には「其形金色鳥瑟の相也、左手に寶印を取り、左膝上に置き、右手に葡萄を取る」とあり。

善名稱如來

具には善名稱如來吉祥王と稱し、七佛藥師の一體にて、東方無勝淨土にあり、八願を誓へり、七佛藥師經八願中に「若し衆生あつて江海に入り大惡風に遭ひ、其船舫を吹いて洲渚に歸依を作すことあるなく、極て憂怖を生ぜんに、若し能く至心に我名を稱せば、是の力に由るが故に、皆心に隨て安穩の所に至るを以て、諸の快樂を受く」と、あり、渡海守護尊として信ぜらる。

佛頂の意義

佛陀の頂上功德を人格化し、諸尊中にて最尊最勝となす、大疏に釋迦院の五佛頂を說きて「是れ釋迦如來五智の頂なり、一切功德の中に於て、猶輪王の大勢力を具するが如し、其狀皆轉輪聖王の形に作せ、謂く頂に肉髻形あり、其上に復髮髻あり、卽ち是れ重髻なり、餘の相貌は皆菩薩の如く極て端嚴にして歡喜ならしめよ」とあり、其中の總說の尊を金輪佛頂、大佛頂、尊勝佛頂となす、此三尊は大日如來卽佛頂三昧の尊なれば、其德最も勝れたり、別の尊は三佛頂、五佛頂、八佛頂、九佛頂、十佛頂と分る、三佛頂は發生、光聚、無量聲にして、五佛頂は除障、高、最勝、勝、白傘蓋なり、此二を合て八佛頂と云ひ、九佛頂は之に攝一切佛頂を加へ、十佛頂は之に普通佛頂を加ふと稱す、然れば別說の尊は八佛頂にて之に總德を加ふるもの九佛頂十佛頂なり、今異名を列記すれば、白傘蓋佛頂は傘蓋、異相、奇特、勝佛頂は無比、大尊、最勝佛頂は金輪、攝諸輪王、光聚佛頂は火聚、神通、放光大士、尊勝佛頂は除蓋障、除障、除業、捨、降魔、除魔、摧碎、罪碎、摧破、摧毀、廣生佛頂は極高大、難部、辨事、黃色、光勝、發生佛頂は廣大、大轉輪、高、破魔、無量聲佛頂は無量聲、妙音、遍聲となり。

大佛頂

佛頂の總德を云ふ、故に尊勝佛頂を呼び、又は一字金輪佛頂を稱す。

八大佛頂

白傘蓋、勝、最勝、火聚、尊勝、發生、廣生、無量聲の八佛頂にして、如來の八種の德を分掌す。

三佛頂

發生、廣生、無量聲の三佛頂を云ふ、如來三部の德を分掌す、大疏には發生白色(息災)廣生黃色(增益)無量聲赤色(降伏)とあり。

發生佛頂

具には廣大發生佛頂と云ふ、胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊の右第三に位す、梵には摩訶瑟尼沙斫羯羅縛哩底と云ひ、密號は破魔金剛と稱す、八佛頂の隨一なり、息災の德を主る、廣大、大轉輪の異名あり、黃色にして右手に蓮上に獨股杵を竪てたるを持し、左手は胎拳にして頭指を立て胸に當て赤蓮に坐す。

廣生佛頂

胎藏界曼荼羅釋迦院釋尊右第四に位す、梵には阿毘庾、嗢議都(廣生)瑟尼灑佛頂と云ひ、

密號は難都金剛と稱し、增益の德を主る、故に黃色佛頂、辨事佛頂の名あり、または極廣大、極廣生、最廣大、光勝等の名あり、黃色にして右手無名小の兩指を屈し、餘指を立て胸に當て、左手に蓮上寶形あるものを持し赤蓮に坐す。

無量聲佛頂

胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊の右第五に位す、梵には阿難多婆囉羅俱灑、斫羯羅縛底、密號は妙響金剛と稱す、說法の德を主る、或は無邊音聲、無邊聲、妙音、遍昭(遍聲の意か)の名あり、黃色にして左手蓮上に法螺あるを持し、右手無名小の三指を立て除の二指(大指)を屈し胸に當て赤蓮に坐す。

白傘蓋佛頂

白傘蓋佛頂胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊の左第一に位す、梵には悉多跢波詛羅鄔瑟尼灑、譯して白傘蓋佛頂、密號を異相金剛と稱す、白淸の慈悲を以て周く法界の衆生を遍覆すると傘の人を蓋ふが如くなるに名づく、黃色にして左手蓮花上に白傘蓋あるものを持し、右手を胎拳にして大指を舒べ、赤蓮に坐す。

勝佛頂

胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊左第二に位す、梵には者耽(轉輪)瑟尼灑佛頂(密號は大尊金剛、無比金剛と稱す、惠德の廣大尊貴にして無比なる故に名け、慧德を主る、黃色にして左手蓮上に劍を安んずるものを持し、右手未敷蓮を執り赤蓮に坐す。

最勝佛頂

胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊左第三に位す、梵には毘惹曳瑟尼灑と云ひ、最勝佛頂と譯す、密號は最勝金剛、上行金剛と稱し、轉法輪の德を主る、又は其德最勝なる故に金輪佛頂と名くるも、一字金輪佛頂と混ずべからず、黃色にして左手蓮上に輪を安んじたるを持し、右手大頭小の三指を竪て、餘を屈して胸に當て赤蓮に坐す。

火聚佛頂

又は光聚佛頂と云ふ、胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊左第四に坐す、梵には帝聚羅(火聚)斫羅縛哩底(轉輪)と云ひ、密號は神通金剛と稱す、佛光を以て一切衆生を聚むる德を主

る、又高佛頂と稱することあれども、廣生佛頂とは別なり、黃色にして左手蓮上に寶珠を安んじたるを持し、右手無名指を屈し、餘指を竪て胸に當つ赤蓮に坐す。

尊勝佛頂

胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊の左第五に位す、梵には怛他怛多如來、尼枳囉拏(捨棄)惹尼灑(佛頂)と云ひ、密號は除魔金剛又は降伏金剛と稱し、八佛頂の隨一、又は摧碎、除障、除業、摧破等に名あり、一切煩惱を捨除するを主る、但し大佛頂尊勝とは別なり、彼は總德今は別德に約す、黃色にして左手蓮上に獨股を安んじたるを持し、右手中指無名指を屈し餘三指を竪たるを胸に當て赤蓮に坐す。

一字金輪

嚕勃唵の一字を眞言となす金輪佛頂尊なり、梵には翳迦(一訖沙羅字)烏瑟尼沙(頂)斫訖羅(輪)と云ひ、譯して一字頂輪王となし、又金輪佛頂と名く、時處軌には「勝絕不共の唯一佛體を顯すが故に一切佛頂輪王の輪王、纔に奇特の身を現すれば諸聖衆皆沒す」とありて、諸佛頂中の最尊最貴の尊なれば四輪中の金輪の勝れたるに喩ふ、一字頂輪王經には「此三昧を修する者は現に佛菩提を證す」と說き、又「若し人あつて此轉輪王の眞言を誦持する處は五百由旬の內一切世間出世間の眞言流通せず成就せず」と、之を當に金輪の五百由旬斷壞の德と稱し、五百由旬の間に此法を修する者あれば他尊の法は全く其威光に覆はれて成就せずと唱ふ、而して此金輪に釋迦金輪、大日金輪の別あり。

佛眼尊

胎藏界曼荼羅の遍智院並に釋迦院の二所に位す、梵には勃吒嚕沙那、佛眼と譯す、密號を殊勝金剛と稱す、佛の法界普遍の眼を人格化したる尊にして、三世諸佛能生の母なれば之を佛眼佛母と云ひ、或は虛空眼、金剛吉祥眼、能寂母とも稱す、大疏に釋迦院の佛眼を釋して「佛眼を安置せよ、亦是れ釋迦牟尼佛の母、此方には譯して能寂母と爲すなり、當に世間に見んことを樂ふがごとく作すべし、端嚴無比の身なり、通身に皆圓光あり喜悅微笑せり、此は是れ如來隨類の形の出生する三昧なり、此三昧は正しく大慈の普眼を以て體と爲し、應度の衆生を觀察して、之を導利し慈眼の遍せざる所なし、故に、遍體圓淨光と云ふ」とあり、瑜祇經吉祥品には「一切佛眼大金剛吉祥一切佛母心より一切法を出生し、一切明を成就し、能く一切の願を滿し、一切不吉祥を除て一切の福を生

じ、一切の罪を滅し、一切有情をして見る者をして皆歡喜せしめ、能く一切衆生の語言を解して、速に諸部の頂輪を成じ、最勝無比奇特難勝にして、十地を超過し、一切の諸佛菩薩金剛諸大天王を攝し、能く一切難解の事を成辨すること速疾にして過ぎたるものなく、五部の深密皆悉く能く成して一時に齊しく證する事を說きたまふ」とあり、佛眼は諸佛菩薩金剛諸天王を攝すとなすを以て、此尊を多くは佛部の攝となすも、心覺は菩薩部に入れ、佛眼修行儀軌には佛眼明王とあり、瑜祇經に依れば一字金輪と同體なる故に佛頂部の攝在なり、佛眼尊の功德を最も極端に說きたるものは瑜祇經にして、其意に依れば金剛界の大日如來胎藏の月輪に住するを一字金輪と云ひ、胎藏界の大日如來金剛の月輪に住するを佛眼佛母となす、故に此二佛は兩部不二の尊にして互に能所となり、金輪修法の五百由旬斷壞の時にも佛眼の一印明を結誥すれば、其所丈は金輪の德及ばずとなす、又金輪の眞言の終に佛眼の眞言を持するは、其功德を佛眼の母胎に藏せしむるの意となす、故に金輪法には佛眼部主となり、佛眼法には金輪部主となる、大日經には「導師諸佛母は晃曜眞金色となり、縞素を以て衣となし遍く照すこと猶日光の如く、正受にして三昧に住せり」とあり、瑜祇經に「一切佛母身を現作し大白蓮に住し、身白月暉を作し、兩目微笑し二手臍に住して奢摩他に入るが如く、一切

支分より十疑誐沙俱胝佛を出生す」また「應に三層八葉上に於て一切佛頂輪王を畫くべし、手に八幅の金剛寶輪を持し、此次に於て右に旋て七曜使者を布き、次の第二華院に頂輪王の前に於て金剛薩埵を畫け、次に右に旋て八大菩薩を畫け、各本標幟を執る、次の第三華院に右に旋て八大金剛明王を畫け、又華院の外の四方の面に於て八大供養及び四攝等の使者を畫け、皆獅子冠を戴けり、是を畫像法と名く」とあり。

定光佛

或は錠光佛と云ふ、錠とは燈器の足あるものなれば卽ち燈光の意なり、梵には提和羯羅燃燈佛と譯す、過去に釋尊に記莂を授けたる爲めなり、此等を條法の本尊とする時に種字𑖦三形佛頂形となし、形像は法界定印となす、顯敎に云ふ所の燃燈佛とは其性質を異にし、釋迦の佛頂三昧に入りたる尊なり。

寶輻辟支佛

胎藏界曼荼羅釋迦院上行南端より第七に位す、梵には囉怛曩(寶)儞尾鉢羅底曳計母駄、密號は圓寂金剛と稱す、四緣覺の一なり、白黃色にして比丘形右手掌を外にし指を垂

れて胸に當て左手袈裟二角を執りて臍下に置き赤蓮に坐す。

輪輻辟支佛

胎藏界曼荼羅釋迦院上行南端より第八に位す、梵には寧尼波羅底曳計母駄、密號は摧障金剛と稱し、四緣覺の一なり、又は圓輪輻辟支とも云ふ、輪輻とは十二因緣の輪廻を觀して覺を開くが故なり、寶輻と此二佛は部行獨覺乎、白黃色なり、比丘形なり、右手全拳にして左手袈裟二枚を執り共に胸に當て赤蓮に坐す。

旃檀香辟支佛

胎藏界曼荼羅釋迦院上行北端より第八に位す、密號は清冷金剛と稱し、四緣覺の一にして麟喩獨覺なり、旃檀香の稀有なるを麟喩に比したるなり、瘦せたる佛形にして白黃色なり、左掌を外に向けて胸の脇に立て、右手袈裟角を執りて赤蓮に坐す。

明王の意義

明王とは佛陀如來の靈力が、直接に衆生界に發現する作業を形容して、其偉大なる勢力を人格化し、之を信仰の對象と爲すと同時に、宇宙幷に人生の活動狀態を、最も現實的に、具體的に寫象したる本尊なりとす。

四大明王

降三世、軍荼利、大威德、金剛夜叉の四明王を云ふ。

八大明王

八大明王は八戸を守護すとなす、其名は馬頭明王(觀音所變)大輪明王(彌勒所變)軍荼利明王(虛空藏所變)步擲明王(普賢所變)降三世明王(金剛手所變)大威德明王(文殊所變)不動明王(除蓋障所變)無能勝明王(地藏所變)の大尊とせり。

明妃

明王は如來の慧德を司るものにて獨立せる尊なり、明王の妻妾なるが故に明妃なりと誤解すべからず、大疏九に、妃とは梵には羅逝と云ふ、卽ち是れ王の字を女聲に作して之を呼ぶ、故に傳者義を以て說ひて妃と爲す、妃は是れ三昧の義、所謂大悲胎藏の三昧なり、此の三昧は是れ一切佛子の母なり」とあり。

辨事明王

事を辨ずる明王を云ふ、金剛部には金剛軍荼利、又は金剛童子、蓮華部には蓮華軍荼利、

佛部は不動明王とす、通じては不動明王を用ゆ、佛を本土より請するときに車を牽き又は供養を行ふなり。

愛染明王

大愛欲大貪染の三昧に住する尊、梵には羅誐、譯して愛染と云ふ、或は羅誐羅闍を愛染王となし、或は摩訶羅誐を大愛と譯す、小野方にては此を最極無上の秘尊となす、其本軌は最極の秘經と稱する瑜祇經なり、愛染明王は煩惱卽菩提、大愛欲卽大薩埵の三昧を現ずるものなり。寛信は愛染明王の功德を說ひて「愛染明王とは一切法中に獨り最勝の敎と爲し、五部尊の內に實に上尊の稱を得たり、說けば能く無量の罪を滅して萬惡併ら却け、演れば速に百千事を成して衆願悉く滿つ、靈驗の甚疾なる事衆星の光に類し、威德の殊勝なる事寶瓶の珍を備ふ、加之ならず梵天帝釋は禍福を分て、偏に明王の敎勅を受け、七曜九執は運命を司て、更に本尊の威勢に順ふ、故に信仰する者は德海內に滿ち、恭敬する者は命人間に久し云々」とあり。瑜祇經に、六臂像を說て曰く「白月の鬼宿に於て淨白の素緤を取て、愛染金剛を書け、身心日暉の如く、熾盛輪に住し、三日にして威怒に視る、首髻に獅子冠あり、利毛にして忿怒形なり、又五股鈎を安んじて、

獅子頂に在らしめよ、五色の花鬘垂れ天帶耳を覆へり、右手には金鈴を持し、右に五峯杵を執り、儀形薩埵の如くにして、衆生界を安立す、次の左は金剛弓、右は金剛箭を執り、射ること衆星の光の如く、能く大染法を成す、左の下手は彼を持し、右は蓮にて打勢の如くす、一切惡心の衆、速に滅すること疑有ること無し、諸の花鬘索を以て絞結して以て身を嚴り、結跏趺座を作して、赤色の蓮に住せり、蓮下に寶瓶あり、兩畔に諸寶を吐く」とあり、而して常の形は之に依るも、左の下手は彼を持すとあるを以て、行者の意に隨て種々の物を持せしむ、卽ち寶珠、人黃、人身、人頭、鈎、索、輪、髻毛、囊等なり、又右の蓮花の手を劒或は棒又は與願になしたるものあるも、獅子冠上に五股鈎を頂きたるものは、此尊の外に見ることなし、次に愛染明王の形像に就て、身色の赤きは大悲心骨髓を碎き大慈の血淚一々の毛吼より流れ出づる形にして、熾盛輪に住するは是れ智德の最勝なるを日輪に喩へたる者、三目は三界を照見して三品の悉地を與ふるの意、獅子冠は百獸王なる如く最尊無畏を表し、五股鈎は五智五佛の三昧形、天帶は王者の相、左右第一手に鈴杵を持するは金剛薩埵の威儀にして、鈴は驚覺、杵は本有の五智にて、此鈴杵加持卽ち本有の淨菩提心の開顯なり、第二手に弓と箭とを持するは速疾の意、又は忘想を射るの標示にて、右第三手の蓮を以て打つ勢をなすは本有淸淨の蓮を以て染汚

の煩惱を打つの形、右第三手彼を持するは行者所求のことを持せしむるものとなせり。

兩頭愛染

兩頭二臂の愛染明王を云ふ、此尊は經軌に說なきも敬愛和合の本誓を基と爲し、口傳に依て作り、古より世に行はれたり、羅謙記に「像に秘密の形あり、其像は一身兩頭、但し左面瞋赤にして右面は慈白なり、遍身並に白又は赤にして、像形金剛菩埵の如し、左手に鈴を持し、右手に杵を持し、頂上に五色光を放て月輪中に住し、紅蓮華に坐す」とあり、不動明王との合體なりとも稱せり。

大威德明王

五大尊の一、西方蓮華部の忿怒身、胎藏界曼荼羅持明院般若菩薩の右に位す、梵には閻曼德迦、茲に解衆生縛と翻す、意譯して大威德と名け、大威德金剛又は持明金剛と云ふ六面六臂六足なれば六面尊六足明王とも稱す、此尊は文殊菩薩の所變にして六足なる所以は立成軌に「青黑色六足六首六臂なる所以は、六趣を淨め六度を滿じ六通を成ずとあり、胎藏界曼荼羅の像は黑色忿怒形にして大炎髮あり、六面は三面二重となり、左衣兩手六獨股印を結び、右第二手利劍、次手棒、左第二手三叉戟、次手輪にて、虎皮を裙となし磐石に坐す、八字文殊軌には「西南角には閻曼德迦金剛、青黑色にして六頭六臂六足あり、左の上手戟を執り、次下手弓を執り、次下手索を執り、右上手劍をり、次下手箭を執り、次下手棒を執り、青水牛に乘じて座となす」とあり。

降三世明王

五大尊の一、金剛界曼荼羅には金剛薩埵の忿怒形として降三世羯磨會、降三世三昧耶會の二會の主、金剛界の敎令輪なり、胎藏界曼荼羅には持明院に降三世明王聖三世明王の二尊、金剛手院には忿怒月黛尊として座す、梵號を蘇婆倆とす、故に孫婆明王、吽迦羅金剛、縛曰羅吽金剛の名あり、大疏に「所謂三世とは世をば貪瞋癡に名く、又過去の貪に由るが故に今此の貪報の身を受く、復今貪業を生じて未來の報を受くるが如し、三毒皆爾なり、名けて降三世と爲すなり、復次に三世とは名けて三界と爲す、謂く毗盧遮那如來始め有頂より下地に至るまで、上より下に向つて相次て一一の天處に皆化して、無量眷屬ある大天の主を化す、今彼天に勝れたる事百千萬倍せり、彼怖るゝ事未曾有なり、更に何の衆生あつてか我に勝れん耶と、乃至法を以て之を降伏す、卽ち次第に

下つて能く三世界の主を降伏するが故に降三世明王と名く」とあり、忿怒月黛は佛の黛より生じたる忿怒身の義なり、此尊は第八識淨菩提心の三毒を降すを本誓とするものなれば、常に金剛薩埵の所變となせども、本軌には東方金剛薩埵の主尊たる阿閦如來の所變となし、理趣經には釋迦所變となし、或は大日如來直に此身を現ずとなす、深祕相承の說には不動明王の劍索と愛染明王の弓箭とを合體せる最上甚深の尊と唱ふ、胎藏界曼荼羅の持明院の像は三面八臂にして面上に三目あり、火炎髮あり、極忿怒相にして左右二手契印を結び、右第一手三股鈴次手箭次手劍、左第一手三股戟次手弓次手索、白蓮上に坐す、七集には三股鈴の手五股杵を持すとなす、世に行はるゝ尊像は三股鈴を五股鈴となし、立像にして左足に大自在天を横臥せしめて其頭を踏み、右足を以て大白在天妃の座像を踏まんとするの勢をなす、古來自在天は煩惱障同妃は所知障の標示にして、此二障斷除の義を表すとせり。

金剛夜叉明王

五大尊の一、北方羯磨部の忿怒身、梵には縛日羅夜叉譯して金剛盡若くは金剛噉食と云ふ、金剛界曼荼羅の北方四親近中の金剛牙菩薩の異名中に此名ありて同一本誓となす、理趣釋には「摧一切魔菩薩の所變となし、本軌には虛空藏菩薩の一變となす、此尊は北方の敎令輪身なれば不空成就佛又は釋迦の所變たること攝無礙經悲化經等に出づ、此尊は一切を食ひ盡すの三昧なれば瑜祇經に「佛有り金剛夜叉と名く、一切の惡有情及び無情等の物と、三世一切の惡穢觸染欲心とを呑噉し、彼をして速に除盡し呑噉して餘すこと有ることなし」と、大噉食の本誓烏瑟沙麼明王と相通ず、瑜祇經に尊形及び曼荼羅を說ひて、「我今更に秘の金剛藥叉の形を說かん、六臂にして衆器を持せり、弓と箭と劍と輪との印及び薩埵羯磨なり、五眼忿怒を布き三首にして馬王髻あり、珠寶遍く嚴飾す」又た「若し曼荼羅を作し、及び盡し成は觀じて成ぜんには吽の一字あつて、大羯磨輪と成り光焰を放つて金色なりと觀ずべし、復臍輪の中に於て股々當て〻五分し、五大月輪を觀ぜよ、一輪に五尊を安んじて共して二十五と爲る、金剛界の字を用ひて羯磨印もて安布せよ、次に輪の四隅に於て種々色光を放つ、一隅に四忿怒あり四隅十六護なり、各五峰杵を持し金剛擲步を作す、皆吽字より生ず、身は四方の色に作せ最中の圓は佛處、四隅は內供養、次の四方の面前と左右とに二尊を安んぜよ、所謂鉤等の四及び香花等の四、次に後の相對する處に妙吉祥幢を安んぜよ、種々の寶網、繪衣、珠鬘、花、輪、鈎、桙、商佉、天女と衆樂を作すと、是の如く等安布せよ」とあり、其形像は五眼

三面六臂、右第一手に五股杵、左第一手に鈴にて金剛薩埵の威儀を表し、右第二手は劒、次手箭、左第二手輪次手弓にて左足を擧ぐ、三面中にて正面は五眼、左右兩面は三眼にて三面は三部を表し、五眼は五部を表し、弓箭は敬愛、輪劒は降伏、鈴杵は薩埵の威儀なりと傳ふ。

軍荼利明王

結界の主尊五大明王の一、南方寶部の忿怒身なり、軍荼利は瓶にして意譯を甘露或は安樂と云ふ、大咲明王、甘露金剛、吉里々々明王の異名あり、此尊は三部辨事明王なれば、甘露軍荼利、金剛軍荼利、蓮花軍荼利の三身ありて、十八道に用ゆる四方結地結火炎虛空網大三昧耶の結界は皆明王の三昧なり、瞿瞿經には「軍荼利尊是れ三部明王に通ず諸難を碎る」とあり、蘇悉地經疏には因位を說て軍荼利菩薩は是れ大精進菩薩となし、或は其所居の士を妙喜世界となす、軍荼利軌に曰く「能く諸の魔障を摧き悲惠方便を以て大忿怒形を現じ、大成日輪を成じ無遍界を照曜す、修行者暗瞑速に悉地を得、故に甘露水を流洒し、藏識中の習雜の種子を洗滌し、速に福智を集め圓淨法身を聚獲す」と、此尊は第七末那識の位なれば末那の煩惱と俱なるを表して毒蛇を以て其身を莊嚴すと云ふ、集經第八には「食せんと欲する時未だ食せざる以前に軍荼利の爲に種々の食を出して、小忿中密に軍荼利心咒七遍を誦せ、軍荼利常に咒師の處に隨て悉く擁護す」とあるを以て、今も食時作法には軍荼利明王の咒を誦すを常とす、軍荼利本軌の像は四面四臂なれども、常には一面八臂の像行はる、軍荼利軌に曰く「本尊身相應に四面四臂と觀ずべし、右手金剛杵を執り左手滿願印なり、二手羯磨印、身に威光焰鬘を佩び月輪中に住し、青蓮花色にして瑟々磐石に坐し、正面は慈にして右第二面は忿怒、左第三面は大笑容を作し、後の第四面は微く怒て口を開く」と、之を解して此四面四臂は末那識の我痴我見我慢我愛の四根本の煩惱を表すとなす、集經には一面八臂の像を說けり。

不動明王

五大尊の中尊、諸明王中の總主、諸佛に通じたる敎令輪身にして、兩部に分てば胎藏界の敎令輪なり、胎藏界曼荼羅持明院の左端に位す、現世祈禱の對象として盛に崇拜せらる、梵には阿耆羅耶多、不動或は無動と譯す、又は大聖不動明王聖無動尊、不動使者、阿耆羅尊と呼び、密號を常住金剛と云ふ、底哩經に「不動とは是れ菩提心大寂義也」と說く

が如く、吾人の本有無垢の眞心の不傾動の名なり、其本地身は大日經等には大日如來の所變となし、使者法は釋迦、立印軌は金剛手、八大佛頂軌は除蓋障、仁王軌には金剛波羅密所變と爲せり、此尊は愛染明王の高貴の三昧なるとは、正反對にして奴僕三昧に住し、頂の垂髮の七結は七代の主に忠僕なるを示し、其本誓は行者の殘飯を食し、而して頂上の蓮華に行者を載せて彼岸に到達せしむと云ふ、大疏に「其身卑にして充滿肥盛なり、奮怒の勢極念の形に形せ、是れ諸密印の標幟相なり、此尊大日の華台に於て久しく已に成佛せり、三昧耶本誓殿を以ての故に初度大心の諸相不偏の形を示現し、如來の僮僕給使となりて諸務を執作す」とあり、而して此尊は諸明王の總主なれば三部五部に通じて敎令輪身とせられ、又辨事明王とせられ、其本誓も各明王に通ずるものあり、大疏に「佛正覺を成ずる時に、三界の諸有情來らざるものなきに、大自在天獨り慢心を有して來らず、卽ち不動明王之を召すの使者となる、然るに大自在天は「一切穢汙の物を化作して、四面に圍繞して其中に住して、彼の施す所の咒術何ぞ能く爲す所あらんや」と、時に不動明王須臾に悉く所有の諸穢を噉て盡く餘す無からしめ、執て彼を」して佛所に來至せしむ」とて、烏瑟沙麼明王と同三昧を說き又「大自在天が我は是れ諸の主なり、爾(不動)の所命を受けんや」と尋て逃げ歸る、是の如くする事七返、時に不動明

王卽ち彼を持つて、左足を以て其頂の半月中を躡み、右足をもて其妃の首の半月上を躡めり、爾時に大自在天尋て便ち命絕す、卽ち爾時に於て悶絕中に於て無量法を證し、而して授記を得たり」とあるは全く降三世明王と同一本誓なり、此尊の形像に就ては大日經に曰く「不動如來使あり慧刀と羂索とを持し頂髮左の肩に垂たり、一目にして而して諦に觀、威怒にして身に猛焰あり、安住して盤石に在す、面門に水波の相あり、充滿せる童子の形なり」とあり、大疏に之を解して「利刀を持し羂索を以てする所以は、如來愍怒の命を承けて、盡く一切衆生を殺害せんと欲するなり、羂索は是れ菩提心中の四攝方便なり、此を以て不降伏の者を執繫し、利慧の力を以て其業壽無窮の命を斷つて大空生を得せしむるなり、若し業壽の種を除けば卽ち戲論の語風も亦皆息斷す、是故に其口を緘閉せり、一目を以て之を視る、得は如來の等目を以て觀る所一切衆生宥むべき者無きを明す、故に此尊凡そ所爲の事業有るは唯々此一事の因緣の爲なり、其重障の盤石を鎭めて復動せざらしむるは、淨菩提心の妙高山を成ずるなり、故に安在盤と云ふ」とあり。

不動明王二童子

不動明王の前に立つ矜羯羅と制吒迦の二童子なり、不動使者法には矜羯羅を恭敬小

心者卽ち善性となし、制吒迦を難共語惡性者となし、二童子法は不動尊の智慧と福德との二使者となす。

不動明王八童子

不動明王の眷屬、其本據は不動八大童子軌にして、此の八人は四佛四波羅密の德を具ふとなす、第一慧光童子、或は廻光に作る、東方金剛部菩提心門にて日光を以て喩となして慧光と呼ぶ、「少く忿怒にして天冠を着け、身白黃色、右手五智杵を持し、左手蓮上月輪を置く、袈裟瓔珞種々莊嚴す」第二慧喜童子、或は廻喜に作る、南方寶部福德門にて、福智圓滿なれば慧喜と名く、「形は慈面にて微笑の相を現し、色紅蓮の如く、左手に摩尼を持す、右手三股鈎を持す」第三阿耨達童子、阿耨達は龕して無熱と云ふ西方蓮花部智慧門を表す、「形は梵王の如く色眞金の如く、頂し龍王に乘る」第四指德童子、北方羯磨部精進門なり、前三部の德は此精進に依て果を得る故に指德と名く、「形夜叉の如く色虛空の如く、三目あり、甲冑左手に輪を持し、右手三叉鉾」愚鈔に右に鈴左に三股杵を持したるものあり、第五烏俱婆誐童子、翻して超越住と云ふ、金剛波羅密の德、五股冠を戴き、暴惡相を現じ身金色の如く、左手縛日羅を執り、右拳印に作る」愚鈔には右に獨股戟左に輪を持す、第六清淨比丘寶波羅密の德、首髮剃除し法袈裟を着け、左肩に結び垂れて、左手梵篋を執り、右手心に當てゝ五股杵を持し、右肩現露して腰に赤裳を纏ひ、其面貌非若、非老目は青蓮の如く其口上牙下に顯出す」愚鈔は左右手持物を逆にせり、第七矜羯羅童子、譯して隨順と云ふ、法波羅密の德、形十五才位の童子の如く、蓮花冠を着け、身白肉色、二手合掌して其二大指と頭指との間に横一股杵を挿む、天衣袈裟微妙に敬飾せり、第八制多迦童子、業波羅密の德、童子の如く、色紅蓮の如く、頭に五髻を結び、左手縛日羅、右手金剛棒、瞋心惡性の者故に袈裟を着けず、天衣を以て其頸肩に纏ふと稱す、然るに不動二童子法には、矜羯羅童子を智慧の德を司るとなし、形喜見童子の如く慈悲貌に作れ、頂に蓮花あり、左に杵を持し、右蓮花を執る」また「瞋形に作れ皺文を現し、左に索を執り、右劒を把り、大體聖尊の如く獅子王に乘る」となし、制多迦童子を福德の尊となし、「其像は白馬に乘り驟き勢の如く、頂下に鈴子を懸け、童子頂に五髻有り、身に緋衣を着け、形十五歲の兒の如く喜怒相とを現す」となす、多くの二童子は二童子法の蓮花を持つ、矜羯羅童子軌の制多迦童子とを左右に列せり。

波切不動

高野山南院に安置する所の靈像を云ふ、此像は大師在唐の日自ら刻み慧果阿闍梨に開眼を受け、歸朝の時、海上猛風起りたるに、此尊を祈念したれば風波息みたるを以て

名くと、天慶の亂には尾張國に奉じて、怨敵降伏を祈り、弘安の役には筑前鹿島に奉じて元寇殲滅を祈りたり、今も尙高野山の大祈禱會ある時には山王院に奉じて祈禱するを例とす。

倶利迦羅明王

倶利迦羅龍王又は倶利迦羅不動と云ふ、倶利迦羅陀羅尼經に依らば不動明王と魔王と法力を爭ひ、法形を現して魔王の劍に纏ひたりとなす、此說は劍が魔王にて龍が明王なり、又此尊を不動明王所變とすれば卽ち明王の三昧耶形たる劍と索とにして、此索が龍王形なりとの說あり、不動使者法に「若し古力迦羅龍を使はんと欲せば、壁上に於て一劍を畫き、古力迦羅龍王を以て此劍上に繞ふ、龍形は蛇の如し、劍中に此阿字を書し、心中亦自ら劍及び字を觀じ、了々分明に心に、不動使者を念ぜよ、一百八返を誦し一日三時に六箇月を滿せよ、多く誦する益好し、若し月滿ちて已後は古刀迦羅龍王自ら其形を現じ人形狀を作し、常に相隨て遂に驅使する所に任ぜん」とあり、其源は不動明王を念じて倶利迦羅龍王を使役する法なるが、轉じて倶利迦羅卽ち不動明王となりしなり。

大元帥明王

鎭護國家の法たる大元帥御修法の本尊、梵には阿吒婆拘、譯して曠野鬼神と云ひ、意譯して大元帥明王となす、此尊は小栗常曉の請來する所にして、常曉は歸朝上表文に其德を嘆じて、大元帥の祕法を習ふ、斯法たるや別ち如來の肝心衆生の父母、國に於ては城塹人に於ては筋脈なり、是大元帥は都內には十供奉以外に傳へず、諸州節度の宅を出ることなし、緣を表するに其靈驗不可思議也、諸佛天等の像、前に來る在るも此像未だ請來せず、今則ち大元帥諸身曼荼羅並に諸靈像所要の書等請來到るを見る」と稱し、本軌に「阿吒縛拘元帥を畫け身黑青色にして身長六尺四面にして當前は佛面に作り、左面は虎牙相叉し三眼なり、眼赤きこと血の如し、右面は神面に作せ、瞋相にして虎牙相叉し三眼なり、左右に牙を安し髭髮あり頭上の一面は惡相に作せ、亦三眼にて虎牙相叉し眼赤き血色の如し、最上頭に赤龍を以て髻に纏ひ、大焰頂上に連り聳え、身に蛇を懸けて八臂なり、左上手には輪を執り次に槊を執り次は右の第三手と前に當て、合掌して供養印を作し、次下手索を執り、右手跋折羅を執り次手棒を執り、次下手は印を作し、次下手刀を執る、卽ち臂の上に皆龍あり、龍は腮を胸前に出せり」とあり、又た同軌

に神將像は上々の好絹高さ八尺大怒形を作せ、四臂あり、左上手には千輪大輪を執り、右下手大怒印(忿怒拳)を作し、左下手は胯に託け、右上手には拔打羅を執る、七寶冠瓔珞髮を結び鬚黑し、眼白く怒瞋看ること鈴を懸くる如し、上脣下脣を齧み、擧身皆青黑奥色にて虎皮を褌と作し、脚には二藥叉を踏て鞋を着けしめよ」とあり。

孔雀明王

胎藏界曼荼羅蘇悉地院の南端より第六に位す、此明王は諸佛能生の德に住するが故に孔雀佛母とも稱す、諸毒を除くを本誓とす、梵には摩嚕利と云ひ、佛母金剛と稱す、孔雀經に曰く「吉祥と曰ふ、出家して未だ久しからず、僧の洗浴の薪を爲る時異木の下に一黑蛇あり、來て比丘の右足指を螫す、悶絕して地に躃き、目翻て沫を吐く、時に阿難佛所に詣て曰く何か之を治する時ぞ、佛阿難に告たまはく汝如來大孔雀王咒經を持し吉祥比丘を擁し、結戒結咒を爲さば毒をして害する事能はず、刀杖も衆患を加る能はず悉く除く」とあり、胎藏界曼荼羅の像は肉色にして右手に孔雀尾を持し左手に開敷蓮を持し、赤蓮花に坐す、畫像軌には「金色の孔雀に乘り白蓮花上に吉跏趺坐し、慈悲相に住し四臂あり、右邊第一手は開敷蓮花を執り、第二手は具緣菓を持し、左邊第一手心に當て掌に吉祥果を持し、第二手は三五莖の孔雀尾を執る」とあり。

烏芻沙摩明王

不淨を司る明王、梵に烏芻沙摩、烏樞瑟摩、烏芻瑟摩等と書し、穢跡金剛、不淨金剛、受觸金剛、穢觸金剛、壞斫金剛、火頭金剛と云ふ、北方羯磨部の敎令輪身にして金剛夜叉明王と同じ本誓なれば、台密には五大尊の北方の金剛夜叉を除きて此明王を加ふ、多く不淨を除くの意にて厠等に祭らる、淨土宗にては放生會に此尊を祭るといふ、金剛夜叉明王の像は一種なれども、烏樞瑟摩明王經は數種の畫像法を說き、其他異說多し。

步擲明王

八大明王の一、梵には播那曩結使波と云ひ、步擲と譯す、八大佛頂儀軌に普賢菩薩の異名となす、步擲軌に其德を說ひて「永く三途を離れ普賢の行を具し傍生餓鬼此一形に盡て復更に受けず、亦想ふ諸地獄を焚し壞滅餘す事なし、罪人解脫し菩提心を發し、諸惡魔等遇者は摧伏し避除退散す」と說き、八大佛頂軌には「步擲明王右手傘蓋を執り、左に杵を持し遍身虛空色にして火災を施く」とあり、步擲軌には「遍身青色にして十八臂

あり、右顧して右足を舒べ、左膝を屈し右上手垂下し大指を屈して入掌し、中名指之を握る餘の二指を舒て手背外に向ひ、次手挑を持して垂下す(挑は排にて榜排にやあらん)、次手掌を舒て下に向ひ掌中火焔あり、次手は鐵斧、次は玉環、次は指を竪擬して指上輪あり、次は拳にして大指頭指の側を押す、次は羂索次手五指を舒て掌を仰て弓を持す、左上手三股杵、次は劍、次は圓石を握り、次は短柄の槌次、は兩隻箭、次は杖次は獨股杵、次掌を舒て仰て頭指大指相捻するの契、次は寶捧とし、前に四臂の魔王二金剛童子ありとなす。

無能勝明王

胎藏界曼荼羅釋迦院の釋迦如來の前にあり、其妃と相對して一門を守護す、梵には阿波羅爾多又阿逸多と云ひ、翻して無能勝と云ふ、密號は勝妙金剛と稱す、大疏に、此は是れ釋迦の化身なり、其無量の自在神力を隱して、而して此忿怒明王の形を現す、謂く衆生を降伏して諸障を盡す也、佛樹下に坐して四魔兵衆を摧破す、無能勝は不可破壞の義也」とあり、八大佛頂軌には地藏菩薩の所變となす、胎藏界曼荼羅の像は四面四臂にして各三目あり、火炎髮にして、右第一手は金拳にして高く擧げ、次手も同樣にして腰に當て、左第一手は鉞斧、次は三股戟なり、八大佛頂軌には右第二手に獨股杵を持す。

無能勝妃

胎藏界曼荼羅釋迦院の釋迦如來の前の無能勝明王と相向て右に侍す、密號は長生金剛と稱す、其三昧無能勝明王に同じ、青色にして三目忿怒形、火炎髮を頂き、左右各金拳にして頭指を伸べ、右を高く擧げ左を胸に當つ天衣を着け走るが如き勢をなす。

大輪明王

曼荼羅壇能成就の尊、或は大輪金剛とも云ふ、慈氏菩薩の所變にして一切諸魔を降伏す、常に唱ふる大金剛輪陀羅尼と金剛輪陀羅尼は此尊の眞言にて胎藏界曼荼羅虛空藏院の曼荼羅菩薩は此菩薩と同本誓にて、秘鈔には大輪金剛とす、忿怒像にして青蓮華上に坐し大髮髮あり、右手に八輻の金輪を持し左手に獨股杵を持す。

菩薩の意義

菩薩、具には菩提薩埵、意解して大丈夫と云ひ、大士と云ひ、仁者と云ひ、勇猛と云ひ、種々の意義を有するも、要するに對自的には勇猛精進の梵行者にして、對他的には己を犧

性にして公共の爲めに努力する聖賢なり、若し之を宗教的に見るときは、絶對と信者の間に介在して、一方に信者を導き、一方には本尊の靈力を直接に活躍せしめ、或は信者の友僚と爲りて、善を攻め惡を誡め、或は其具體的標準と爲りては、修道の規範を示す、佛如來は神聖なる君主の如くにして、菩薩明王は上長官に似たり、然り而して菩薩も亦明王の如く、佛如來の靈力を化現したるものあり、或は事實上歴史的に存在せしものなり、或は佛具其他種々の物體に有する効德を形容して菩薩と爲す事あり、我國にて米を菩薩と稱する俗習あるが如き之なり、尤も常途に所謂菩薩は、一方に自度的佛道を修すると同時に、他方には衆生濟度を旨とする、熱誠勇猛精進の大士にして、未だ圓滿自在の佛地に到らざるも、凡夫若しくば辟支佛卽ち羅漢所謂獨善君子より進んで佛地に赴く途次に在る者にして、畢竟するに吾人の實際的先覺者たる者なり。

四大菩薩

普賢菩薩、文殊菩薩、觀音菩薩、彌勒菩薩を云ふ、大日經の始には觀音菩薩を除て除蓋障菩薩を加ふ。

八大菩薩

八大菩薩曼荼羅經所說の觀音、彌勒、虛空藏、普賢、金剛手、文殊、除蓋障、地藏の八大菩薩を云ふ。

十二供養菩薩

內外八供養菩薩と四攝菩薩にて十二供養なり、四攝菩薩を、供養の意なりとするは奇異の如くなれども、凡て奉仕するものは供養と稱す可きを以ての故に三十七尊皆供養の義なりと知るへし。

文殊菩薩

胎藏界曼荼羅中臺八葉院の東南隅に位し、又文殊院の主尊として其中央に位す、金剛界曼荼羅には賢劫十六尊中に位し、其內證は金剛利菩薩と同一體となす、梵には文殊師利または曼殊室利と云ひ、譯して妙吉祥、妙德、妙音等と云ふ、文殊は梵語の畧號なり、大疏に「妙祥菩薩とは、妙は謂く佛の無上慧なり、猶醍醐純淨第一なるが如く、室利を翻して吉祥となす、卽ち是れ衆德を具する義なり、或は妙德と云ひ、亦は妙音と云ふなり言く大慈悲力を以ての故に妙法音を演べ一切をして開かしむ」とあり、密號は吉祥金剛又は般若金剛と云ふ、八不の利劍を揮て一切妄想の戲論を斷ずる故に、理趣經には一切法無戲論如來と云ふ、胎藏界曼荼羅には八大童子を眷屬とす、薄草訣には、此尊は

是れ諸佛の深智三身の妙慧、說法利生の德遍して十方に及び除癡授慧の用九界に被る、知るべし、衆生の帝師諸佛の父母なり、三世覺母の稱職として是に依る」とあり、眞言敎にては一字文殊、五字文殊、六字文殊、八字文殊と分ち、其頂髻に依りて一髻文殊、五髻文殊と分つ、單に文殊と稱すれば五字文殊を指す、大疏に文殊院主たる尊を釋して曰く「文殊師利身欝金色にして頂に五髻有り、童子形と作せ、左に泥廬鉢羅を持す、是の細葉青蓮華の上に金剛印有り、極燕怡微笑して白蓮華臺に坐す、此其秘密標幟也、阿闍梨の言く欝金は卽是れ閻浮金色、以て金剛深慧を表し、首に五髻あるは如來五智を表はさんが爲也、久已成就本願の因緣を以ての故に、童眞法王子の形を示作す、青蓮華は是れ諸法に染着せざる三昧なり、心に所住なきを以ての故に、實相を見る、金剛智印の能く常寂の光を以て遍く法界を照す、所以に白蓮華に坐す」とあり、胎藏界曼荼羅中臺八葉院の像は、黃金色髮髻冠にて右手に梵篋を持し、左手に青蓮華の上に三股杵を立てたるを持し、文殊院の尊は欝金色髮を五髻にし、左手に青蓮華上に三股杵あるを持し、右手を施無畏にす、金剛界賢劫十六尊中の像は左に蓮上梵篋あるを持し、左拳を腰にす、五字陀羅尼頌には五髻にて五智寶冠を頂き、右手劍左手青蓮上に梵篋を載せたるを持するの像あり。

寶冠菩薩

胎藏界曼荼羅文殊院文殊菩薩の右第二に位す、梵には阿囉怛那麼句吒、寶冠と譯し、密號は莊嚴金剛と稱す、文殊菩薩の莊嚴の德を主る使者なり、童子形三髻黃色にして、左手細葉の青蓮上に寶冠を載せたるを持し、右手寶珠を載せ胸に當て赤蓮に坐す。

妙音菩薩

胎藏界曼荼羅文殊院文殊菩薩の右第五に位す、此の位の尊を秘藏記には五字文珠と稱し、青玄二軌には五髻文殊と稱す、されど五髻にあらずして三髻なれば、文珠使者なるべし、童子形二髻黃色にして、右手細葉の青蓮を持し、左手梵篋を持し赤蓮に坐す。

月光菩薩

藥師如來の兩脇士の一、胎藏界曼荼羅文殊院文殊菩薩の右第四に、位す、梵には阿利也(聖)贊坦羅(月)鉢羅波(光)と云ひ、聖月光と譯す、密號は威德金剛と稱せり、童子形三髻黃色にして左手未敷髻を持し、右手細葉の青蓮上に半弦月を載せたるを持し赤蓮に坐す。

八大童子

文珠菩薩の八大童子は、

- 東北方計設尼
- 東南方鄔婆計設尼
- 東方質多羅(又名救護慧)
- 西南方地慧(又名財慧)
- 北方請召
- 南方光網
- 西方無垢光
- 西北方不思議慧

五童子

八大童子

不思議慧童子

胎藏界曼荼羅文殊院南端五奉敎者あり、其中央に位す、八大童子の一たり、或は不思議慧は此五奉敎の總名とす、天女童子形壹髻肉色にして兩手に杖頭に半月あり其上に星形あるを持し、蓮上に跪く。

光網童子

胎藏界曼荼羅文殊院文殊菩薩の左に坐す、或は光網菩薩と云ふ、梵號には制利捉婆羅波と云ひ、密號は色相金剛と稱し色相莊嚴の意、八大童子の一、文殊の福德を主る、大疏に、光網童子菩薩、身眞金色にして寶網を執持し種々の瓔珞を以て莊嚴して寶蓮花中に坐す、文珠は無相の妙慧を持し、而して光網は萬德莊嚴を持す、智度に說く所の如し、鹽を以て諸食に調和すれば其味を倍增すとあるも、鹽のみ空く噉ふべからず、故に行人般若の方便を失して單に空慧を修すれば卽ち斷滅の中に墮し、專ら福德を修すれば卽ち有所得の中に墮す、佛の長子(光網)を觀ずる所以は意此に在るなり、童子形三髻黃色左手細葉の靑蓮を持し、右手索を持し、赤蓮に坐す。

烏婆計設尼童子

胎藏界曼荼羅文殊菩薩の左第二に位す、烏婆は亞ぐの義、卽ち端嚴(計設尼)に亞ぐの意なり、文殊菩薩能施の德を主る八大童子の一、童子形三髻黃色にして右手獨股戟を持し、左手大頭小の三指を竪て餘を屈し胸に當て、赤蓮に坐す。

悉多羅童子

胎藏界曼荼羅文殊菩薩左三位に位す、文殊八大童子の一なり、悉多羅とは雜色の意にて普現色身の空德を主る、又は救護慧童子とも稱す、童子形三髻黃色にして右手杖上

に月輪あり、其上に星形あるものを持し、左手細葉の青蓮華を持し赤蓮に坐す。

無垢光童子

胎藏界曼荼羅文殊院文殊菩薩の右第三位に位す、梵には尾麽羅鉢羅婆、密號は離塵金剛と稱す、八大童子の一、文殊の空智は無垢にして光明を放つを顯す、三髻童子形黃色にして、左手未敷蓮を持し、右手寶鉢を臍下に安んじ、赤蓮に坐す。

地慧童子

又は持慧童子と書し胎藏界曼荼羅文殊院文殊菩薩の左第四に位す、文殊八大童子の一、地慧又は財慧と名け富財の願を主る、童子形三髻黃色、右手獨股戟頭の幡を持し、左手細葉の青蓮を持し、赤蓮に坐す。

召請童子

胎藏界曼荼羅文殊院文殊菩薩の左第五に位す、八大童子の一、梵には阿羯囉灑也、召請と譯し、密號は普集金剛と稱す、衆生を菩提道に召請する德を主る、童子形三髻黃色にして、右手獨股戟を持し、左手細葉の青蓮を持し、赤蓮に坐す。

一字文殊

齒臨の一字を眞言とする文殊菩薩を本尊として增益產生虐病等に修する法、覺禪鈔には福德法也行者東方に向て修すべし」とあり、一字陀羅尼經には「能く受持する者は文殊師利童子菩薩常に來て擁護し、或は覺時にも夢中にも身相及び諸善事を現じ、能く此人をして大歡喜を生ぜしむ」と說き、後に「女人難產の時阿吒盧沙迦根或は郎伽利迦根を取り之を咒すること七遍し、蟲なき水を以て和して之を練り、產女の臍中に塗らば兒卽ち易生す」等とあり、其他齒痛頭痛急病等に功德あることを說く。

普賢菩薩

胎藏界曼荼羅には中台八葉院の東南の隅に位し、金剛界曼荼羅には賢劫十六尊中に位す、梵には三曼多跋娜羅、普賢と譯す、大疏に「普賢菩薩は普は是れ遍一切の義、賢は是れ最妙善の義なり、謂く菩提心の所起願行及び身口意悉く皆平等にして一切處に遍せり、純一妙善にして備に衆德を具す故に以て名となす」とあり、菩提心の德に住す、香象の釋には德法界に周きを普と云ひ、善に淨順なるを賢と云ふとあり、密號は眞如金剛と云ひ、理趣經には一切平等建立如來と名く、普賢菩薩は大日如來の大眷屬たる四大菩薩八大菩薩の一にして、文殊の智に對し、又觀音の悲に對して空德を司る、薄草訣には普賢と金剛薩埵とは理智の不同なり、故に普賢は法界眞如體を云ふとあり、五祕

密軌には「我應に金剛薩埵大勇猛心を發すべし、一切有情に如來藏性を具せり、普賢菩薩一切有情に遍ずるが故に「我一切衆生をして金剛薩埵の位を證得せしむ」とあり、此に依れば普賢は眞如理因にして金剛薩埵は證得智果たり、胎藏界曼荼羅中台院の尊は白肉色にして五智寶冠を戴き、左手に蓮花上に利劍立たるを執り、右手は小指無名指を屈し三指を竪て掌を仰がしむ、曼荼羅の文殊院中文殊に侍する像は、左手に蓮上三股あるを持し、右平五指を伸して掌面を上に向ふ、顯教の法華經華嚴經等に說く像は白象に乘り合掌す、不空羂索經に「普賢菩薩左手掌を揚げ右手劒を執り結跏趺す」とあり、不空羂索陀羅尼經に「蓮華色の如く寶天冠を戴き、紺髮垂下して、一切嚴具其身を莊嚴し、而して兩臂あり歡喜顏吠偏袒右肩し合掌す」とあり。

彌勒菩薩

胎藏界曼荼羅中台八葉院東北方の蓮上に坐し、金剛界曼荼羅には賢劫十六尊中東方に坐す、羯磨會三十七尊中の西方金剛因菩薩卽ち此尊の本誓にして、大輪金剛は此尊の敎令輪身なり、梵には昧怛隷野、譯して慈氏と云ふ、彌勒と云ふは梵語の訛なり、密號は迅疾金剛と云ふ、大疏に「慈氏菩薩は諸佛の四無量心なり、今慈を以て積首と爲す、此の慈如來種姓中より生じて能く一切世間をして佛家を斷ぜざらしむ、故に慈氏と云ふ」とあり、四無量心の三昧なれども慈の勝れたるに約して名く、此尊は都率天に淨土を搆て衆生を攝化するが故に、大師の遺告には吾閉眼の後は必ず方に都率天に往生し、彌勒慈尊の御前に侍るべく、五十六億餘の後必ず慈尊と共に下生せん、とあり、密敎徒は此都率往生を願ひ、最も盛に崇拜せらる、此尊の三形は窣都婆にて大日如來の三形と同一體なれば、慈氏軌は「慈氏大日同一體なり、尾嚕左那卽ち慈氏」となして、一體無二の深旨を說く、賴瑜が薄草訣の彌勒法の末に曰く「大師門弟は專ら中心を都率の雲に繫げ、上生を內院に遂ぐ、之に依て密嚴禪儀(興敎大師を指す)言く、高祖既に往く末資蓋そ願はざらんや云々と、此言肝に銘ずる而已、但予が如き愚鈍の類忝なく大日の餘輝を信仰すと雖、猶質多の花臺に顯はれ難く、屢々高祖の遺風を傳ふるも、又都率の雲閣に攀ぢ難く、仍て欣ぶ所は是れ順次往生を九品に遂げ、見佛聞法を三會に期せん而已」とあり、肝藏界曼荼羅の像は左手を胸に當て外に向て開き、左手蓮上に瓶を安んじたるを持し、冠中に窣都婆あり塔中舍利を安んずと、金剛界曼荼羅微細會の尊は右手大頭小の三指を立て、中無名の二指を屈し胸の前に置き、左手に寶珠を安んじて膝に置く、慈氏軌には「首に五如來冠を戴き左手に蓮華を執り華上に法界塔印を置き右手

說法印を作り結跏趺坐せり」とあり、同軌に結跏趺坐して三昧地に入るの形の如し、兩臂あり、又手掌に一の寶蓮華臺を持し、蓮華臺上に於て尾噜左農佛塔を畫き、佛塔の上に大日如來を畫く」とあり。

般若菩薩

胎藏界曼荼羅持明院の中央に位す、虛空藏院の十波羅密菩薩中の般若波羅密菩薩も此尊と同三昧にて、金剛界曼荼羅北方四親近の金剛護菩薩も同三昧なり、梵には波羅松攘波羅密多、之を智到彼岸と譯す、般若は卽ち智なり、密號は大慧金剛と稱す、此尊は大般若經の本尊にして、三世諸佛能生智母と稱す、胎藏界法を修する時行者が此尊の座位に座するは智母の胎中に宿る義なり、胎藏界曼荼羅持明院中央に座する像は、肉色にして寶冠を戴き額上眼あり甲冑を被け六臂なり、左第一手梵篋を持し胸に當て、次手掌を仰て臍下に安んじ、第三手無名指を屈し大指と相合せ(七集頭指を屈す)右第一手は頭指を屈して持花の印の如くして胸に當て、第二手は與願、第三手は無名指を屈すると左に同じ、赤蓮(後に寶蓮)に座す、虛空藏院中の虛空藏菩薩の上行左第一に位する尊は、白黃色にして羯磨衣を着け、右に利劍、左手の大頭中を屈し無名小を立て、赤蓮に丁字形に座す、仁王念誦法には「左手を胸に當て般若梵篋を持し、右手乳に當て說法印をなす、大拇指を以て無名指頭を押す」とあり。

虛空藏菩薩

胎藏界曼荼羅虛空藏院の中央に位す、釋迦院には釋尊に侍し、金剛界曼荼羅の金剛寶菩薩は此尊と同本誓なり、又金剛界曼荼羅賢劫十六尊中に位す、梵には阿迦捨揭婆耶と云ひ虛空藏と譯す、密號は如意金剛、庫藏金剛、富貴金剛、無盡金剛と云ふ、大疏に「虛空の破壞すべからず、一切能く勝つ者無きが如くなるが故に虛空藏と名く、又藏とは人大寶藏有り、所欲の者を施し自在に之を取り貧乏を受けざるが如く、如來虛空藏も亦復是の如く一切衆生を利樂すること皆中より無量法寶を出し自在に受用して窮竭なし虛空藏と名くる也」とあり、虛空藏念誦法には「一たび稱し一たび念ずれば所得の功德福聚猶虛空の如し、何に況んや作意して法の如く修持せんをや、所願必ず殊勝の成就を獲」とあり、德福智惠の兩門を兼ねたるものにして、寶部理智不二の三昧なれば、此を尊崇する事甚しく、五大虛空藏法、求聞持法等最も秘法として多く行はる、大日經に「虛空藏勤勇を畫くべし、白衣を被り刀を持し焰光を生ず」とあり、胎藏界曼荼羅虛空

藏院の像は、肉色にて左に開敷蓮上に三瓣寶あるを持し、五智寶冠を戴き寶蓮花に塵す、右は智惠門にして左は福德門の表示なり、釋迦院の釋尊に侍する像は左手に雲上寶あるを持し右手に白拂を持す、金剛界曼荼羅の賢劫十六尊中の尊は右に寶珠を持し左拳を腰に置く、求聞持軌は右手與願左手白蓮上に吠瑠璃色の寶珠あるを持し、念誦法は之と反對に右手に青蓮上に紅頗梨色寶あるを持し左手を施無畏にす、觀虛空藏經には此丘像を作せと說く。

無垢逝菩薩

胎藏界曼荼羅虛空藏院の虛空藏菩薩の左第一に位す、梵には阿尼摩羅誐底、密號は明徹金剛と稱す、肉色にして左手蓮華索、右手與願、赤蓮に坐す。

虛空無垢菩薩

胎藏界曼荼羅虛空藏院の虛空藏菩薩の右第一に位し、密號は法輪金剛と稱す、肉色にして左手蓮上に輪を安じたるを持し、右手掌を仰て獨股を立て赤蓮に坐す。

俱發意轉輪菩薩

胎藏界曼荼羅虛空藏院の虛空藏菩薩の右に坐し、梵には莎荷貨都跛多達摩羯羅と云ひ、密號は法輪金剛と稱す、纔發心轉法輪菩薩と同本誓なりとす、肉色にして左手蓮上に輪を安じたるを持し、右手掌を仰て獨股を立て赤蓮に坐す。

生念處菩薩

胎藏曼荼羅虛空藏院虛空藏菩薩の右第二に位す、梵には三沒里、底婆惹地也、密號は幢持金剛と稱す、虛空藏の四行德を主る、生は萬法を生ずるの意にて、念處は智慧を云ふ、肉色にして右手蓮上月形中に商佉あるを持し、左手頭指を伸べ餘を輕く屈して、仰て胸に當て赤蓮に坐す。

曼荼羅菩薩

胎藏界曼荼羅虛空藏菩薩の左第五に位す、密號は秘密金剛、輪圓金剛、集起金剛と稱す、大輪菩薩と同本誓にして諸法能生の德を主る、黑色忿怒形にして、三目六臂火炎髮にして左手第一手小金剛輪の印を結び仰て頂上に安じ、左第二手輪、第三手獨股、右第二手三股、第三手劍、赤蓮に坐す。

蘇悉地羯羅菩薩

胎藏界曼荼羅虚空藏院、虚空藏菩薩の左第四に位す、密號は成就金剛と稱し、萬法成就の德を主る、經の現智菩薩之に當る、白黄色にして普供養の印を逆にし、指頭を下にして赤蓮に坐す。

金剛藏王菩薩

胎藏界曼荼羅虚空藏院の南端に位す、梵には縛日羅嚫羅婆野、金剛藏と譯す、賢劫十六尊の一なり、密號は秘密金剛持教金剛立驗金剛と云ひ、東方金剛薩埵は大圓鏡智第八識の萬法含藏の位なれば、其功德の廣大無邊なるを形に顯したるなり、世俗に藏王權現と稱するものとは異なり、青色一百八臂二十二面と稱す、但し現圖を見るに十六面あるのみにして、上の六手中五手は印にして一手賢瓶を持す、此瓶中に萬法を藏すを表す、一百八臂には三股、獨股、輪、索、戟、劍、鉤、寶珠、梵篋、棒、花形杵等あり。

金剛針菩薩

虚空藏院虚空藏菩薩の左第二に位す、梵には傳四羅素支、金剛針と譯す、密號は精進金剛と稱す、大疏に「大刀金剛針、素支を譯して金剛針と云ふ一股拔曰羅を持して以て標幟となす、此の拔曰羅は是一朝一緣の堅利の慧なり、此を用ひて諸法を貫徹して通ぜざる所なし、故に金剛針と名くるなり、其下に二使者有り皆女人形なり、胡跪微笑して之を瞻仰す、其狀卑にして充滿、淺黄色にして金剛を以て標となす、是は彼の重障を摧壞する三昧也」とあり、像は肉色左手蓮上に獨股を立てたるを持す、右手中無名指を屈して大指と合せ、頭小二指を舒べ白蓮に坐す。

檀波羅密菩薩

胎藏界曼荼羅虚空藏院中央より左第一に位す、十波羅密菩薩の一、梵音の檀那は布施と譯し、密號は普施金剛と稱す、肉色にして羯磨衣を着け左手金盤に花を盛りたるを捧げ、右手頭中無名三指を金盤の端に懸け赤蓮に坐す。

戒波羅蜜菩薩

胎藏界曼荼羅虚空藏院中央より右第二に位す、密號は尸羅金剛と云ふ、十波羅蜜菩薩

の一にして凡ての淨戒を主れり、肉色にして羯磨衣を着け左手三瓣寶を持し、右手伏て膝を押し赤蓮に坐す、石山七集には左手は頭中二指を屈し立つとなす。

方便波羅蜜菩薩

胎藏界曼荼羅虚空藏院の上行右第二に位す、梵には烏波野波羅密多と云ひ、密號は究竟金剛と稱す、十波羅密の一、如來悲無量心に位し、大悲索を以て衆生を引縛して菩提に至らしむるを司る、肉色にして羯磨衣を着し、左に索を持し右手索端を受け赤蓮に坐す。

願波羅蜜菩薩

胎藏界曼荼羅虚空藏院の上行右第三に位す、梵には阿利也波羅尼那波羅密多と云ひ、密號は成就金剛と稱す、四弘誓願を主るを以て名く、白黄色にして羯磨衣を着し、左に漉水囊を持し、右無名小の二指を立て餘を屈し刀印となし赤蓮に坐す。

施無畏菩薩

胎藏界曼荼羅除蓋障院の上より第三に位す、梵には阿波延拏駄、旅無畏と翻す、密號は自在金剛と稱し、衆生に五智の光明を以て施與して畏るゝ所なからしむ。

忍辱波羅蜜菩薩

胎藏界曼荼羅虚空藏院中央より左第三に位す、十波羅密菩薩の一、三忍を主る、梵には乞叉底波羅密多と云ひ、密號は帝利金剛と稱す、肉色にして羯磨衣を着け左手に金盤を握り、右手頭指を立て餘を握り背けて金盤に附す。

精進波羅蜜菩薩

十波羅密菩薩の一、胎藏界曼荼羅虚空藏院の中央より左第四に位し、勇猛不退の德に住す、梵には微利也(精進)波羅密多(到彼岸)と云ひ、密號は慧護金剛と名く、肉色にして羯磨衣を着け、左手に獨股戟を持し、右手無名小の二指を屈し餘指を竪てゝ刀にし赤蓮に坐す。

禪那波羅密菩薩

胎藏界曼荼羅虚空藏院中央より左第五に位す、梵には地也那波羅密多と云ひ、密號は正定金剛と稱す、十波羅密菩薩の一、静虚を主る、白色黄色にして羯磨衣を着け、定印に位し赤蓮に坐す。

力波羅密菩薩

胎藏界曼荼羅虚空藏院上行中央より右第四に位す、梵には波羅尼波羅密多と云ひ、密號は勇力金剛と稱す、如來の十力を主る、肉色にして羯磨衣を着け右手に荷葉上に獅子あるを捧げ、左手を拳にして腰にし赤蓮に坐す。

十波羅密菩薩

檀波羅密、戒波羅密、忍辱波羅密、精進波羅密、禪波羅密、般若波羅密、方波羅密、願波羅密、力波羅密、智波羅密の十菩薩なり、胎藏界曼荼羅虚空藏院に位す。

阿難尊者

胎藏界曼荼羅釋迦院上行南端より第五に位す、密號は集法金剛卽ち一代說法を結集する故に名く、生身釋尊の十大弟子の一人にして多聞第一となす、形像肉色比丘形、合掌して荷葉に座す。

智狗絺羅菩薩

胎藏界曼荼羅釋迦院の上行南端より第二に位す、密號は正圓金剛又は宿慧金剛と稱し、釋迦精進の德を主る、此尊を七集は比丘形となし、聲聞衆に列すれども、釋迦院にある供養、雲海二菩薩中の一尊なり、肉色にして使者形合掌中に未數蓮華を入れ佛に供する形をなし荷葉に坐す。

供養雲海菩薩

胎藏界曼荼羅釋迦院の南端に位す、梵には布惹迷伽、供養雲と譯す、密號は普覆金剛と稱す、佛の三界人天の供養を受くる德を表す、肉色にして使者形、兩手に荷葉に蓮花を盛りたるものを捧げ荷葉に跪く。

如來愍菩薩

胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊の右第七に位す、梵號は怛他蘖多母隷底多、如來愍と譯す

密號は敎命金剛と稱す、是れ如來哀愍の德を主る、肉色にして左手如意寶を持し、右手は荷葉に花を盛りたるものを膝上に安じ、羯磨衣を着け荷葉に冥座す。

如來寶菩薩

胎藏界曼荼羅釋迦院釋尊の右に位す、梵號は怛他誐多摩尼、如來寶と譯す、密號は寶相金剛と稱す、是れ釋尊寶珠の三昧に入りたる尊なり、卽ち毫相の三昧に同じ、此尊は大日經の毫相尊に當る、黃色にして左手蓮上に寶珠あるを持し、右手胎拳にして頭指を立てたるを胸に當て赤蓮に坐す。

如來礫乞底菩薩

胎藏界曼荼羅釋迦院上行北端より第九に位す、梵には礫乞底、槊と譯す、密號を衆行金剛と云ふ、如來外護方便の德を主る、肉色にして右手一股戟を執り左手金拳にして臍下に安じ蓮上に坐す。

如來牙菩薩

胎藏界曼荼羅釋迦院の上行南端より第九に位す、梵には怛他蘗多能瑟吒羅、金剛牙と譯す、一切煩惱を嚙碎くの三昧なり、密號は護法金剛又は調伏金剛と稱す、肉色にして左手開敷蓮花、右手頭小大の三指を伸べ、餘を屈して胸に當て赤蓮に坐す。

如來捨菩薩

胎藏界曼荼羅釋迦院上行北端に位す、梵には怛他誐多烏波乞又、如來捨と譯す、密號は平等金剛と稱す、是れ如來四無量心中の捨德を司る、菩薩形肉色にして、左手に白珠を持し、右手股を押し荷葉に坐す。

如來慈菩薩

胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊の右第八に位す、梵には怛他嚴多昧底哩、如來慈と譯す、密號は護念金剛と稱す、四無量心中の慈德を司る、肉色にして荷葉に蓮華を盛りたるものを捧げ翔磨衣を着け荷葉に冥坐す。

如來悲菩薩

胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊の右第六に位す、梵號は怛他怛多迦樓多、如來悲と譯す、密號は慈化金剛と稱し、四無量心中の悲德を司る、肉色にして、童形兩手虛心合掌し鬘を戴き天衣を着け荷葉に坐す。

如來喜菩薩

胎藏界曼荼羅釋迦院上行北端より第二に位す、梵には怛他誐多母儞多、如來喜と譯し密號は禰法金剛と稱す、四無量心中の喜德を佛格化したるなり、肉色にして、左手に荷葉を盛りたるを持し、右手は大中相捻し胸に當て赤蓮に坐す。

如來毫相菩薩

胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊の左第二に位す、梵には怛他誐都櫱、如來毫相と譯す、密號は妙用金剛と稱す、如來白毫は無邊福德の相にして之を佛格化したるものなり、黃色にして左手髻上に圓光あるものを持し、右手掌を仰けて臍下に當て赤蓮に坐す。

如來語菩薩

胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊の左第七位に位す、梵には怛他誐多縛乞怛落、金剛語と譯す、密號は性空金剛と稱す、如來の言語を愛する口の相を佛格化したるなり、肉色にして左手髻上に寶形を安じたるを持し、右手平掌にして仰げて胸に當て赤蓮に坐す。

如來笑菩薩

胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊左第八に位す、梵には怛他怛多訶婆、如來笑と譯す、密號は歡喜金剛、破顏金剛と稱す、是れ如來辯說の相を佛格化したるなり、肉色にして左手に開敷蓮を執り、右手を頰邊に伏せて口を開き赤蓮に坐す。

如來舌菩薩

胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊の左第六に位す、梵には怛他怛多爾訶縛、如來舌と譯す、密號は辯說金剛と稱す、是れ如來の舌相を佛格化したるなり、肉色左手蓮上舌あるものを持し、右手平掌にして仰て胸に當て赤蓮に坐す。

蓮華部發生菩薩

胎藏界曼荼羅の觀音院の中臺より第一行の上に位する尊なり、梵には波納摩矩盧納婆吠と云ひ、密號は無盡金剛と稱す、蓮華部の諸尊を出生するが故に、多く肉色にして左手に蓮花を持し右手胸に當て、無名指を屈し(七集には小指と無名指を屈すとす)赤蓮花に坐す。

大勢至菩薩

胎藏界曼荼羅の觀音院の第一行の第二に位す、梵に摩鉢羅鉢跢、大勢至と譯す、密號を持輪金剛と言ふ、大疏に「世の國王大臣の如く威勢自在なるを以て大勢と爲す、此聖者如是の大悲自在の位を得るを以て故に以て名とす、[illegible]を持する所以は毗盧遮那實智の華台に既に果を成じ已て、復如是の種々を持して普く一切衆生の心水の中に散じて更に未敷蓮華を生ずるが如く、此尊の迹も是の處に同じ、亦能く普く一切衆生の潜萌の善を護て敗傷せず念々に增長せしむ」とあり、觀音菩薩は菩提心を發したるものを增長し、此尊は菩提心を發せしむるを本誓とす、常には阿彌陀如來の大智の德を司ると爲せり、胎藏界曼荼羅の像は肉色にして左手未敷蓮華を持し右手四手を輕く屈して胸邊に置く、七集には中無名火の三指を屈すとあり。

耶輸陀羅菩薩

胎藏界曼荼羅觀音院第二行第三に位す、梵には耶輸陀羅と云ひ、示現金剛又は持名稱者或は資財主とも云ふ、大疏に「明妃耶輸陀羅譯して持名稱者と云ふ、身眞金色なり諸の瓔珞を以て莊嚴して、極て端嚴ならしむると天女の像の如し、右手に鮮白妙華枝を持し果葉相間(マジヘ)長條茂好せり、其華は或は初て疱(フホウル)あり或は開かんと欲するあり、或は正しく開敷せるものあり、若は五若は十乃至數十なり、左手に鉢胤遇(支那の粟穀の穗の如き花つく)を持せり、亦是れ西方の勝上の華なり、得大勢明王(勢至)は一切衆生の菩提の種子を以て、而も此の明妃は此の中の種々の功德を含藏出生することを主る、故に其被服標示皆此義と相應す」とあり。

多羅菩薩

胎藏界曼荼羅觀音院の第一行に位し、觀音菩薩の眼より生じたりとなす、梵には多羅、翻して眼精或は目精となす、密號は悲生金剛又は行願金剛といふ、大疏に「此は觀自在の三昧なるが故に女人の像に作せ、多羅は眼の義なり青蓮華は是淨無垢の義、是の如

くの普眼を以て群生を攝受すること既に先時ならず亦後時ならず、故に中年女天狀に作れ太だ老ひず太だ少からず、青は是れ降伏色、白は是れ大悲色なり、其妙にして二用の中に在る故に二色をして和合せしむ、是を以ての故に青ならず白ならざるなり」と、また「大本の中には五百の多羅尊あり、皆觀音の眼より生ず、皆是れ阿彌陀の姉妹三昧なり」とあり、授記經には「多羅大悲者一切の慈悲にて天人及藥叉一として子に非ざる者なし、故に世間母及び出世母と號す、觀音と大勢至と金剛と善才と文殊と須菩提と慈氏と香象と月光と無盡意と離垢と虛空藏と妙眼と及び大悲維摩等の菩薩と皆是れ多羅の子なり、亦是れ般若母なり」とあり、故に或は觀音部の部母と稱す。

大隨求菩薩

胎藏界曼荼羅觀音院の第二行第一に位す、梵には摩訶鉢羅底薩落、大隨求と譯す、密號は與願金剛と云ふ、衆生の所求に隨て與へざることなきが故に名く、此尊誓願深重にして末世相應の尊なれば、信奉するもの多く、大佛頂陀羅尼と併稱せらるる著名なる大隨求陀羅尼は此三昧を說きたるもの、大隨求陀羅尼經に「若し纔に此陀羅尼を聞かば、所有の一切罪障悉皆消滅す、若し能く讀誦授受して心に在らば、當に知るべし是人即ち是れ金剛堅固の身なり、火も燒くこと能はず刀も害することなし毒も中ること能はず」また此大隨求陀羅尼を法に依て書寫し臂に繫け、及び頸下に持せば、當に知るべし是人一切如來に加持せられ、當に知るべし、是人一切如來藏に等同なり、當に知るべし是人能く地獄を淨む」とあり。

毘俱然菩薩

胎藏界曼荼羅觀音院の第二行の第三に位し、梵には毘哩俱底、皺と譯す、密號は降伏金剛と現圖鈔と稱するも、七集には定慧金剛とす、此尊は觀音部中の忿怒尊なり、大疏に「聖者毘俱胝は其身四手にして右邊の一手は數珠鬘を垂れ、一手は施願印を作し、左邊一手は蓮花を持し一手軍持を執る、面に三目あり摩醯首羅の像の如し、首に髮冠を戴くこと毘盧遮那髮髻冠形の如く、云ふ所の持とは地の萬物を持すると言ふが如し、即ち是れ戴承の義なり、其身潔白にして圓光之を圍み、其中に具に黃赤白の三色あり、純白純赤純黃ならざるなり故に主なしと云ふ、凡そ黃をば增益の色となし、白は寂災の色、赤は降伏色、此三昧の光の中に於て兼て三力を具す此故に用て標幟と爲す也」とあり。

大明白身菩薩

胎藏界曼荼羅の觀音院の第一行第六に位す、梵には豪利摩訶微地也、大明白身と譯し、密號は放光金剛常淨金剛と稱し、大明白身は清淨無垢の義なり、白黃色にして左手に開敷蓮花を持し、右を胸邊に與願になし、赤蓮花に坐す。

寂留明菩薩

胎藏界曼荼羅觀音院第二行第七に位す、梵には尸縛縛哥尾地也と云ひ、密號を定光金剛と稱す、彌陀定門の尊、寂靜心留の義にて名く、肉色にして左手四指を屈して頭指を竪て、胸に當て、右手掌を外に向て高く擧げ、天衣を着け左膝を立てゝ赤蓮花に坐す、垂帶風に飜ること風天に似たり。

豊財菩薩

胎藏界曼荼羅觀音院第三行第三に位す、梵には補伽縛底と云ひ、密號は如意金剛と稱す、此の尊は福智の二門を司り無財と稱す、肉色にして左手には二莖の蓮花を持し、一莖は未敷花の三房にして左肩の上に出て、一莖は開敷花にして右肩の上に出づ、生佛不二を顯す、右手は無名小二指を屈し餘を立てゝ刀印の如くし肩下まで擧げ、天衣を着け赤蓮に坐す。

窣都婆大吉祥菩薩

祕藏記には薩埵波大吉祥菩薩とあるも、青軌玄軌は皆窣都波大吉祥に作る、胎藏界曼荼羅觀音院の第二行第二に位す、梵には阿利也窣都婆摩訶師利と云ひ、塔大吉祥と譯す密號は利樂金剛と稱し、一切衆生の生死の中に於て自在樂を得る事を主る、窣都波は衆生の五大卽ち身なり白色にして二手開敷蓮花を持す、是れ左髻は衆生心右蓮は佛心にして生佛不二を顯すなり。

大吉祥大明菩薩

胎藏界曼荼羅觀音院第二行第五に位す、梵には摩訶室利(大吉祥)摩訶微地也(大明)大吉祥明王と譯す、密號は靈瑞金剛と稱す、肉色にして左手に蓮華を持し股上に安ず、右手は小指を竪て餘を屈して胸に當て、赤蓮華に坐す。

大吉祥明菩薩

胎藏界曼荼羅觀音院第二行第六に位す、梵には摩訶室利、微地也と云ひ、大吉祥明と譯す、密號は常憂金剛と稱す肉色にして左手半開蓮華を持し、右手無名小の二指を屈し餘を竪て胸邊に置き白蓮華に坐す。

大吉祥變菩薩

胎藏界曼荼羅觀音院三行第六に位す、梵には擺乞叉摩、摩訶微地也、吉祥大變と譯し、觀香に三十三變化の妙用を司る、密號は動用金剛と稱す、白肉色にして左手半開蓮華、右手胸に當て掌を仰げ物を受るが如くして、眼上を視るの相をなす。

聖觀音

胎藏界曼荼羅には中臺の西南方と並に觀音院第一行に部主として位し、文殊院釋迦院には眷屬として侍し、金剛界曼荼羅には西方に金剛菩薩と稱せらる、此菩薩は如來大悲の總德を司る阿彌陀如來因位の尊なり、梵には阿利也(聖縛路吉帝(觀)濕縛羅自在)

正しく聖觀自在と稱す、諸法を觀察して自在に得度せしむるが故に名けたるものなり、又觀世音と譯する時は、衆生の音聲を觀察聽取して救濟するの意なり、密號は正法金剛、本淨金剛、淸淨金剛、蓮花金剛と名く、大疏に「大精進觀世自在者を置け、卽ち是れ蓮華部の主なり、謂く如來は究竟して十緣生句を觀察して、此普眼の蓮華を成ずることを得るが故に觀自在と名く」と說き、普門品には卽時其音聲を觀じて皆解脫を得せしむると說けり、胎藏界中臺八葉院の西南方に坐する尊は肉色にして左手を開きて胸に當て開敷の勢をなし、右手に開敷の紅蓮花を持し、首に本地の無量壽佛を頂く、觀音院の主尊は大日經には「光色皓月と商佉と軍那華との加く微笑して白蓮花に坐し、髻に無量壽を現ぜり」とありて、白肉色にして左に初割蓮花を持し、右手に之を引き開くの勢をなす、是れ衆生の淨菩提心を引き開かしめんとする意にして、中臺と蓮花の左右に異るは因果の別を顯はすなり。

蓮花軍荼利菩薩

胎藏界曼荼羅の觀音院、聖觀音菩薩の使者なり、密號は降伏金剛と云ひ、蓮華部の辨事明王なり、青色にして左に未敷蓮華を持し天衣を着く。

如意輪觀音

胎藏界曼荼羅觀音院第二行第四に位す、梵には奥陀摩尼捨佉羅と云ひ、如意輪と翻す、知意寶珠の三昧に住して法輪を轉ずるの意なり、密號は持寶金剛と云ふ、如意輪陀羅尼經には此の德を說て「復二法あり一には在世間二には出世間、世間と言は所謂誦念果法勝願成就し、有情を攝化し富貴資財勢力威德皆成就を得、出世間と言は所謂福德智慧解資糧莊嚴し悲心增長し有情を濟苦し衆人愛敬す」と曰へり、如意寶球の三昧もて世出世間を利益するを以て、醍醐山にては特に此尊を崇敬し四度加行中の十八道の本尊となせり、如意輪念誦法に「第一手思惟有情を愍念するが故に(地獄道を救ふ)第二如意珠を持す能く一切の願を滿す(餓鬼道を救ふ)第三念珠を持するは傍生苦を度せんが爲めなり、左に光明山を按じ全傾動を成就し(修羅道を救ふ)第二蓮を持するの手は能く諸の非法を淨め(人道を救ふ)第三手輪を持し能く無上の法を轉ず(天道を救ふ)六臂廣博の體能く六道に遊て大悲方便を以て諸有情の苦を斷ず」と說く、此形は現圖曼荼羅と同形にして普通に行はるゝ形なり、此外に世に行はるゝ二臂像にて、如意輪陀羅尼經に「左半開蓮花を執り、當に其台上に如意寶珠を畫き、右手說法相に作せ」とある像と、金輪咒王經に「左手一の寶蓮を執り上に寶珠を安んじ、右手臂を屈し乳房に在り掌を仰いで如意珠を把る」と、また右手を施無畏、左手を與願になしたる像との三種あり。

都表如意輪觀音

如意輪觀音を日輪三昧に入れたる尊、如意金輪の德餘尊に勝れたる故に名くとなす、薄艸訣には都表如意輪軌を引て「都とは攝の義一切諸佛菩薩を攝入す、是の故に都と名く、表とは顯の義大光を顯現して四天下を照らす是故に表と名く、冥には一切諸佛菩薩を攝し顯には日光を現じて、天下の一切衆生を覩ぜしむ」とあり、都表如意輪略要法には「若し此三昧耶を修するあらば須らく七種殊勝の相を具すべし、猶輪王の七寶を持するが如し、王四天下皆降伏す」とあり。

不空羂索觀音

胎藏界曼荼羅觀音院第三行第四に位す、梵には阿謨伽播捨と云ひ、不空羂索と譯す、大悲の羂索もて衆生を救濟して諸願を空からしめざる故に名く、密號は等引金剛と稱し、此尊鹿皮の袈裟を着し給ふが故に鹿皮觀音とも稱す、此尊には三十卷經等ありて

其功德を擴大し詳說しあるを以て此觀音に諸觀音を網羅せるの觀あり、非譯經に二十種の勝利を說て曰く一無病快樂、二除業病、三美、四衆人愛敬、五密號諸根、六多獲財、七財寶不損、八事業成辨、九種植不害、十稼穡不害、十一精氣不奪、十二有情尊重、十三不畏怨讎、十四怨讎消滅、十五人非人不害、十六厭魅不着、十七煩惱不現行、十八刀毒不害、十九諸天衞護、二十生々不離慈喜捨となし、また臨終に入勝法を得等となせり、此觀音は諸觀音中最も靈像多き尊なれども、胎藏界曼荼羅には三面四臂にして、各面に三目あり、正面は肉色右面は青色左面は黑色にして三毒卽ち三德を表し、左第一手は蓮華、次手羂索、右第一手念珠、次手軍持にて、此四種卽ち四攝を表すとなす。

白身觀音菩薩

胎藏界曼荼羅觀音院第二行第二に位す、梵には尸吠多波誐縛底、密號は普化金剛、白衣觀音と其本誓同じ、白黃色にして左手蓮花を持し、右手掌を內にして肩の邊に當つ、右膝を立て赤蓮花に坐す。

白衣觀音

胎藏界曼荼羅觀音院第三行の最下に位す、梵には跋拏羅縛悉尼、白處、又は白衣と翻し密號を離垢蓮剛と稱し、觀音部の部母となす、大疏に、半拏羅囉悉嚫、譯して白處と云ふ、此尊は常に白蓮花中に在すを以ての故に名とす、亦天の髮髻冠を戴き純素の衣を襲ひ左手に開敷蓮花を持せり、此最自淨の處より普眼を出生するが故に、此三昧を名け蓮華部母となす」とあり、胎藏界曼荼羅觀音院の大明白身、白身の兩菩薩、又諸經に大白衣觀音と稱するも同本誓なりとなす、胎藏界曼荼羅の像は左手に蓮花を執り、右手膝上に與願にすること恰も阿閦觸印の如し、不空羂索經には右手は掌を揚げ、菩提場經には右手寶珠左手與願となし、薄草訣は左手寶鏡右手楊柳枝にて、星宿の圍繞したる像を出し、唐本には右手念珠、左手は大指を以て無名指と捻じ餘指を散ずるものとあり。右手印鑰左手楊柳枝とを擧ぐるものとあり。

被葉衣觀音菩薩

胎藏界曼荼羅觀音院第三行第一に位す、蓮葉の中に裹るゝ故に名く、梵には波羅舍囉剛と云ひ、密號を異行金剛と稱す、胎藏界曼荼羅の像は白肉色にして右手に索、左手に杖を持し、杖頭に吉神祥あり、膝を竪て赤蓮花に坐す。

馬頭觀音

胎藏界曼荼羅觀音院第一行第七に位す、梵には訶野訖利婆と云ふ、馬頭と翻す、密號は噉食金剛また迅速金剛と云ふ、蓮華部敎令輪なれば蓮華部の結果明王として多く修法中に存する故に、馬頭明王と稱し、或は大力持明王とも呼ぶ、明王部と觀音部と兩屬の尊なり、此名を得るにつきて「大馬に等衆流の俱に湊て呑納餘すこ」となし」とする噉食の義と「飢羸の馬の草を食するに更に餘念なし」となす大悲專念の義と、能く諸の魔障を摧て、慈悲方便を以て大忿怒形を現して大威日輪と成て無邊界の行者の暗瞑を照曜して速に悉地を得せしむ」となす迅速の義との三あり、今は世俗に馬の守護神として尊崇せられ、馬の追福の爲めに路傍に此尊の石像あるを見る、大疏に「其身非黄非赤にして日の初出の色の如く、白蓮華を以て瓔珞等となし其身を莊嚴し、光焰猛盛にして赫奕として鬘の如し、指甲長利にして雙牙上に於て、首髮は獅子の項の毛の如く、極めて吼怒の狀に作れ、此は是れ蓮華部の忿怒持明王也、猶轉輪王の寶馬の四洲を巡履するに、一切の時一切の處に於て其心息まざるが如し、諸菩薩の大精進力も亦復是の如し、如是威猛の勢を得て生死重障の中に於て身命を顧みず、摧伏する所多く白淨

の大悲心となる故に白蓮の瓔珞を用て其の身は嚴る」とあり。

水月觀音菩薩

胎藏界曼荼羅觀音院第三行第五に位し、水吉祥菩薩と呼ぶ、梵には曩迦室利、水吉祥と譯す、密號は潤生金剛と稱する尊と同體異名となす、其三昧は衆生心田の乾地に瓶水を灑ぐが故に名く、大疏に「水吉祥或は蓮華中より水を出し手を垂れて水を出す」とあり、胎藏界曼荼羅の像は白黄色左手未敷蓮華を持し、右手與願にす、薄草紙には異體として三面六臂を說く、左第一手寶蓮華、次手金輪、三手孔雀尾、右第一手利劍、次手寶珠とあり。

青頸觀音

觀音部中の忿怒尊にして青頸は其標示なり、梵には儞羅建制と云ふ、青頸大悲念誦儀軌に「白色三面なり、當前の正面は慈悲熙怡の貌に作し、右邊は獅子面に作し、左面は猪面に作し、首に寶冠を戴き冠中に化無量壽佛あり、又四臂あり右第一臂に杖を執り第二臂に蓮花を執り左の第一に輪を執り左の第二に螺を執り、虎皮を以て裙と爲し黑

鹿皮を以て左膊に角絡として被たり、黒蛇一を以て神線と爲し、八葉蓮花上に坐す」とあり、羅羂索經には左手に蓮花を持し右手掌を揚て結跏趺座となす。

阿麽提觀音

梵に阿麽提と云ひ、譯して寛廣又は無畏と云ふ、或は阿麽縒に作る、阿麽提軌に云く「波羅密の如く三目四臂、白獅子座に乘り、頭を左膝の下に向け、首に寶冠を戴き、白蓮花を以て嚴飾し、前の二手鳳頭の瓔珞を執り、左一手摩羯魚を掌にし右一手吉祥鳥の白色なるを持す、左足を屈して獅子の頂の上に置き、右足垂下して、嚴るに天衣瓔珞を以てし、通身に光焰あり、面貌慈悲左に向て諦觀す」とあり。

楊柳觀音

楊柳の枝を持し給ふ故に名く、古來此尊を千手觀音の楊柳の手の三昧となす、千光眼祕密法經に「若し身上の衆病を消除せんと欲せば、當に楊柳枝葉法を修すべし」とあり胎藏界曼荼羅の耶輸陀羅觀音像は能く之に類せり、千光眼經に「右手楊柳枝を執り左手當に左乳上に當て掌を顯す」とあり。

七星如意輪觀音

如意輪觀音を中尊として七星を眷屬とするが故に名く、七星如意輪經に曰く「七星の精靈天より下り阿利大神地より出て願ふ、我等輩此大法を護らん、若し人等有て此法を造り奉らば我等先づ至て法事を成就すべし」とあり、此經は世尊迦夷國が倶部羅國より圍まれたるを救はんが爲めに說きたる所となす、七星如意輪經は「中央に如意輪王菩薩を安じ一々輪輻間に七星像及訶利帝母位を安ぜよ」とし、八輻輪中に如意輪を安ず、勸修寺護摩堂の圖は中尊十二臂なるも、圖像鈔所出の圖は中尊六臂にて寛信は二臂の像となす。

十一面觀音

胎藏界曼荼羅虛空藏院の北端に位す、梵には膩迦娜含目佉、捨壹面と譯す、密號は變異金剛又は慈愍金剛と云ふ、十一面は大悲の本誓衆生の十一品の無明を轉じて十一地佛果を開顯せしむるの義を表す、十一面念誦儀軌に十種勝利四種功德を說て曰く、一離諸病、二如來攝受、三獲財穀、四怨敵不害、五國士慰問、六不被蟲毒及寒熱、七刀杖不害、八水不溺、九火不燒、十不夭折、四種功德とは一臨終見佛、二不生惡趣、三不非命終、四往生極樂なり、我國にては推古天皇三年沈本を得て此像を刻みしことあり、大和長谷寺觀音は此尊なり、胎藏界曼荼羅の像は肉色十一面にして本面の左右に各一面あり、其上に

五面あり、其上に三面あり、右第一杵施無畏次手念珠、左第一年開敷蓮次手瓶にて十一面儀軌の說と同じ。

千手觀音

胎藏界曼荼羅虛空藏院の北端に位す、梵には沙訶沙羅布惹、沙訶沙羅僧帝隸と云ひ、千手千眼と譯す、故に具には千手千眼觀音と云ふべし、或は千臂觀音とも言ふ、密號は大悲金剛なり、千は滿數を表したるものにて觀音菩薩の大悲化用の無量無邊なるを顯したるものなり、尙其意味を擴充せんが爲めに或は千手千眼千頭千足と稱す、此尊は觀音卽ち蓮華部の大悲德を網羅したるの觀あるを以て、後白河天皇は三十三間堂を建立して此尊を千體安置し之を蓮華王院と名けたり、其大咒の千手千眼陀羅尼は曹洞宗にて盛に諷誦す、古來聖觀音は未敷蓮華の三昧、此尊は開敷蓮華の三昧となし觀音の果德を表するの尊となす、胎藏界曼荼羅の像は黃金色、二十七面四十臂の尊にして、臍下に彌陀定印を結び胸に蓮華合掌し胸に當たる左手に白蓮を執り、右手に靑蓮を執り、其他右の十七手には錫杖、化佛、日輪、鉤、劒、鏡、三股杵、寶印、鉢、髑髏、幢、梵經、五色雲、箭、蒲桃、胡瓶、念珠與願となし、左の十七手には三股戟、宮殿、月輪、輪、紅蓮、白拂、弓、梵篋、法螺、寶瓶、羂索、玉環を持し、其外に掌中に眼ある手を無數に出して寶蓮に坐す、薄草訣には千手經は四十一手千光眼經は四十二手、攝無礙經は四十三手なるも、合掌又は結印等を一手と數ふるか二手と數ふるかの相違にして、歸結する所は本誓四拾手に過ぎざる旨を述ぶ、想ふに諸尊中に奇數の手あることなし、故に經に定印とあるは二手なるが、此定印の上に寶鉢を置きて圖に畫く時には手を偶數なるものと心得べし、此四十手が各二十五有を導くを以て卽ち千手となるとなし、此四十手を息災、調伏、增益、敬愛、鉤召の五部に八手宛を配し、五部都法の尊となす、而して頭面は胎藏界曼荼羅の尊は二十七面なれども千手經は壹面となし、寶生經には十一面となす、二十七面は此尊は十波羅密を具足するの尊なれば、十波羅密の前の六度に三を開きて十八となし、後の四度に二を開き八となし、合せて二十六面を表し、之に本面を加へて二十七面を成す、或は二十五有を表して二十五面之に本地の彌陀佛の一面と本面を加へたるものとの說あり、十一面は十波羅密に本面を加へたるものなり、五百面は卽ち千眼を表したるものなり。

不空鉤觀音菩薩

胎藏界曼荼羅虛空藏院虛空藏菩薩右第四に位す、梵には阿母伽句捨、不空鉤と譯し、密號は化現金剛と稱す、一切衆生を鉤召するとを空からざるが故名く、或は不空羂索と同本誓なりとの說あり、古來此尊を大日經の安住慧菩薩又は行慧菩薩となせども的確の證なし恐らく、報杵菩薩なるべし、秘藏記に四面とあれど現圖曼荼羅は三面四手にして正面は肉色左右は青色左第一手蓮上獨股鉤あり、次手索、右第一手三股鉤、次手三股杵を持して下に垂れ赤蓮に坐す。

忿怒鉤觀音菩薩

胎藏界曼荼羅虛空藏院の虛空藏菩薩の右第三に位す、觀音菩薩忿怒三昧に入り、虛空藏菩薩の化導を助くと稱す、忿怒鉤とは其左手の持物の名ならん、古來此を大日經の行慧菩薩と稱す、秘藏記には四面明王像と稱すれども忿怒形にあらずして三面菩薩形なり、肉色にして三面、正面肉色、左面青色、右面綠色なり、此三面皆彌陀を頂き此正面上に一菩薩あり、兩手に大劒を持す、本體左第一手は忿怒三股頭の鉤を執り第二手觀顯、右第一手開敷蓮、第二手索、赤蓮に坐す。

准胝觀音

胎藏界曼荼羅遍知院の佛眼佛母の傍に位す、蓮華部の佛母なり、其德を稱して七俱胝佛母と云ふ、七俱胝は單に廣漠なる數の意にて此尊の德の廣大無邊なるを表す、密號は最勝金剛なり、此尊は佛母なれば如來部の攝在なりとなすの說あり、出家在家を問はず淨不淨を擇ばず其德を布く、獨部法に「此法を作すには在家出家の飯酒食肉妻子あるを問はず、淨穢を問はず、我法に依らば成就せざることなし」とあり、又顯敎の尊那菩薩は卽ち此尊に當る、七俱胝佛母經に「其臂を香白色に作せ、種々に其身を莊嚴す、腰に白衣を着け、衣上に花文あり、身に輕羅の錦袖天衣を着け、綬帶を腰に繫け、朝霞を身に絡ふ、其手腕白螺を釧と爲し、其臂上の釧は七寶莊嚴し、一一手上に指環を着く、都て十八臂あり、面に三目有り二手說法の相を作す(胸邊に大指と無名指を屈し餘を立てたる印を結ぶ)右の第二施無畏印、第三劍、第四數珠、第五微布羅迦(甘菓也)、第六鉞、第七鉤現圖は鉤印)、第八拔日羅(現圖は三股)、第九寶鬘、左の第二如意寶幢、第三蓮華、第四澡瓶、第五索、第六輪、第七螺、第八賢瓶、第九般若、波羅、密經函を把る」とあり。

八大觀音

八種の觀音を云ふ、薄草紙に三種を出す左の如し、大本如意輪經は圓滿意願明王、白衣、一髻羅刹、四面觀音、馬頭、毘俱胝、大勢至、多羅、小野一印明集は聖觀音、白處、一髻羅刹、如意

輪、馬頭、毘俱胝、大勢至、多羅、義範手記は不空羂索、十一面、一髻羅刹、如意輪、馬頭、毘俱胝、不空鉤、忿怒鉤。

三十三觀音

法華經普門品に說ける觀世音菩薩の三十三身によりて顯敎人士の集めたるものにして、楊柳、龍頭、持經、圓光、遊戯、白衣、蓮臥、瀧見、施藥、魚籃、德王、水水、一葉、青頸、威德、延命、衆寶、岩戸、能靜、阿耨、阿麽提、葉衣、瑠璃、多羅尊、蛤蜊、六時、普慈、馬郎婦、合掌、一如、不二、持蓮、灑水の三十三觀音となす。

地藏菩薩

胎藏界曼荼羅地藏院の主尊にして其中央に位し、餘の八尊を眷屬す、金剛界曼荼羅の南方四親近の金剛憧菩薩は此の尊と同一本誓となす、梵には乞叉底蘖婆、地藏と譯す、密號は悲願金剛悲愍金剛與願金剛を云ふ、義釋には、金剛不壞行の境界三昧に住すること、猶金地輪の如く極堅固不可壞を以ての所に能く萬物を持し、便ち傾動せず又大地の種々珍物を出し伏藏窮盡あることなきが如く一切種字を含藏す、今三昧亦是の如し能く法界衆生善根種子をして、無量億劫を經て終に敗亡せず、寶功德を出生し窮盡あることなし」とあり、密敎の本尊は菩薩形なり。

此尊は釋尊滅後如來の附屬を受け彌勒の出世まで六道衆生を敎導する能化尊となす、不空軌には、若し供養せんと欲するものは菩薩像を安置し、面を西に向けて持誦し、香を燒き時華を散じ慈悲尊及び無量壽佛とを供養せよ、現世には福利を得後世には極樂に生ぜん、心咒を持念する者、人供を受て罪なし、神咒を誦持する者は輪王寶を具足す地藏を見る者は定業の報を受けず、常に地藏を聞く者は百萬病に染せず、根本印を結誦するものは速に無上道を得、一切佛菩薩常に當に來て守護し意に隨て奉事すべし、神咒を誦持する者は諸の魔辭を摧伏し、地藏を供養する者は一切願を成就す、此菩薩の本願は淨不淨を問はず、當に一切時に念ぜよ安穩を獲得すべし、危難中に念ぜよ、諸の障難を除すべし」と、大疏に「地藏菩薩、種々の間飾せる雜寶莊嚴の地の上に金銀玻璃水精の四寶を以て蓮軌座と爲し、亦窮極巧麗ならしめよ、此菩薩軌座の上に在て光明其身を周遍すること胎藏に在るが如し」とあり。

寶印手菩薩

胎藏界曼荼羅地藏院上より第三に位す、梵には阿羅怛那波尼、寶手と譯す、密號は執契

金剛、執事金剛と稱す、印とは印可決定の義にて大悲手を以て救ふに必ず決定して菩提を證する故に名く、菩薩形肉色にして、左手蓮上獨股杵あるを持し、右手寶珠を持し赤蓮に坐す。

除一切憂冥菩薩

胎藏界曼荼羅地藏院最上端に位す、梵には薩嚩成迦多母伽多麼底と云ひ、密號と大救金剛と稱す、一切衆生の憂惱冥想を除く故に除一切憂惱とも名く、菩薩形白黄色にして左に揚、右手施與、赤蓮に坐す。

不空見菩薩

胎藏界曼荼羅地藏院上より第二に位す、梵には阿目伽捺羅舍、不空見と譯し、密號は普觀金剛と稱す、普く衆生を觀察して、五眼を開き空見せざる故に名く、菩薩形肉色にして、右手蓮上に佛頂を安んじたるを持し、左手施無畏にして赤蓮に坐す。

寶處菩薩

胎藏界曼荼羅地藏院上より第四に位す、梵には阿羅怛曩羯洛寶處と譯す、密號は祥瑞金剛と云ふ、萬法能所依能生の尊なり、大疏に寶處とは、寶の海より生ずるが如く、彼處より生ずるが故に寶處と名くるなり、寶の海に在るが如く彼に從て有るが故に名く、とあり、菩薩形肉色にして、左手蓮上に三股あるを持し、右手膝上に與願にして、赤蓮に坐す。

寶掌菩薩

胎藏界曼荼羅地藏院の上より第六に位す、梵には阿羅怛那波尼、寶手と譯す、密號は滿足金剛、手掌より萬寶を生じ雨す故に寶手と名く、菩薩形肉色にして左手蓮上三股を建て其上に三瓣寶を安んじたるを持し、右手掌を仰て胸に當て、赤蓮に坐す。

持地菩薩

胎藏界曼荼羅地藏院第七に位す、梵には駄哩尾駄洛と云ふ、密號を內修金剛、願相金剛と稱す、地の能く一切物を持すが如く衆生を荷負するが故に名く、菩薩形白黄色にして左手蓮上三股を建たるを持し、右手膝上に與願にし、赤蓮に坐す。

堅固惠菩薩

胎藏界曼荼羅地藏院上より第八に位す、梵號には地利祖地也舍夜と稱し、密號は超越金剛と云ひ、內證堅固不壞なるを主る、又堅固深心と名く、菩薩形肉色にして右手蓮上に羯磨杵あるを持し、左手は大指を立て頭指を輕く屈し餘指を握りて膝上に仰げ置き、赤蓮に坐す。

日光菩薩

胎藏界曼荼羅地藏院の上より第九に位す、梵には蘇利也波羅皮遮那、密號は威德金剛と稱し、地藏の光明遍明の德を主る、藥師如來の脇士としては月光菩薩に相對す、菩薩形肉色にして、左手寶幢、右手與願にして、赤蓮に坐す、藥師如來の脇士は掌中又は蓮上に日輪を持す。

六地藏

地藏菩薩は六道能仕の尊なりと云ふより、地藏尊の六像を六道に當嵌たるものなり、胎藏界曼荼羅地藏院九尊の中地藏、寶處、寶手、寶印手、持地、堅固慧を六地藏と稱す。

金剛將菩薩

胎藏界曼荼羅蘇悉地院の南端より第二に位す、梵には縛日羅制那、金剛將と譯し、密號は首領金剛と稱す、肉色にして兩手胸邊指頭を下にし、掌を外に向け小指を相鉤するの印を結び、赤蓮に坐す。

金剛軍荼利菩薩

胎藏界曼荼羅蘇悉地院の南端より第三に位し、又同曼荼羅金剛手院金剛薩埵の使者として位す、金剛部の辨事明王なり、蘇悉地院の像は白黃色兩手刀印の如くして指頭を下に(是れ瓶印ならん)胸邊に置き、赤蓮に坐し、金剛手院の像は忿怒形にして三股杵印を結び腕を叉す。

不空金剛菩薩

胎藏界曼荼羅蘇悉地院南より第四に位す、梵には阿目伽縛日羅、不空金剛と譯す、密號は辨事金剛と稱す、此院の辨事の尊にて、衆生を彼岸に達せしむること空からざる故

に名く、肉色にして二手各大無名相捻し餘指を屈し、指頭を下にして外に向け、胸邊に合せ赤蓮に坐す。

不空供養菩薩

胎藏界曼荼羅悉地院南端より第五に位す、又は供養寶菩薩と云ふ、梵には阿利。也阿目伽補惹摩尼、不空養と譯す、密號は如意金剛と稱す、肉色にして四手左第一手蓮、第二手索、右第一手劍、第二手三股戟、赤蓮に坐す、七集作本赤色忿怒形とあり。

一髻羅刹王菩薩

胎藏界曼荼羅蘇悉地院の南端より第七に位す、梵には翳迦惹吒譯して一髻と云ふ、密號は電雷金剛と稱す、不二の一智を以て忿怒形を現して煩惱を降伏する故に此の名あり、胎藏界曼荼羅に在る像は青色忿怒形にして火炎髮を戴き、右第一手劍、第二手鉞左第一手索、第二手三鈷、赤蓮に坐す。

金剛明王菩薩

胎藏界曼荼羅蘇悉地院の南端に位す、梵には尼儞也多麼と云ひ、密號を密持金剛と稱す、色心不二の德を主る、肉色にして兩手胸邊に指頭を下し、各大指小指相捻し相合す、恰も三股印を逆にしたるが如くして赤蓮に坐す。

除蓋障菩薩

胎藏界曼荼羅除蓋障院主にして同院の中央に位す、梵には薩嚩尼嚩羅拏尾沙迦毘と云ひ、密號を離惱金剛と稱す、蓋障とは覺性を蓋ふ障の意にて、煩惱障法障業障を云ふ、此三障を除くは卽ち尊の三昧なり、大疏に「除蓋障菩薩は左手に蓮華を持し華上に如意寶珠を置き、右は施無畏手に作す……正しく此れ菩提心中の如意寶珠を以て一切衆生に無畏を施し其所願を滿す」とあり。

救護惠菩薩

胎藏界曼荼羅除蓋障院上第一に位す、密號は救護金剛と云ふ、大悲の哀愍を以て衆生を救護す、尤も悲念菩薩とは異なり、菩薩形肉色にして左手指を散じて股を押し、右手無名指大指相捻し胸に當て赤蓮に坐す。

滅惡趣菩薩

胎藏界曼荼羅除蓋障院の上より第二に位す、梵には阿波夜惹賀、密號は除障金剛と稱す、三惡趣を破滅するを本誓とすること地藏菩薩に同じ、又は破惡趣、除惡趣とも名く、菩薩形白黄色にして、左手中指を屈して大指に附し餘指を伸し胸に當て、右手を與願にし、赤蓮に坐す。

除疑怪菩薩

胎藏界曼荼羅除蓋障院上より第四に位す、賢護と稱す、梵には、跋捺囉波羅誓曩摩と云ひ、密號を巧妙金剛、功德金剛と稱す、衆生の疑怪するものあれば、此菩薩强て疑網を斷ぜしむるを德とす、菩薩形肉色にして右手に獨股、左手に瓶中に獨股を立てたるを持し赤蓮に坐す。

大慈生菩薩

胎藏界曼荼羅除蓋障院上より第五に位す、衆生自ら大慈を發生するを主る、又は大慈起、慈發生、慈愍慧と名く、梵には昧怛利也毘庾拏蘖多、慈發生と譯す、密號は慈念金剛と稱す、肉色にして、左手無憂樹を持し、左手膝上に掌を仰けて開敷蓮を立て赤蓮に坐す。

悲旋潤菩薩

胎藏界曼荼羅除蓋障院上より第七に位す、梵には迦樓拏刃隷賦多、翻して悲念金剛と云ひ、大悲の智水を旋らして衆生の乾田を潤すを以て三昧とす、菩薩大悲に依て其心を纏ふが故に大悲纏と名け、又悲念、悲愍慧、悲發生と名く、菩薩形肉色にして左手未敷蓮を執り右手大中相捻し置き、赤蓮に坐す。

除一切熱惱菩薩

胎藏界曼荼羅除蓋障院上より第八に位す、梵には薩嚩、娜伽波羅含、悉多波と云ひ、密號を離怖畏金剛と稱す、甘露の法雨を注ぎて衆生の苦熱を清涼ならしむる故に名く、又は拆諸熱惱とも名く。

不思議慧菩薩

胎藏界曼荼羅除蓋障院の最下端に位す、梵には阿惹底也麼底娜多と云ひ、密號は難測金剛と稱す、此菩薩權實不二の智不可思議の主たり、菩薩形肉色にして、左手蓮上に珠を安んじたるを持し、右手臂を擧げて掌を内に向け赤蓮に坐す。

大勇猛菩薩

胎藏界曼荼羅遍知院の三角智印の左に坐す、梵には摩訶尼羅、大勇猛と譯す、密號は嚴迅金剛と云ふ、大日經に依れば此坐に如意寶珠を安んずべきものなれば、如意寶珠に佛格を附して現圖曼荼羅に列せしものなり、其内證は萬法を雨すなり、肉色にして左手臍に當てゝ如意法を持し右手に利劍を持す。

大安樂不空金剛眞實菩薩

胎藏界曼荼羅遍知院の最南に坐し、梵には摩訶縛日羅母伽三昧耶薩埵縛、金剛不空眞實菩薩と譯す、密號は眞實金剛と稱す、卽ち普賢延命菩薩是なり。

金剛手菩薩

胎藏界曼荼羅金剛手院の主尊にして、常に之を金剛薩埵と同本誓とするが故に、其語に併說せるも其源は全く別尊なり。

金剛牢持菩薩

胎藏界曼荼羅金剛手院中行第二に位す、梵には尸縛日羅駄洛(金剛持)と云ひ、密號を守護金剛と稱す、衆生の眞實の理體を守る故に名く、肉色にして左手獨股右手與願、赤蓮華に坐す。

忿怒持金剛菩薩

胎藏界曼荼羅金剛手院中行第三に位す、梵には縛日羅佉羅、縛日羅駄洛(金剛持)と云ひ、密號は威猛金剛と稱す、忿忿三股杵を持して其三昧を顯す、肉色にして左手三股杵、右手與願印平掌にして擧ぐ、右膝を竪て白蓮に坐す。

金剛手持菩薩

胎藏界曼荼羅金剛手院第一行第三に位す、梵には縛日羅呵率埵、金剛手と譯す、密號は

堅固金剛と稱す、現圖鈔に金剛薩埵は本有、此は修生薩埵とあり、白黃色にして左手三股、右手與願赤蓮に坐す。

住無戲論菩薩

胎藏界曼荼羅金剛手院中行第七に位す、阿閦の斷德を主り、妄想戲論を斷滅す、十九執金剛中住無戲論金剛と本誓同じ、梵には鉢羅波制尾賀哩と稱し、密號は無量語金剛、肉色にして左手獨股右手胎拳の如くして小指を竪て右膝を立て赤蓮花に坐す。

發生金剛部菩薩

胎藏界曼荼羅金剛手院第一行第一に位す、梵には縛曰羅(金剛)句羅納婆と云ひ、密號は不壞金剛と稱す、金剛部の諸尊を發生するが故に此の名あり、故に此の尊を金剛部の部母とするの說あり、金剛針菩薩と同體なるべし、白黃色にして法界定印上に獨股を立て天衣を着け赤蓮に坐す。

持金剛鋒菩薩

胎藏界曼荼羅金剛手院第一行第五に位す、梵には縛曰羅蘖囉駄哩と云ふ、密號は迅利金剛と云ひ、發心猛利の德に住す、赤肉色にして左手金剛拳臍下に安んじ、右手鋒を持し赤蓮花に坐す。

忿怒縛菩薩

胎藏界曼荼羅金剛手院第一行第七に位す、梵には句路駄賛捺羅底捺梵迦と云ひ、密號は底羅金剛と稱す、大日經に「忿怒降三世大障を摧伏する者、號して月縛尊と名く」とあれば、降三世と同體異名なり、月縛とは月は圓の義、縛は字の如く佛縛より此尊生じたりとなす、或は縛とは毫相なりとも云ふ。

金剛持菩薩

胎藏界曼荼羅金剛手院中第二行第六に位す、梵には縛曰羅、駄洛翻して金剛持と云ひ密號を常定金剛と稱す、金剛無勝定を持すること餘尊に勝る故に名く、白黃色兩手に獨股を持し天衣を着け赤蓮花に坐す。

離戲論菩薩

胎藏界曼荼羅金剛手院第三行第五に位す、梵には儞瑟波羅半起尾可哩縛曰羅駄洛、密號は眞行金剛と云ふ、一實智に依り妄想戲論を遠離するを本誓とす、肉色にして蓮座上に獨股杵を斜に立て、左手を金臺にして其頭を小指にて握り、右手も金臺にして頭指を立て胸に置き、右膝を立て赤蓮に坐す。

適悅持金剛菩薩

胎藏界曼荼羅金剛手院第三行第三に位す、梵には蘇羅都(適悅)縛曰羅駄洛、適悅持金剛と譯し、密號は慶喜金剛と云ふ、唯佛與佛の自受法樂の適悅を主る故に名く、白黃色にして左手金剛拳にして臍下に安んじ、右手平掌にして獨股杵を立て胸に置き赤蓮に坐す。

持金剛利菩薩

胎藏界曼荼羅金剛手院第三行第七に位す、梵には縛曰羅佗囉駄囉句と云ひ、密號は般若金剛と云ふ、智慧猛利の德を主り、金剛界の金剛利菩薩と同本誓なり、肉色にして左手に三股杵、右手數珠、左膝を立て白蓮に坐す。

虛空無邊超菩薩

胎藏界曼荼羅金剛手院中第四行に位す、梵號は誐々曩難多尾迦囉母と云ひ、虛空無邊超越と譯す、密號は廣大金剛と稱し、廣大無邊の利益諸尊に超越する故に名く、白黃色にして左手三股、右手與願印平掌にして擧げ、右膝を立て赤蓮花に坐す。

法波羅密菩薩

金剛界曼荼羅中央大日如來の後に位す、四波羅密の一にして大日如來の侍女なり、梵には達磨(法)縛日利(金剛女)と云ひ、密號は清淨金剛又は蓮華金剛と稱す、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て大蓮華智慧三摩地智を證得して自受用の故に、法波羅密の形を成して毘盧遮那如來の後邊の月輪に住す」とありて、大日如來が阿彌陀如來の三摩地に入りて此波羅密を出生せるなり、肉色にして天女形羯磨衣を着け、彌陀定印の上に梵篋を載せたる蓮華の莖を立つ、微細會は定印上に獨股杵を竪つ、恐らく此獨股杵上に未敷蓮あるべし、供養會は獨股杵を莖としたる未敷蓮を蓮上に竪てたるものを兩手にて持す。

寶波羅密菩薩

金剛界曼荼羅中央大日如來の右に位す、四波羅密の一にして大日如來の侍女なり、梵には羅怛那(寶縛日利(金剛女)と云ひ、密號は大寶金剛と稱す、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て虛空寶大摩尼功德三摩地智を證得して自受用の故に、金剛寶波羅密の形を成し、毘盧遮那如來の右邊の月輪に住す」とあり、大日如來寶生如來の三摩地に入りて此の波羅密を生じ給ふ、祕藏記は白黃色にして、左手蓮上に寶冠あるを持し、右手四角金輪となせども、現圖曼荼羅は左手蓮上寶あるを持し、羯磨衣を着し天女形の右手に圖形を持す、微細會は左手蓮上寶、右手與願、供養會は兩手にて蓮上法を持す。

金剛波羅密菩薩

金剛界曼荼羅中央大日如來の前輪卽ち東方に位す、四波羅密菩薩の一、梵には薩怛傳縛日利、覺金剛女と譯す、密號を堅固金剛と云ふ、大日如來の侍女なり、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て五峯金剛菩提心三摩地智の中より、金剛光明を流出して遍く十方世界を照して一切衆生の大菩提心を淨め、還り來て一聚に收めて、一切菩薩をして三摩地智を受用せしめん爲の故に金剛波羅密の形と成て、毘盧遮那如來の前の月輪に住す」とあり、是れ大日如來の阿闍の三摩地に住して此菩薩を生じ給ふなり、祕藏記には黑青色左手蓮上に篋あり、右手阿闍印とあれども、現圖曼荼羅は青色天女形羯磨衣を着け、成身會は左拳金剛薩埵の五股杵を持する如くにして胸に當て、左手觸地印、微細會は左手蓮上に鈴あるを持し、右手觸地、供養會は兩手にて蓮上五股あるを持す。

羯磨波羅密菩薩

金剛界曼荼羅中央如來の北に住す、梵に羯磨縛日利業、金剛女と譯す、密號は妙用金剛及は作業金剛と稱し、四波羅密の一にして大日如來の侍女なり、聖位經に曰く「毘盧遮那佛內心に於て羯磨金剛大精進三摩地智を證得し自受用の故に羯磨波羅密形を成し、毘盧遮那如來左邊の月輪に住すと、大日如來北方釋迦如來の三摩地に入りて此波羅密を出生せるなり。

金剛鏁菩薩

金剛界曼荼羅外廓の東方に位す、胎藏界曼荼羅には金剛手院中行第五に位す、金剛界の四攝の一、梵には縛日羅薩普叱、金剛鏁と譯す、密號は堅持金剛、妙住金剛と云ふ、大日如來衆生鏁縛の三昧に住して此菩薩を生ず、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て堅固金剛鏁械三摩地智を證得して自受用の故に……一切衆生の外道諸見を摧き、無上菩提不退堅固無礙大城に住し、還り來て一聚に收め……金剛鏁械菩薩の形を成じ、智慧戸を守り西門の月輪に住す」とあり、顯教の四攝にては利行の德に當る、胎藏界は梵號を縛日羅尸哩佉羅と云ひ鏁と譯す、大疏に其德を說て「一切剛强難化の衆生を攝持して無上菩提を退せざらしむ故に以て名となす」と釋せり、金剛界の像は肉色左拳腰に置き右手鏁、供養會は蓮上鏁あることを兩手に持つ、胎藏界の像は肉色左手金剛拳にして膝に安んじ、右手兩頭に三股のつぎたる鏁を執り右膝を立て赤蓮花上に坐せり。

金剛鉤菩薩

金剛界曼荼羅外廓の東方に位す、四攝の一、梵には傳曰羅矩賒と云ひ、金剛鉤と譯し、密號は普集金剛、召集金剛、鈎引金剛と稱せり、大日如來衆生を、鉤召するの三昧に住して

此菩薩を生ず、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て諸召金剛鉤三摩地を證得して自受用の故に……一切衆生の惡趣を拔き無住涅槃の城に安じ、還り來て一聚に收め……菩提心戸を守る金剛鉤菩薩の形を成じ、東門の月輪に住す」と、顯教に云ふ四攝にては布施の德に當る、黑色、右手に鉤を執り左拳を腰に置く、微細會は右手に三股杵の鉤を持し、左拳頭指を伸べ腰に當て、供養會は蓮上に三股鉤あるを兩手に持つ。

金剛索菩薩

金剛界曼荼羅外廓の南門に位す、四攝の一、梵には傳曰羅幡捨、金剛索と譯し、密號は等引金剛、慈引金剛と稱す、大日如來衆生引入の三昧に住し、此菩薩を生ず、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て金剛引入方便羂索三摩地智を證得して自受用の故に……一切衆生を羂索し、二乘實際三摩地智の淤泥を脫し、覺王法界宮殿に安置し、還り來て一聚に收め……功德戸を衞護する金剛索菩薩の形を成じ、南門の月輪に住す」とあり、顯教の四攝にては愛語の德に當る、白黃色、右手に索、左拳を腰にす、供養會は蓮上に索あるを兩手に持つ。

金剛鈴菩薩

金剛界曼荼羅外廓の北門に位す、四攝の一、梵には縛曰羅吠捨、金剛遍入と譯し、密號は解脫金剛、歡喜金剛と稱す、大日本如來衆生を歸入せしめんが爲、此の菩薩を生ず、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て般若波羅密金剛鈴三摩地智を證得して自受用の故に：……一切衆生の二乘の異見を破り、般若波羅密宮に安置し、還り來て一聚に收め……：金剛鈴菩薩の形を成じ、精進戶を守り北門の月輪に住す」とあり、顯敎の四攝にては同事の德に當る、秘藏記には青色鈴を取るとあれども現圖曼荼羅成身會の尊は左手拳にして右手大頭二指を伸べ、餘を屈して胸に當つ。

金剛光菩薩

金剛界曼荼羅南方寶生如來の四親近の一にして其東方に位す、梵には縛曰羅謎惹と云ひ金剛光と稱す、密號は威德金剛、威光金剛と稱す、福德の威光赫灼たる德に住す、聖位經に、毘盧遮那佛內心に於て、金剛威光三摩地智を證得して自受用の故に……一切衆生の無明愚暗を破り大智光を發し、還り來て一聚に收め……金剛威光菩薩の形を成じ、寶生如來の右邊(寶生、大日に向ふとして)の月輪に住す」とあり、百八名讃には威德、金剛日、最純光、大光燄、金剛輝、大威德、金剛光の七名を以て其德を述ぶ、肉色左拳を

腰に置き右手日形を戴ひて胸に置く、微細會は兩手を以て日形を胸前に捧げ、供養會は蓮上に日形あるを兩手に持つ。

金剛寶菩薩

金剛界曼荼羅南方寶生如來の四親近の一にして其北方に位す、梵には縛曰羅恒曩翻して金剛寶と云ひ、密號を大寶金剛、如意金剛、庫藏金剛と稱す、百八名讃には、寶金剛、妙金剛、義金剛、虛空大摩尼、富饒、金剛藏の名を以て讃す、虛空藏菩薩と同三昧なり、聖位經に「毘盧遮那如來の內心に於て金剛寶灌頂三摩地智を證得して自受用の故に……一切衆生の頂に灌灑して菩薩不退轉の位を獲得し、還り來て一聚に收め……金剛寶菩薩の形を成じ、寶生如來の前の月輪に住す、秘藏記に、肉色左手與願右手承寶とあれども、現圖曼荼羅成身會の尊は右手寶を承くるが如くするも寶珠を持せず、微細會の尊は左手寶を承け右手與願にすれば秘藏記とは左右異れり、供養會は蓮上寶あるを兩手に持す。

金剛笑菩薩

金剛界曼荼羅南方寶生佛の四親近の一にして其北に位す、梵には縛曰羅賀裟、金剛笑と譯す、密號を歡喜金剛と稱す、百八名讃には、金剛笑、微笑、大笑、大希有、樂生歡喜、金剛愛、金剛勝の七名を以て其德を叙す、衆生に灌頂を授けて能所歡喜微笑の境にあり、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て金剛證印授記三摩地智を證得して自受用の故に……不定性の衆生に平等無上菩提の記を授け還り來て一聚に收め……金剛笑菩薩の形を成じ寶生如來の後邊(大日如來に向くとして)の月輪に住す」とあり肉色にして、二手拳にして耳邊に置く、供養會に蓮上に三股を戴せたるを兩手にて持す。

金剛幢菩薩

金剛界曼荼羅南方寶生佛の四親近の一にして其西に位す、地藏菩薩と同三昧なり、梵には縛曰羅針却金剛憧と譯す、密號は圓滿金剛滿願金剛種々金剛と云ふ、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て金剛寶憧三摩地智を證得して自受用の故に……一切衆生の意願を滿たし還り來て一聚に收め……金剛憧菩薩の形を成じて寶生如來の左邊(寶生を大日に向くとして)の月輪に住す」とあり、百八名讃には、金剛憧、善利衆生、金剛幡、善歡喜、寶憧、大金剛、寶杖の七名を以て其德を述ぶ、肉色二手憧幡を持す、供養會は蓮上に憧を立てたるを二手にて持つ。

金剛牙菩薩

金剛界曼荼羅北方不空成就佛の四親近の一、其東方に位す、梵號に縛曰羅(金剛)夜叉(食)と云ひ、金剛食と譯す、密號は猛利金剛護法金剛調伏金剛と稱し百八名讃には、金剛藥叉大方便、金剛牙、甚可怖畏、摧伏魔、金剛峻、暴惡の七名を以て其德を叙す、金剛夜叉明王と同三昧なり、聖位經に「毘盧遮那內心に於て金剛夜叉方便恐怖三摩地智を證得し自受用の故に……剛强難化の衆生を降伏し菩提道に安置し、還り來て一聚に收め……金剛夜叉菩薩の形を成じ、不空成就如來の左邊(不空佛が大日に向くとして)の月輪に住す」とあり、白色にして二拳外に向ひ胸に當つ、微細會は左手を牙の印となし、供養會は蓮上に三股の片方を二箇雙べたるを兩手にて持つ。

金剛拳菩薩

金剛界曼荼羅北方不空成就佛の四親近の一にして其北方に位し、胎藏界曼荼羅には金剛手院第一行第六に位す、梵には縛曰羅敎地と云ひ、金剛合と譯す、密號は秘密金剛、

拳の掌中に三密を握るが故に名く、先づ金剛界より說かば百八名讃には、密合、差現驗能縛、能解放、上勝三昧耶、金剛拳の六名を以て其德を叙す、悉地圓滿の德を主る、聖位經に「毘盧遮那佛の內心に於て金剛拳印威靈應三摩地智を證得し自受用の故に……一切衆生の業障を除て速に世間出世間悉地圓滿を獲せしめ、還り來て一聚に收め……金剛拳菩薩の形を成じて不空成就如來の後(不空佛が大日に向ふとしての月輪に住す、胎藏界は此尊梵號縛曰羅母瑟地と云ふ拳を以て惑業を打破すとなせり、金剛界は青色二拳胸に當つ、供養會は蓮上に二拳を載せたるを兩手にて持つ、胎藏界は白肉色にして左手金剛拳にして臍下に安んじ、右手頭上に十字獨股を持す。

金剛業菩薩

金剛界曼荼羅北方不空成就佛の四親近の一にして、其南方に位す、梵に縛曰羅羯磨、金剛業と譯し、又は尾首羯磨、巧業と譯す、密號は善巧金剛、辨事金剛と稱す、百八名讃には金剛業、敎令、大寬廣、不空、普遍一切處、金剛巧の六名を以て其德を叙し、作業成就の德を主る、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て金剛業虛空庫藏三摩地智を證得して自受用の故に……一切衆生をして一切如來諸菩薩の所に於て廣大の供養を成じ、還り來て

一聚に收めて……金剛業菩薩の形を成じ不空成就如來の前(不空佛が大日如來に向ふとして)の月輪に住す」とあり、肉色二手合掌して頂上に置く、是れ作業舞儀の形なり、供養會は蓮上に羯磨杵あるを兩手に持つ。

金剛護菩薩

金剛界曼荼羅北方不空成就佛の四親近の一にして其西方に位す、梵には縛曰羅羅乞叉、金剛護と譯す、密號は精進金剛、難敵金剛と稱す、百八名讃には、金剛守護、大無畏、甲冑大堅固、難可敵對、妙精進、金剛勤の七名を以て其德を叙し大精進堅固の德に任ず、聖經經に「毘盧遮那佛の內心に於て金剛護莊嚴甲冑三摩地智を證得して自受用の故に……能く暴惡恚怒の衆生を除き速に大慈心を獲て、還り來て一聚に收め……金剛護菩薩の形を成じ、不空成就如來の右邊(不空佛が大日如來に向くとして)の月輪に住す」とあり、秘藏記は青色、二手各頭指を舒べ餘を屈し腋の側に當つとあれども、成身會は二手拳にして胸に當て、微細會は右手劍、左手は拳にして頭指を伸べ胸に置き、供養會は蓮上に甲冑を載せたるを兩手に持つ。

金剛因菩薩

金剛界曼荼羅西方阿彌陀佛の四親近の一にして其北方に位す、梵に縛曰羅計都を金剛因と譯す、密號は不退金剛、菩提金剛と云ふ、百八名讃には、金剛因、金剛輪、大理趣、大堅實、妙轉輪、金剛起、道場の七名を以て其德を叙し、金剛頂經には纏發心轉法輪菩薩と稱せらる、轉法輪菩薩、大輪金剛と同本誓なり、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て金剛因轉法輪三摩地智を證得し、自受用の故に能く一切衆生の惡種子を除き還て一聚に收て金剛因菩薩の形を成じ、觀自在王如來の左邊の月輪に住す」とあり、肉色にして左掌を腰に當て右掌に輪寶を載せ胸に置く、微細會は胸に圓き緣のみの輪を兩手に握り供養會は蓮上に寶珠あるを兩手に持つ。

金剛法菩薩

金剛界曼荼羅西方阿彌陀佛の四親近の一にして其東方に位す、觀自在菩薩と同三昧なり、梵には縛曰羅達磨、金剛法と譯し、密號を淨金剛、正法金剛、蓮花金剛と稱す、百八名讃には金剛法、善利、蓮華、妙淨、觀自在、妙眼金剛眼の七名を以て其德を叙す、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て金剛法清淨無染三摩地智を證得し自受用の故に……一切衆生の五欲の身心を淨除して清淨なると猶蓮華の塵垢に染まざるが如く還り來て一

聚に收めて……金剛法菩薩に形を成して、觀自在王如來の前の月輪に住す」とあり、肉色にして左手に未敷蓮を持し右手之を引開かんとする勢、常の觀音像に同じ、微細會は左手膝上に仰け大指を屈し、右手は大頭を捻し餘を伸たる說法印なり、供養會は獨股を基としたる未敷蓮を蓮上に竪て兩手之を持つ。

金剛利菩薩

金剛界曼荼羅西方阿彌陀佛の四親近の一にして、其南に位す、梵には縛曰羅底乞灑拏、金剛劍と譯す、密號を般若金剛、罪除金剛と稱す、百八名讃には金剛利、摩訶術、金剛劍、大器枝、文殊師利、甚深、金剛慧の七名を以て其德を叙ぶ、文殊師利菩薩と同三昧なり、聖位經に「毘盧遮那佛の內心に於て金剛利劍、般若波羅密三摩地智を證得し自受用の故に……一切衆生の結使を斷じ、諸の苦惱を離れ、還り來て一聚に收め……金剛劍菩薩の形を成じ、觀自在王如來の右邊の月輪に住す」と、金色にして左手蓮上に梵篋ある を持し、左手利劍、供養會は蓮上に利劍あるを兩手に持つ。

金剛語菩薩

金剛界曼荼羅西方阿彌陀佛四親近の一にして其西方に位す、梵には縛曰羅婆瀉、金剛語と譯し、密號は性空金剛、妙語金剛と稱す、百八名讃には、金剛語、妙明、念誦能授悉地、無言說、上悉地、言說の六名を以て其德を叙し、說法無礙の德を司る顯敎にては維摩居士の默の境界に當る、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て金剛密語離言說三摩地智を證得して自受用の故に、能く十方一切衆生の惡慧を除き、四無礙解樂說辯才を得せしめ、還て一聚に收め……金剛語菩薩の形を成じ、觀自在王如來の後の月輪に住す」とあり肉色、左拳腰に安んじ、右手に舌を載せ胸に置く、微細會は左拳腰、右手開て置く施無畏卽ち說法の相なり、供養會は蓮上に三股あるを兩手に持つ。

金剛喜菩薩

金剛界曼荼羅東方阿閦佛の四親近の一、其東方に位す、梵には縛曰羅沙度、金剛善哉と譯す、密號は善哉金剛、讃嘆金剛、安樂金剛と稱す、百八名讃に善哉、歡喜、大悅意、歡喜王、妙薩埵上首、金剛首、喜躍の名を以て其德を讃す、菩提心一切衆生を救濟して同く歡喜の床に住するを三昧となす、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て金剛善哉歡喜勇躍三摩地智を證得して受用するが故に……金剛善哉菩薩の形を成して阿閦如來の後の月輪に住す」と、肉色二手拳にして胸に當つ、微細會は右手彈指形、左手拳の儘なり、供養會は蓮上の寶あるを兩手に持す。

金剛王菩薩

金剛界曼荼羅東方阿閦佛の北方(阿閦を中心とすれば南方なり)に位す、梵には縛曰羅羅惹と云ひ金剛王と譯す、密號は自性金剛、執鉤金剛と稱す、百八名讃には不空王、妙覺、最上金剛王、金剛鉤請引の名を以て其德を讃す、菩提心の德の高きこと比すべきものなき故に此名を附す、聖位經に「毘盧遮那佛如來內心に於て金剛鉤四攝三摩地智を證得して自受用の故に……金剛王菩薩の形を成じ阿閦如來右邊(阿閦が大日に向ふとするが故に)の月輪に住す」とあり、肉色にして二手金剛拳にして腕を交て抱く、供養會は鉤上に三股鉤二本を竪てたるを兩手にて持す。

金剛愛菩薩

金剛界曼荼羅東方阿閦佛の南に位す、梵に縛曰羅羅誐、金剛愛と譯す、密號は大悲金剛、利樂金剛と云ふ、百八名讃に調伏、魔羅欲、愛染、大樂、弓、箭、大金剛の名を以てし、略出經に

は金剛妻と稱せらる、菩提心の功德能く衆生を愛憐するの德に住す、愛染明王は此菩薩と同三昧なり、聖位經に「毘盧遮佛內心に於て金剛愛大悲箭三摩地智を證得して自受用の故に金剛愛菩薩の形を成じ阿閦如來の左邊(阿閦佛が大月に面するとして)の月輪に住す」とあり、肉色にして右手には箭の筈を持し左手には簇を持し箭を射るが如くす、微細會は左に弓、右に箭にて射る形となし、供養會は蓮上に三形を載せたるを持す。

金剛燈菩薩

金剛界曼荼羅外廓西北の隅に位す、外の四供養の一、梵には縛曰羅路計、金剛燈と譯す、密號は普賢金剛、除闇金剛と云ふ、阿彌陀佛、大日如來を供養せんが爲めに光明三昧に入りて此菩薩を生ず、金剛頂經に「觀自在王如來毘盧遮那如來の供養に答へ奉らんが爲に、一切如來の光明供養三昧耶に入り生ずる所を金剛三摩地と名け、一切如來の女使なり、自心より縛曰羅(金剛)路計(燈)を出す」とあり、聖位經に「一切衆生の無明住地を破して如來淸淨五眼を獲得す」と說く、白色、兩手に燈器を持す、微細會は跪き、供養會は蓮上に燈を載せたるを兩手に持つ。

金剛香菩薩

金剛界曼荼羅外廓の東南の隅に位す、外の四供養の一、梵には縛曰羅度籠、金剛香と譯す、密號は無礙金剛、速疾金剛と稱す、阿閦佛大日如來を供養せんが爲めに、遍滿無礙香の三昧に入り此の菩薩を生ず、金剛頂經に「不動如來、毘盧遮那如來の供養に答へ奉るが故に、一切如來能懌悅の三昧耶に入り生ずる所を金剛三摩地と名く、一切如來の婢使なり、自心より縛曰羅(金剛)杜閉(香)を出す」とあり、聖位經には「一切衆生の臭穢煩惱を破除して遍悅無礙智香を獲得す」と云ふ、黑色、兩手に柄香爐を持つ、微細會の尊は跪き、供養會は蓮上に香爐を載す。

金剛塗香菩薩

金剛曼荼羅外廓東北の隅に位す、梵には縛曰羅献茅、金剛塗香と譯す、密號を淸凉金剛勝淨金剛と稱す、外の四供養の一、不空成就佛自ら大日如來を供養せんが爲めに淸凉塗香の三昧に入り此菩薩を出す、金剛頂經に「不空成就如來、毘遮那如來の供養に答へ奉ちんが故に、一切如來の塗香供養の三昧耶に入りて生る所を金剛三摩地と名く、一

切如來の婢使なり、自心より縛曰羅(金剛)献題(塗)を出す」とあり、聖經には「一切衆生の身に成業非律儀過を破り、五分無漏法身を獲得す」と說く、青色、左手に塗香器を持し、右手の小指を器中に入れ餘指を屈す、微細會は塗香器、右手を拳にす、是れ塗る形ならん、供養會は蓮上に塗香器を載せたるを兩手にて持つ。

金剛華菩薩

金剛界曼荼羅外廓の西南の隅に住す、外の四供養の一、梵號は縛曰羅補澁閉と云ひ金剛華と譯す、密號は妙色金剛淸淨金剛と稱し、寶生佛大日如來を供養せんが爲めに、妙嚴覺華の三昧に入りたる菩薩なり、金剛頂經に「寶生如來、毘盧遮那如來の供養に答へ奉らんが故に、寶莊嚴の供養三昧に入り生る所を金剛三摩地と名く、一切如來承旨の大天女なり、自心より囀曰羅(金剛)補澁閉(華)を出す」とあり、聖位經には「一切衆生の迷惑を破り、心花を開敷して無染智を證す」と說く、淺黃色にして盤に未敷蓮花を載せたるを右に持し左を添へ、微細會は荷葉に未敷蓮花を載せたるを兩手に捧げて跪き、供養會は蓮上に妙華を載せて兩手に持つ。

金剛舞菩薩

金剛界曼荼羅大月輪の東北に位す、內の四供養の一、梵には縛曰羅涅諦、金剛舞と譯し、密號を神道金剛妙通金剛と稱す、大日如來不空成就佛を供養せんが爲めに此神變遊舞の三昧に入る、聖位經に「毘盧遮那佛內心に於て金剛法舞神通遊戲三摩地智を證得し自受用の故に……一切衆生の無智無明を破り六通自在遊戲を獲得し還り來て一聚に收め……金剛法舞天女菩薩の形を成じ、毘盧遮那佛東北の隅の月輪に住す」と、青色左右手各開き左は腰に右は胸に當て、舞勢をなし、微細會は左を右の膝上に垂れ、右は頭指小指を竪て餘指を屈し胸に置き肘を張り、供養會は蓮上寶珠あるを兩手に持つ。

金剛歌菩薩

金剛界曼荼羅大月輪の西北の隅に住す、梵號には縛曰羅儗諦、金剛歌と譯す、密號は無畏金剛、妙音金剛と稱す、是れ內の四供養の一にして、大日如來自ら阿彌陀佛を供養せんが爲めに歌詠三昧に入り給ふなり、聖位經に毘盧遮那佛內心に於て金剛歌詠淨妙法音三摩地智を證得し自受用の故に……能く一切衆生をして語業の戲論を破除せしめ、六十四梵音具足を獲得し、還り來て一聚に收め、金剛歌詠天女菩薩の形を成し、

毘盧遮那佛の西北の隅の月輪に住す」と、白肉色にして左に箜篌を持ち右手之を彈ず、供養會蓮は上に箜篌あるを兩手に持つ。

金剛嬉戲菩薩

金剛界曼荼羅大月輪の東南の隅に位す、内の四供養の一にして梵には縛曰羅羅細、金剛戲と譯す、密號は普敎金剛と稱す、大日如來自ら阿閦佛を供養せんが爲めに此の適悅嬉戲の三昧に入る、聖位經に「毘盧遮那佛内心に於て金剛嬉戲法樂標幟三摩地智を證得して自受用の故に……凡夫貧染の世樂を破り嬉戲法圓滿安樂を獲得して還り來て一聚に收め……金剛嬉戲天女形菩薩の形を成じ、毘盧遮那如來東南の隅の月輪に住す」と、黑色にして二拳腰に置く、微細會は兩手を開き腰に置き、供養會は蓮上に三股を竪てたるを兩手に持つ。

金剛鬘菩薩

金剛界曼荼羅中の大月輪の西南の隅に位す、内の四供養の一、梵には縛曰羅磨梨、金剛鬘と譯す、密號を妙嚴金剛、妙嚴の德に住す、聖位經に「毘盧遮那佛内心に於て金剛花鬘菩薩分法三摩地智を證得し自受用の故に……諸の衆生の醜陋の形を餘て三十二相八種隨身を獲得し、還り來て一聚に收め……金剛花鬘菩薩の形を成じ毘盧遮那如來西南の隅の月輪に住す」と、白黃色にして兩手に花鬘を把り胸の前に横ふ、供養會は左手蓮上に華あるを持し、右拳胸に當つ、供養會三十二菩薩中にて此尊のみ左右手を異にす。

欲金剛菩薩

金剛界理趣會曼荼羅の金剛薩埵の前に位す、衆生の大貪欲卽ち如來無緣の大悲心もて衆生を攝受するの大慾なりと開顯するを其三昧とす、或は意生金剛、眼箭と云ふ、金剛界曼荼羅理趣會の像は赤色にして右手に箭筈を持し、左手に簇を持すること成身會の愛菩薩の如し。

金剛鋭菩薩

金剛界曼荼羅金剛手院第三行第二に位す、梵には阿利也佉也都、金剛鋭と譯す、密號は又迅金剛と稱し、如來勇猛精進の德を主る故に鋭と名く、肉色にして左手蓮台上に三

股格を安んじたるを持し、右手は無名二小指を屈し餘を竪てたる刀印になし、右膝を立て赤蓮花に坐す。

香象菩薩

金剛界曼荼羅の外金剛部院の南方に位す、梵には健陀(香)賀悉底多儞(象)、香象と譯す、密號は大力金剛又は護戒金剛と稱す、賢劫十六尊の一、諸行滿足の德に住す、白肉色にして右に蓮上に香器を載せたるを持し、左拳を腰にす。

智幢菩薩

金剛界曼荼羅外廓の南方の西端に位す、賢劫十六尊の一、梵には枳壤髮斗都、智幢と譯し、密號は圓滿金剛と稱す、高く大智の幢幡を竪てゝ戲論を破るを德とす、白肉色にして、右手幢左拳腰に安んず。

大精進菩薩

金剛界曼荼羅外廓の南方に位す、賢劫十六尊の一、勇猛、又は大勇猛とも名く、梵には輸曜野、勇猛と譯し、密號は不退金剛と稱す、肉色にして、右一股戟を持し、左拳腰に安ず。

無盡意菩薩

金剛界曼荼羅外廓北方に位す、梵には惡乞灑野摩底野と云ひ無盡意と譯す、密號は定慧金剛、無盡金剛と稱す、賢劫十六尊の一、白色にして右手梵篋、左は拳なり。

無量光菩薩

金剛界曼荼羅外廓の西方の南端に位す、梵には阿彌多鉢羅波野、無量光と譯す、密號は大明金剛、離染金剛と稱す、賢劫十六尊の一、又甘露光菩薩とも名く、赤肉色にして、右に蓮上光あるを持し左を伏て膝に置く。

辯積菩薩

金剛界曼荼羅外廓北方に位す、梵には鉢羅底賀多俱吒野、無礙積と譯す、密號は巧辯金剛、大慧金剛と云ふ、賢劫十六尊の一、白肉色にして、右に蓮上雲あるを持し、左拳を腰にす。

香王菩薩

香は周遍の義、王は自在の義とす、梵語の健陀羅曷羅社也を香王と翻せり、此尊は觀音部と菩薩部とに兩屬せらるゝが故に一には香王觀音とも稱す、本經に「身肉皆白なり而貌端正にして頭に天冠を頂き頸に瓔珞あり、左臂垂下して五指皆申て施無畏の手なり、其五指の端各甘露を雨らし五道の衆生に施す、手の下に並て黑鬼三五箇あり、左臂肘を屈して手を左嬾に當てゝ以て蓮花を把る、其花は足の下の蓮花より出生せり、足下の蓮花は赤白紅色なり、頂背に圓光あり上に傘蓋あり、五色錦綺を以て衣服と爲し、兩重の珠條膊の上を絡へり、一は赤色一は黃色なり。

妙見菩薩

尊星王とも云ふ、北極星は諸星の王なれば此名あるなり、北極星を佛格化したるなり故に或は北辰尊星妙見大菩薩と稱す、七佛神咒經に「我北辰菩薩名けて妙見と曰ふ、今神咒を說き國土を擁護せんと欲す、所作甚だ奇特の故に妙見と名く」閻浮提に處し衆星中最勝、神仙中の仙菩薩の大將廣く諸群生を濟ふ」と記されたり、印融鈔は「眼精特に清潔にして善く物を見給ふ故に妙見と稱す」となすは、此菩薩が善惡を記錄するに依るものなり、薄草訣に「妙見法と北斗法とは開合の不同なり、合する時は妙見と云ひ開く時は北斗と云ふ、妙見種々利益方便の時七星と顯る、故に妙見七星を持す、是れ其旨を表す」とありて、北斗と稱すれば七星を本尊とし、妙見と稱すれば一尊を本尊とす、此尊の曼荼羅に種々異像あり、尊星王軌には「當に中央の大月輪中に菩薩像を畫け、左手に蓮花を持し蓮花上に北斗七星形を作し、右手說法印を作し五指並に上に向ひ、大指を以て頭指の頭側を捻し、掌外に向ひ、天衣瓔珞其身を莊嚴し五色雲中に結跏趺坐す」とあり、北辰別行法には「衆生有つて壽星を增さんと欲するものは、四臂菩薩像を畫作すべし、赤白肉色嚬眉にして慈怒、右の第一手に筆を持し、第二手に月輪を持し、左第一手に紀纏を持し、第二手に日輪を持し、馳走せる青龍の背の上に立ち右足を上げ、右邊に持硯使者を畫く形夜叉の如く黑雲中に現ず」とあり。

金剛の意義

金剛とは世間の金剛石の堅固と利用の二德あるが如く、如來實相の智も此の二德を具する故に名けたるものにして、事鈔に「金剛界は智なる故に金剛を以て如來の實智

に喩ふ、世間の金剛に二の德あり、一には堅不壞の德、二には利用摧破の德、如來の實智も亦復是の如し、謂はく佛智は迷悟に遍在して增減あることなく、世の金剛の堅固不壞なるが如く、又佛智は惑障を摧破し極理を顯證す、世の金剛に利用摧破の德あるが如し」と、故に眞言宗は宗名を或は、金剛頂宗と名け、大日如來の眷屬には十九執金剛十六執金剛等あり、凡て諸佛菩薩にも皆金剛名を附し灌頂の時は金剛名に依りて呼び、法具並に印明にも多く金剛の名を冠らしむ、例へば金剛盤、金剛線、金剛鈴(法具)金剛炎、金剛網、金剛部三昧耶(印明)の如し。

十九執金剛

大日如來の內眷屬にて大日經の初めに列するを云ふ、皆菩提心の功德相なり、十九の數に就て十は陰の滿數九は陽の滿數なれば、此十九執金剛は理智一切の諸尊を盡すとなす、一義には顯敎の瑜伽論の十九無知に對して十九差別智印となし、或は金剛手は總にして十八金剛は九尊の理智の數なりとす、其名を列すれば虛空無垢、虛空遊步、虛空生、被雜色衣、善行步、住一切法平等、哀愍無量衆生界、那羅延力、大那羅延力、妙、勝、迅、無垢、刀、迅、如來甲、如來句生、住無戲論、如來十力生、無垢眼、金剛手秘秘主是なり。

十六執金剛

十六の金剛衆を云ふ出生義には「下方に十六執金剛神なり」と、永嚴の義は八方天夫妻なり、夫妻八なるが故に二八十六なりとす、或說には十六執金剛は十六菩薩の因位惑障にて、卽ち衆生の心王心數を云ふ、と此十六執金剛は胎藏界の十九執金剛に對す。

四執金剛

(一)灌頂の小壇卽ち新阿闍梨の供養を受くる壇の四門の守護の金剛を云ふ、東南住無戲論金剛、西南虛空無垢金剛、西北無垢眼金剛、東北被雜色衆生金剛なり、(二)金剛界現圖曼荼羅の地水火風の四大神を一に四執金剛と云ふ。

金剛使者

金剛部の諸菩薩に奉仕する尊を云ふ、胎藏界金剛手院金剛手持菩薩の前にあるものは、忿怒形にして右手胸に當て左手獨股を執り、兩足蓮華を踏み驅使の體をなす、本尊の異なるに隨て其形像も自ら異なり。

金剛使者女

金剛部の菩薩に奉仕する女形の尊を云ふ、胎藏界曼荼羅の金剛手院には、金剛手持菩薩の傍に男使と共にあり、右に劍を持し左に牙印を結ぶが如き類にして、所奉の本尊の異るに從て其形も異るなり。

金剛愛菩薩の異名、秘藏記に其意を說て曰く、金剛薩埵を夫と爲し愛染王を妻となす、金剛薩埵は菩提心の德を主どる是慧也、愛染王は大悲の德を主どる是妻なり、故に金剛薩埵の妻と之を訓むべし」と。

意生金剛女

金剛界九會曼荼羅理趣會には常の外供養を內供養となし金剛香菩薩を意生金剛の女性となせり。

意氣金剛女

金剛界九會曼荼羅の理越會には常の外供養の菩薩を內供養となし、金剛塗香菩薩を以て意氣金剛の女性となす。

金剛薩埵

金剛界曼荼羅羯磨會には東方阿閦佛の前に位し、理趣會には十七尊の主尊として位し、胎藏界曼荼羅には金剛手院の主尊として坐す、梵には縛日羅薩埵と稱し、金剛有情となるを、上半は譯語を用ひ下半原語を其儘用たるものなり、密號は眞如金剛又は大勇金剛と稱し、或は金剛手、執金剛秘密主、持金剛具慧者、普賢薩埵等と稱せらる、略出經に「一切衆生所有の心堅固菩提を薩埵と名け、心不動の三摩地に位し精勤決定するを金剛と名く」とあり、吾人淨菩提心の堅固不壞なるに名くるなり、大樂軌には「此菩薩を本是れ普賢なり、毘盧遮那佛の二手の掌より親く五智金剛杵を受け、卽ち灌頂を與られ金剛手と爲る」とあり、五秘密儀には「金剛薩埵とは是れ普賢卽ち一切如來の長子なり」一切如來の菩提心なり是れ一切如來の祖師なり」とあり、此の如く種々に說述せられたるを以て其本誓自ら多趣に岐れたり、今暫く之を五種に別てば阿閦の四親近の一なる尊、理趣會上の尊、金剛手院の主尊、大日如來內眷屬の主尊、付法第二祖是なり、而て通じては吾人衆生の代表者なり、第一阿閦四親近の尊は、聖位經に「毘盧遮那佛心に於て金剛薩埵勇猛菩提心三摩地智を證得し自受用の故に、金剛薩埵勇猛菩提心三摩地智より五峯金剛の光明を流出して、遍く十方世界を照して一切衆生をして頓に普賢行を證し、還り來て一聚に收り、一切菩薩をして三摩地智を受用せしめんが爲めの故に金剛薩埵菩薩の形を成じ、阿閦如來の前の月輪に住す」とあり、金剛界曼荼羅羯磨會及理趣會の像は右手に五股杵を不縱不橫に持して胸に當て、左手に金剛鈴を持して腰に置く。

大勝金剛

大勝金剛は最も秘佛と傳ふる尊にして、此名は瑜祇經一切如來大勝金剛心瑜伽成就品七、同一切如來大勝金剛頂最勝眞實大三昧耶品第八の二品名の大勝金剛を採りて名けたるものなり、若臺密の如く瑜祇經が大勝金剛の三昧を說きたるものとせば、大勝金剛が大日如來直に現じ給ふの尊となるべく、東密の如く瑜祇經が愛染明王の三昧を說きたるものとせば、此尊は金剛薩埵所變十二臂明王にて、愛染明王の一德となるべく、また瑜祇經に「最尊獨り無比にして此大轉輪王なり能く諸の佛頂を摧き」云々とある所よりせば、攝一切佛頂輪王に似たり、故に此尊を扱ふに臺密にては直に大日如來所變として、最尊無上の尊となし、仁和寺方にては愛染明王となし、三寶院方にては大佛頂となすとの三種あり、玆を以て此尊は明王部なりや菩薩部なりや佛頂部なりや諸說一定せず、覺禪鈔は明王部に入れ、祕鈔圖像鈔五十卷鈔は菩薩部に入れ、薄草訣は佛頂部に編す、而して大勝金剛は吾人の根本無明なれば、瑜祇經に曰く「時に薄伽梵面門微笑して金剛手及び諸の菩薩等に告て言く、此障は何より而も來れる一の吽衆生の本有の障、無始無覺の中より來れる本有俱生障、自我所生障、無始無初際の本有

俱本の輪なり、時に障者忽然として身を現じて金剛薩埵の形を作る」とあり、卽ち根本無明忽然として淨菩提心となるの意なり、瑜祇經に「爾の時に遍照薄伽梵復種々の光明を現じ給へり、頂上より金剛威怒の光明を放て諸の菩薩を照す、金剛手等皆各々默然たり、復身手を現し十二臂を具ふ、智拳印を持し、復五峰金剛と蓮華と摩尼と羯磨と鈎と索と鑽と鈴と智劍と法輪との十二大印を持す、身千乘の大白蓮花に住して身色日の如し、五髻に光明あり其光無主にして十方に遍す」とありて、十二臂の尊像なり。

隨心金剛

金剛部忿怒身、梵には鷄利槃羅と云ふ、金剛薩埵の眷屬たる觸金剛と同名なり、或は金剛隨心菩薩とも呼ぶ、諸夜叉降伏の尊なり、忿怒形にして火炎髮あり、右手を張出して獨股杵を持し、左手を胎拳にして腰に當て、右手を擧て磐石上に立つ。

慢金剛

金剛界曼荼羅理趣會の金剛薩埵の左に位す、梵には摩隷縛曰羅、慢金剛と譯す、衆生の傲慢の心卽ち如來大悲の本誓の高擧なる境界なりと開顯するを其三昧とす、或は意

氣金剛、一切自在主、金剛自在と稱す、金色にして二拳肘を張て膝に置く。

觸金剛

金剛界曼荼羅理趣會の金剛薩埵の右に位す、梵には計里吉羅縛曰羅と云ひ、衆生の染汗の觸覺卽ち如來大悲適悅の境なりと開顯するは此菩薩の三昧なり、或髻利吉羅金剛、金剛喜悅と云ふ金剛界曼荼羅理趣會の像は、白色にして、兩手を胎拳にして頭指を竪て鉤形にし、而して胸に三股杵を竪て、兩腕を以て左を下にして此三股杵を抱く、五祕密曼荼羅の像は金剛薩埵を後より抱く。

愛樂金剛

金剛界曼荼羅理趣會の金剛薩埵の後に位す、梵には羅佉縛曰羅、愛金剛と譯す、衆生の愛欲戀着卽ち如來大悲の衆生を愛愍するの境界なりと開顯するを三味とす、青色にして兩手に摩羯幢を持す。

忙莽鷄金剛

金剛部の部母、梵には忙莽鷄、胎藏界曼荼羅の金剛手院の金剛薩埵の上に位す、大疏には「忙は言く女の義莽計は亦是れ多の義」、また「忙莽鷄は謂ゆる金剛部の母なり、亦金剛譽杵を持し諸の瓔珞を以て身を嚴れり、此は是れ金剛智力を出生する三昧なり」と說く、然るに瞿醯經には「莽麼計三部の母に通ず」となす、軍荼利軌に功德を說て「部母の印の加持に由るが故に、速に悉地を現前することを得、一切の魔障悉く皆遠離し、人間所有の怨敵不善心の者皆摧滅することを得て大慈心を發す」と、大日經には「忙莽鷄亦堅慧杵を持し、身を嚴るに瓔珞を以てす」とあり、胎藏界曼荼羅の像は左に三股杵を持し、右を與願にす、軍荼利軌の說は左手五股杵、右手施無畏なり、然るに菩提場經には、此尊を般若菩薩の所變となし、應に摩莫枳菩薩を畫くべし、淡紫青色にして種々瓔珞もて莊嚴し、蓮華に坐し、身儀寂靜にして般若波羅密の自性に住し、右手に梵篋を持し、左手に眞多摩尼を持し施願の勢になすとあり。

虛空無垢持金剛

胎藏界曼荼羅金剛手院第二行第一に位す、梵には誐々娜摩羅縛曰囉汰洛虛空無垢と譯し、密號は離染金剛と稱す、十九執金剛の第一及び十六執金剛の第一と同本誓なり、

淨菩提心は虛空の無垢無染なるが如き故に名く、肉色にして左手獨股、右手與願にし肩の下に平掌にして置き、赤蓮華に坐す。

等妙金剛

胎藏界曼荼羅金剛手院第三行第六に位す、梵には蘇縛曰羅駄洛、蘇妙金剛持と譯し、密號は細細金剛と云ふ、佛の內證を司る、肉色にして右手大頭兩指を立て、其間に獨股を竪て餘の三指を屈し、左手に忿怒三股を持して膝上に安んじ赤蓮に坐す。

大輪金剛菩薩

胎藏界曼荼羅金剛手院第三行第一に金剛輪持菩薩として坐するは此尊なり、梵には阿里也斫羯羅縛曰羅駄洛と云ひ聖輪金剛持と譯し、密號は摧伏金剛と稱す、法輪を轉じて惑障を斷ずるを示すとす、肉色にして右手の頭指頭に金輪を持し、左手を膝上に伏す。

大力金剛

胎藏界曼荼羅金剛手院第一行金剛薩埵の前に位する使者なり、梵には摩縛囉と云ひ大力と譯す、忿怒形にして青色、左手に獨股杵を執り蓮花を踏む、又香象菩薩の金剛名なり。

勝三世金剛

或は聖三世と書す胎藏界曼荼羅持明院北端にあり、梵には阿利也怛隷路迦縛曰縛野、密號を最勝金剛と稱す、降三世明王と同體異名なれども、此院に特に勝三世降三世兩尊を列す、青色頭髮馬王髻の如し三目にして雙牙上に向ふ、左に三股杵を持し、右に兩頭に三股杵の付きたる戟を持し磐石に坐し迦樓羅炎に圍まる、大日經に「勝三世は威猛にして焰圍繞し、寶冠あり、金剛を持せり、自の身命を顧ず專請して敎を受く」とあり。

金剛童子

金剛童子に青童子黃童子の別あり、金剛童子念誦法は無量壽佛の化身として黃童子二臂の像を說き、金剛童子儀軌は金剛手菩薩の所變として二臂六臂の二像を說く、梵には縛日羅俱摩羅と云ひ金剛童子と譯すと稱するも、此梵名は普通名詞ならん、或は

此尊を金剛兒と呼び、蘇婆胡童子と同一となせども不明なり、金剛童子念誦法には「遍身光焰なること日の如く天魔軍を摧伏し神力無比なり」と說く、金剛童子念誦法には次に本尊の像を畫け長一尺五寸面して丁字立に作せ、足に青蓮華を踏み身を黃金色に作せ、髮赤にして上に繚亂し、種々諸の瓔珞環釧を以て身を嚴り、虎皮を以て跨を漫へ、左に拔折羅を執り右下は施無畏にし、當に極迅形に作るべし、左に一金剛を畫け、四臂黃雲色にして杵と輪と索と刀とを執る、右の兩臂使者一手拳印に作し、次に却鉢羅を持し腰臂瞭に付纏ひ、前に俱摩羅衆八部衆圍繞し上に五色の祥雲あり、諸天妙華を散じ忉利天王軍四王各使者及び頻那夜迦皆諸命奉敎す」とあり。

秋金剛

理趣會曼荼羅にては、內供養の四菩薩を外供養に出して、金剛歌菩薩を秋金剛、時秋金剛と名く。

夏金剛

理趣會曼荼羅にては內供養の四菩薩を外供養に出して、金剛花靈菩薩を夏金剛、時夏金剛、時雨金剛、雲金剛と名く。

髻利吉羅金剛女

理趣會には外の四供養を內供養となし、金剛花菩薩を髻利吉羅金剛の女性とす。

青面金剛

忿怒明王にて、庚申祭の本尊とせらる、此尊は台密の所傳にして、集經には其形像を忿怒形四手となし、左に三股杵捧、右に輪羂索となせども、今日所傳の像は八臂にして、阿闍梨作意の像なり、三猿等を眷屬とするは三諦の旨を標す。

密跡金剛

執金剛の異名、總卽別に依りて今は仁王尊の別名となす、密跡の字は大疏第一に金剛秘密主を解する時に「西方には夜叉を謂て秘密と爲す、其身口意を以て卽速隱秘にして了知すべきこと難きが故に、舊翻には或は密跡と云ふ、若し淺略に義を明さば秘密主とは卽ち夜叉王にて、金剛杵を執て常に侍衞す、故に金剛手と曰ふ」とあり、正法念經

には「第二夫人は二子を生めり、一は梵王と爲て、千兄に法輪を請ふことを願ひ、次は密跡金剛神と爲し、千兄の敎法を護らんことを願ふ」とあり。

仁王尊

寺院の門の左右に安置せらるゝ阿吽の二像を云ふ、是れ不可越と相向の二體の守門神なり、或は密跡金剛、密跡力士、執金剛神、那羅延金剛とも云ふ、大日經には「門口に二の守護あり、不可越と相向なり、手を擬て而て指を上げ、朱目にして忿怒形なり、慇懃に隅角に輸羅獨股杵(焰光の印を畫せよ」とあり、大疏第十には「守護者の眞言、此は卽ち是れ不可越なり、正しく難持となす」謂く力持の義、觀瞻不可得なり、亦難降伏の義あり、法佛の奉敎者は常に內門の右邊に在る也、名けて不可越使者となす、諸佛の三昧の威力をば過越すべからざるなり」拾三には「相向金剛猶難勝と門を挾て相對するが故に名を得」とあり、「阿闍梨所傳曼荼羅も通門に此二尊を安置す、是を後に二尊なれば二王尊と云ひ、又仁王尊と書す、卽ち右は不可越守護左は相向守護なり、此二尊を門に安置する理由は秘藏記に「諸寺門に金剛形像を造立する所以如何、答ふ金剛は智也、此智煩惱を摧滅すること、譬ば金剛の强力にして、諸物を摧破するが如し其心の實相門を開發するは智慧を以てするが故に、先づ門に金剛を立てゝ內に佛身を置く」となす、然るに仁王門功德鑑等の諸說は寶積經等の因緣を引きて密跡金剛は固一尊なるを二尊に分ちたるものなりとなし、密跡と力士、密跡と金剛、または密跡金剛と那羅延金剛の兩軀となす、是れ臆說なり、大日經密印品及び靑軌には、不可越は左手右開きて頭の邊に擧げ、右手は金剛拳にして頭指を立て胸の前に置く、是れ獨股印なり、相向は左手胎拳にして高く擧げて物を打つの勢をなす、是に大日經悉地出現品の朱目忿怒形と其の傍に獨股あるを以て、今の仁王尊は赤色にして右邊の尊左手を擧げ、左に獨股を持し左邊の尊右手を擧げて物を打つの勢を爲す、不可越は智德男性なれば口を閉ぢ、相向は理德女性なれば口を開く是を阿吽の兩德と稱す。

密跡力士

仁王尊の異名とす、大寶積經の密跡力士會に「其一法意の曰く吾誓て諸人成佛時に、當に金剛力士と作て其法を護持せん」とあるに基きたるものにて、右邊の尊を密跡金剛と云ひ、左邊の尊を力士金剛と稱するが如きは後人の說なり。

那羅延金剛

(一)仁王尊の異名、那羅延は堅固力士と翻する故に、仁王尊の力量の勝れたるを以て名けたるもの(二)大日經の十九執金剛中の一。

金剛無勝結護者

胎藏界曼荼羅の南門の守護神なり、大日經に「黑色にして玄衣なり、毗俱胝形にして眉間に浪の文あり、上に髮冠を頂き、自身に威光ありて衆生界を照す、手に檀荼を持し大に障を爲す者を壞す」とあり。

天部の意義

金胎兩部曼荼羅の外金剛部に在る諸天諸鬼神を指して、天部と云ひ、內には佛菩薩の變化身あり、日月星辰あり、實在の人間あり、仙人あり、器物の神格化せるあり、又惡神惡鬼あり、而かも此れ皆佛法を守護して、其流布を扶け、衆生の福利を圖るものと爲せり、勿論惡神は惡者を懲して、改善せしむる爲め、佛菩薩の方便として使用するものたり。天部は總て吾人々類と相近似し、其嗜好趣味又相類するを以て、此を供養するには、總て人類相互の間に用ゆる餐饗を以てするを常とし、佛に對する香花の如きよりは、實際的の飲食物を供するを以て、靈驗著しと爲せり。

護法天童

佛法を守護する諸天諸童子を云ふ、卽ち十二天八大童子の如き是なり。

守門天

門を守護する尊にして胎藏界曼荼羅の東門に二男二女の天尊を畫く、二尊は劍、二尊は獨股杵を持す。

八部

又は八部衆とも云ふ、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽を云ふ、皆胎藏界曼荼羅外金剛部院にあり。

二十八部衆

觀世音菩薩等に侍する二十八天を云ふ、婆藪仙人(吉祥天女)那羅延天、密迹金剛、大梵天、帝釋天、摩醯盲羅、東方天、金色孔雀王、增長天、毘沙門天、廣目天、摩和羅女、滿善車王、神母天、五部淨、難陀龍王、迦樓羅王、緊那羅王、摩羅羅王、阿修羅王、金大王、乾闥婆王、沙迦羅王、金毘羅王、滿仙王、散指大將、畢婆迦羅王と稱す。

八方天